日本武道学会第55回大会 研究発表抄録

期 日 令和 4 年 9 月 3 日(土) · 9 月 4日(日)

会 場 桐蔭横浜大学



日 本 武 道 学 会

Japanese Academy of Budo



ご挨拶

日本武道学会会長 大保木 輝雄

2022 年度第55回全国大会は三年振りに対面開催となりました。53・54回大会はコロナ禍によるオンライン開催となり、本部広報委員会には大きな負担をおかけしましたが、53回大会では66題の発表、54回大会では73題の発表があり、本部企画、各分科会の開催についても様々な工夫がなされ、お陰を持ちまして無事終了いたしました。

オンライン開催は事務手続き上の利便さに加え、発表資料が PDF 形式でアップロードされることによって多くの演者との質疑応答ができるようになったこと、各分科会の企画・フォーラムにも参加し易くなってきたこと、対面開催であれば会場に足を運べない方々に加え海外の人々も参加が出来るようになるなど、そのメリットも浮上していると感じています。

それをふまえた本大会は、オンライン開催の経験を活かした新たな対面開催となりました。未だコロナ禍の影響が残る中でこの度の開催をお引き受け下さった桐蔭横浜大学の関係者の皆様、とりわけ大会実行委員長の吉鷹幸春先生、大会事務局の大辻康太・高瀬武志両先生には一方ならぬご尽力を頂いておりますことに感謝申し上げます。また、協賛をいただいております企業の皆様に対しまして、厚く御礼申し上げます。

さて、今回は社会が平常化への摸索を続ける微妙な状況下にもかかわらず、70 題(人文 27、自然 9、指導法 14、ポスター 20)の発表となりました。発表される先生方の志に本学会の新たな展開の息吹を感じております。

本部企画としては、義務教育世代における武道についてのシンポジウムとしてスポーツ 庁地域スポーツ課と中学校現場を熟知されているお二人をお迎えし、お三方それぞれの立ち場から話題を提供いただきます。これは本年6月、公立中学校における休日の運動部活動の地域移行が検討され、来年度から3年間の改革集中期間として全国で推進されることが提言されたことを受けての企画です。義務教育世代の運動・スポーツ活動を地域で行うことが将来的に定着すれば、その場が生涯スポーツの場になりうるとも考えられます。武道に焦点を当てれば、現状と課題、将来の見通しなどの情報を共有し、学術的にアプローチすべき課題であることから、この機会に議論されることを企図してのことです。

さて、昨今のロシアのウクライナ侵攻は、1962年の「キューバ危機」を彷彿させます。 私達団塊世代が中学生のころのことで、第三次世界大戦の勃発と核戦争への恐怖を肌で感 じたことを思い出します。ケネディー大統領は当時、その危機脱出から得た教訓を「かつ て世界大戦はささいな出来事と誤った判断の積み重ねで加速し世界に悲劇をもたらした。 私たちは正しい情報と確固たる意志で行動しなければならない」(1962年12月16日談話) と述べています。この教訓は「武道」が重視している「機会を捉えた行動」の内容と符合 し、「正しい情況認識、適切な判断、迅速な行動」を旨とする競技の鉄則や「彼を知り已 を知れば百戦殆からず」という伝統武道では当たり前の基本姿勢に重なります。今日の状況を生き抜かねばならない我々は、こうした武道の普遍性を再認識すべきなのではないのでしょうか。

対面し相争う者同士が到達すべき「精力善用・自他共栄」という嘉納治五郎の柔道理念は世界に知れ渡っています。これは柔道のみならず日本の伝統的な武道理念を世界の人々にも理解できるように発せられた理念だと見ることも出来ます。そしてそれは、国内におけるジュニア世代に武道とは何かを分かり易く語りかけ、混迷の世界に向けて武道の本質を発信することに繋がると考えるものです。

主

9 月

4 日

日

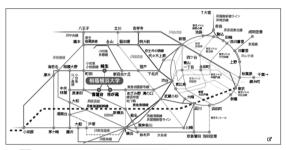
会場までのアクセス

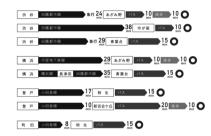
会場:桐蔭横浜大学中央棟

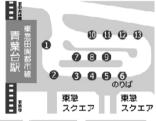
最寄駅:青葉台駅・市が尾駅(田園都市線)

あざみ野駅(田園都市線・市営地下鉄)柿生駅(小田急小田原線)

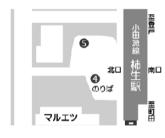
【電車・バスご利用の方】















青葉台駅・市が尾英・柿生駅

駅→桐蔭学園前で下車

※桐蔭学園入口までしかいかないバスもありますのでご注意ください あざみ野駅

「すすき野団地ゆき」「虹が丘営業所ゆき」 あざみ野駅→もみの木台下車(10分)

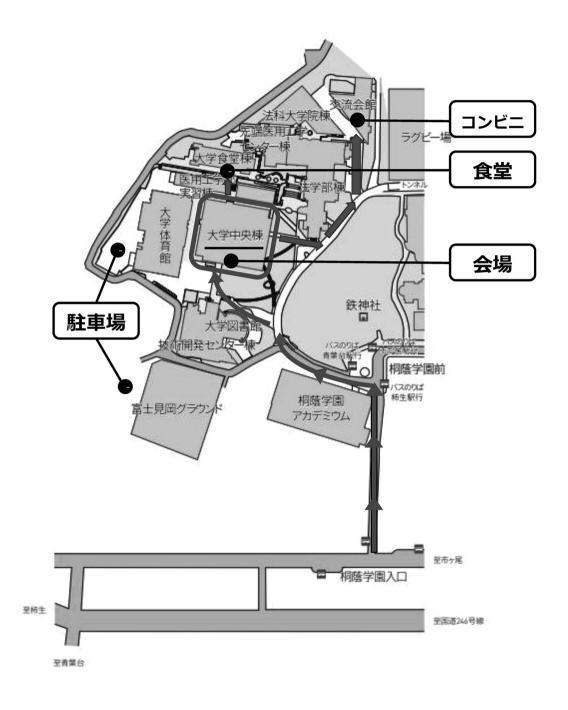
【お車をご利用の方】



☆ご注意ください☆

- ◇学会大会会場は桐蔭横浜大学中央棟にて行います
- ◇お車でお越しの場合は指定の駐車場に停めてください
 - ※駐車場は先着順になります
- ◇桐蔭横浜大学所在地
 - 神奈川県横浜市青葉区鉄町1614

桐蔭横浜大学キャンパスマップ



9

月

3日

主

9

月

4 日

日

会場案内図

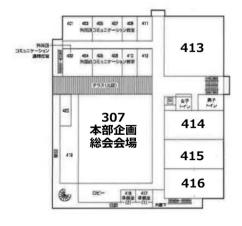
1階



3階



4階



受付	正面玄関前
クローク	101
ポスター発表	クリエイティブスタジオ

総会会場 307 シンポジウム 307

<会議>

理事会304評議員会305

<一般口頭発表>	
人文社会科学系	413
自然科学系	302
武道指導法系	303

<専門分科会>301なぎなた303剣道303弓道304空手道305

413

 <控室>

 役員控室
 416

 会員控室
 306

障害者武道

参加者の皆様へ

1. 参加者の受付は、桐蔭横浜大学・大学中央棟1F正面玄関前にて下記の時間 帯で行います。

> 9月2日(金) 14:00 ~ 16:30 9月3日(土) 8:00 ~ 15:00 9月4日(日) 8:00 ~ 12:00

- ※ 参加申込み済みの会員で<u>参加費を事前納入</u>されている場合は、受付 で領収書および大会参加章(ネームカード)をお受け取りください。
- ※ 参加費未納の会員(参加申込み未登録会員も含む)は、受付で大会参加費(正会員:6,000円、大学院生:4,000円、学部学生:1,000円、大学院生および学部学生は<u>学生証が必要</u>)を収めていただき、領収書および大会参加章をお受け取りください。
- ※ 大会参加章は、<u>大会期間中必ず着用</u>してください。着用がない場合、 入場をお断りすることがあります。
- ※ 会員以外で大会に参加される方は、受付で臨時会員とお申し出いただき、臨時参加費(一般:6,000円、大学院生:4,000円、学部学生:1,000円、大学院生および学部学生は<u>学生証が必要</u>)を収め、領収書および大会参加章をお受け取りください。総会以外は、全て会員と同じ待遇が受けられます。
- 2. 令和4年度の**会員年会費**(一般会員:8,000円、大学院生会員:7,000円、学部学生会員:1,000円)は、受付業務の煩雑さを避けるため大会参加者の受付では納入できません。後日、郵便振替または銀行振り込みで納入をお願い致します。
- 3. 大学周辺に飲食店等はありません。大会期間中の昼食は、大学構内にある<u>食</u> <u>堂(大学食堂棟)、コンビニエンスストア</u>をご利用ください。
- 4. 宿泊が必要な場合は、各自でご手配ください。
- 5. 本大会の発表資料は大会特設サイトからご覧いただけます(会場での資料配布はありません)。事前にダウンロード・印刷などしていただくか、あるいはPC やタブレット端末を会場にご持参いただき、会場のWi-Fi 等に接続して資料をご覧ください。
- 6. 大会参加中は不織布マスクを着用いただくとともに、手洗い・手指消毒の励 行につとめていただき、会場校の感染対策マニュアルにしたがってください。

座長の皆様へ

口頭およびポスター発表の座長の皆様は、担当される演題の発表時間 15 分前までには、発表会場受付にお越しください。

<口頭発表の座長>

- 1. 口頭発表の発表時間は発表 12 分、質疑応答 3 分の合計 15 分です。発表時間 に関する卓上鈴での合図は以下の通りとなります。
 - · 第1鈴 発表終了2分前
 - ・ 第2鈴 発表終了と質疑応答開始
 - 第3鈴 質疑応答終了
- 2. 座長は質疑応答に際し、「質問者は、所属・氏名を述べた後、簡潔に質問するよう」にご指示ください。
- 3. 座長は、発表時間厳守での進行をお願いします。

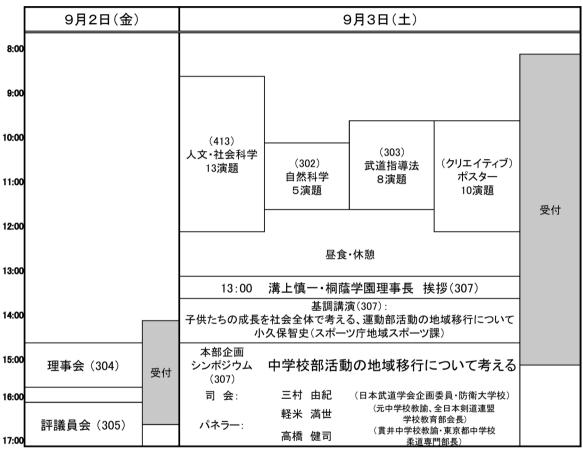
<ポスター発表の座長>

- 1. ポスター発表の発表時間は、1 演題 5 分です。ご担当演題の進行役と発表時間の管理をお願いします。発表時間の管理はご自身の時計等でお願いします。
- 2. 質疑応答は、ご担当の演題が全て終了した後、随時、発表演者自身に行っていただきますので、取りまとめ等の業務は特段ございません。セッション終了の際、「この後の質疑応答は随時となりますので、演者の方はポスターの前で待機してください」とアナウンスし、座長終了となります。

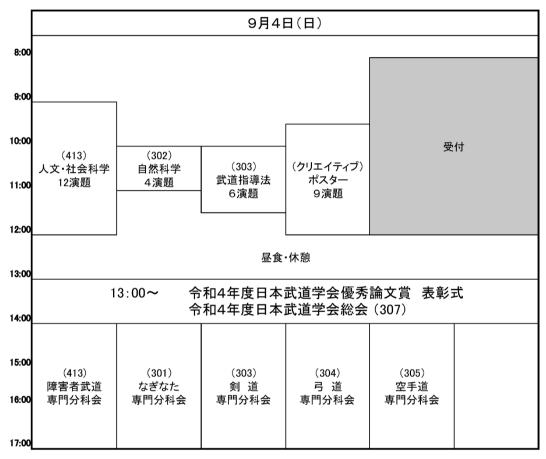
発表演者の皆様へ

- 1. 発表形式は、口頭発表またはポスター発表です。 ロ頭発表 発表 12分 質疑応答 3分 ポスター発表 発表 5分 質疑応答は随時(発表前、後も含む) 発表者は、発表時間の厳守にご協力ください。
- 2. 発表の進行等は、担当座長の指示に従ってください。
- 3. 発表演者の変更は認められません。但し、急病等のやむを得ない事情がある場合は、大会本部へ速やかに連絡し、指示に従ってください。
- 4. **口頭発表者**は、発表開始 20 分前までに各会場受付で受付を済ませ、発表時間の 15 分前には次演者席で待機してください。
- 5. 口頭発表者は、12分以内(時間厳守)で研究内容を発表してください。
- 6. **口頭発表者**でプレゼンテーションソフト(PowerPoint 等)を使用する場合は、 発表資料の入った<u>ご自身のパーソナルコンピュータ</u>を必ずお持ちください。 特に Macintosh をご使用の方は、変換コネクタ、また VGA アダプタと電源ア ダプタも必ずご持参ください。
- 7. 今まで口頭発表者が準備することになっていた<u>資料(紙媒体・100 部)</u>は、 <u>本大会から廃止</u>となりました。資料等(発表で使用するものも含む)がある 場合は、大会特設サイトの指定場所に予めアップロードしてください。
- 8. **ポスター発表者**は、発表日の9時までに会場受付を済ませ、所定の場所にポスターを掲示してください。また、<u>発表時間の10分前までには、掲示したポ</u>スターの前で待機をお願いします。
- 9. ポスター発表者は、5分以内(時間厳守)で研究内容を簡潔にまとめて発表してください。
- 10. ポスター発表者は、質問を随時受け付けていただきますので、ご自身の発表が終わってもポスター前近辺で待機し、質問者への対応をお願いします。
- 11. 掲示したポスターは、正午過ぎにご自身で撤収してください。

日本武道学会第55回大会日程表



※レセプション(懇親会)は 行いません



※各専門分科会で開始時刻が異なることがあります。

第1日目 9月3日 (土) 人文・社会科学系

A 会場 (413)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座	長
8:45	IA-1	柔道整復師国家試験出題基準に含まれる嘉納思 想を整理する	稲川 郁子	日本体育大学		
9:00	IA-2	大東亜戦争後 (1945 年〜1970 年) における柔道 の展開事情に関する研究 一柔道界と柔道整復の関係性に着目して一	丸澤 遼子	日本体育大学 大学院保健 医療学研究科	永木 (法政)	耕介
9:15	IA-3	ドイツの事例から見たライブステージに合わせた柔道教育の在り方を考える:ドイツ柔道連盟の昇級審査規定の改正(2022年)に見られるアプローチを中心に		津田塾大学	(IAK)	Λ ₁ ,
9:30	IA-4	武道必修化による剣道授業における学習成果の 変化	阿部 剣征	別府大学		
9:45	IA-5	剣道試合・審判規則第1条の「公明正大」につ いて	加藤 純一	皇學館大学	松尾(筑波)	牧則 大学)
10:00	IA-6	明治から昭和戦前期に設立された弓道の統括団 体に関する研究:定款の分析を中心として	五賀 友継	国際武道大学		
10:15	IA-7	武道歌の計量テキスト分析による居合術の理念 と術理の抽出	小林 勝法	文教大学		
10:30	IA-8	ドメイン別 GRIT に関する研究 一学生アスリートとその競技成績に着目して—	岩尾 敬太	京葉ガス株式会社	前川(国際武	
10:45	IA-9	大学女子柔道選手が柔道に向かう動機付けに関 する調査研究	川戸 湧也	仙台大学	(国际政	坦人子)
11:00	IA-10	各国の少年柔道における傷害調査	曽我部晋哉	甲南大学		
11:15	IA-11	近代期の武士道論者にみられる武道観に関する一 考察	堀川 峻	筑波大学		
11:30	IA-12	剣道における比喩表現に関する一考察 一明治・大正期の剣道書を中心に—	中野 香月	天理大学大学院 体育学研究科	数馬 (工学院	広二 法大学)
11:45	IA-13	近代初期女子教育における武道論の考察:星野 天知に着目して	大石 純子	筑波大学		

昼食・休憩

基調講演、本部企画

13:15	 基調講演:小久保智史「子供たちの成長を社会全体で支える、運動部活動の地域移行について」
14:15	
14:20	本部企画:シンポジウム「中学校部活動の地域移行について考える」
	司 会:三村 由紀(防衛大学校、空手道)
	パネラー:軽米 満世(元中学校教諭、全日本剣道連盟学校教育部会長)
	高橋 健司(貫井中学校教諭・東京都中学校柔道専門部長)

第1日目 9月3日(土) 自然科学系

B 会場 (302)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座县	Ž
10:00	IB-1	武道種目に携わるスポーツ少年団指導者におけ る救急対応に関する実態	佐野 颯斗	国際武道大学		绘
10:15	IB-2	弓道において矢の着点のばらつきを左右する発 射時の要因について	原田 隆次	国際武道大学	(了德寺大	学)
10:30	IB-3	異なる素振り動作における上肢の筋発揮タイミ ングの特徴	椿 武	神戸親和女子大学		
10:45	IB-4	剣道難聴予防のための高機能サポーターの提案	濱西 伸治	東北学院大学 工学部 械知能工学科	池田 孝 (福岡県立力	を博 大学)
11:00	IB-5	大学男子剣道選手における面打突動作と各種跳 躍能力について	佐々木陽一朗	筑波大学		

昼食・休憩

基調講演、本部企画

	23 (801)
13:15	 基調講演:小久保智史「子供たちの成長を社会全体で支える、運動部活動の地域移行について」
14:15	至两腊族、小人体自义 11 区区 500000000000000000000000000000000
14:20	本部企画:シンポジウム「中学校部活動の地域移行について考える」
	司 会:三村 由紀(防衛大学校、空手道)
	パネラー:軽米 満世(元中学校教諭、全日本剣道連盟学校教育部会長)
	高橋 健司 (貫井中学校教諭・東京都中学校柔道専門部長)

第1日目 9月3日(土) 武道指導法系

C 会場 (303)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:30	IC-1	剣道授業における「かた」学習が新学習指導要領 の3つの柱の育成に及ぼす学習効果に関する研究	菊本 智之	常葉大学	
9:45	IC-2	「アダプテーションマッチ」を取り入れた中学校 の剣道授業に関する定性的研究	山田 弥香	福岡教育大学 大学院	有田 祐二 (筑波大学)
10:00	IC-3	剣道における指導行動と動機づけの関係	白須 鉄也	東海大学大学院 体育学研究科	
10:15	IC-4	中等教育の合気道指導:巣鴨学園における「奪 取技」を用いた乱取の取り組み	羽場 逸夫	巣鴨学園	Let II. —— I ——
10:30	IC-5	高次脳機能障害者への剣道指導を通して見える 武道の可能性 〜競争社会から共創社会へ〜 その4	三苫 保久	滋賀県立大津 清陵高等学校	松井完太郎(国際武道大学)
10:45	IC-6	柔道三角絞における足の技術の効果:足首屈曲 および伸展	石井 直人	秋田工業高等 専門学校	久保田浩史
11:00	IC-7	柔道競技における大外刈のキネマティクス技術分析 ~受の崩れに着目して~	清水 祐希	早稲田大学大学院 スポーツ科学 研究科	(東京学芸大学)

昼食・休憩

基調講演、本部企画

13:15	 基調講演:小久保智史「子供たちの成長を社会全体で支える、運動部活動の地域移行について」
14:15	金剛時候・小八体目又 1 景にりの成長を恒去主体(文える、建動印伯動の地域体)に ラいし
14:20	本部企画:シンポジウム「中学校部活動の地域移行について考える」
	司 会:三村 由紀(防衛大学校、空手道)
	パネラー:軽米 満世(元中学校教諭、全日本剣道連盟学校教育部会長)
	高橋 健司 (貫井中学校教諭・東京都中学校柔道専門部長)

第1日目 9月3日 (土) ポスター発表

P 会場 (クリエイティブ)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座	長
9:30	IP-1	剣道高段者における剣道の実践と人間形成の関係 (その 3)	笹木 春光	東海大学		
9:35	IP-2	剣道具製作における SDGs の取り組みと地域社 会におけるその必要性	山村 星子	株式会社七星	奥村 (東京学	基生 芸大学)
9:40	IP-3	欧州における柔道環境調査	戸田 将太	兵庫教育大学		
9:30	IP-4	柔道選手における肩の位置覚についての基礎的 研究	竹澤 稔裕	順天堂大学		
9:35	IP-5	柔道競技の小外刈における運動切替の熟練差	髙野 綺海	東京学芸大学 大学院	射手矢 (早稲田	
9:40	IP-6	全日本サンボ選手権大会における競技分析的研 究―サンボ競技の技術体系の観点から―	馬場 元気	至学館大学大学院		
9:30	IP-7	男子柔道選手の競技中における生理学的応答	薗田 瑞穂	大東文化大学 大学院 スポーツ・健康 科学研究科		
9:35	IP-8	柔道競技中における柔道場内の二酸化炭素濃度 に関する研究	西 奈緒	皇學館大学	松井(筑波)	崇 大学)
9:40	IP-9	血流制限下における4方向ジャンプトレーニング 効果の検討―大学女子柔道選手を対象として―	大川 康隆	東海大学	(-) 41/4	
9:45	IP-10	剣道の面マスク着用が練習中の心拍数へ与える影響	高橋健太郎	関東学院大学 理工学部		

昼食・休憩

基調講演、本部企画

	(00.7)
13:15	 基調講演:小久保智史「子供たちの成長を社会全体で支える、運動部活動の地域移行について」
14:15	金剛時便・小八体自文 1
14:20	本部企画:シンポジウム「中学校部活動の地域移行について考える」
	司 会:三村 由紀(防衛大学校、空手道)
	パネラー:軽米 満世(元中学校教諭、全日本剣道連盟学校教育部会長)
	高橋 健司 (貫井中学校教諭・東京都中学校柔道専門部長)
1	

第2日目 9月4日(日) 人文・社会科学系

A 会場 (413)

時間	演題番号	演 題	発表	者	所 属	座	長
9:00	IIA-1	近世の軍学者・花房義制をめぐる武術の人脈	足立	賢二	宝塚医療大学 保健医療学部		
9:15	IIA-2	近代の武術・武道における小太刀に関する研究	中山	竜一	明治大学大学的 国際日本学研究和		
9:30	IIA-3	剣術伝書にみられる比喩表現に関する一考察 一直心影流を中心に—	軽米	克尊	天理大学 体育学部		
9:45	II A−4	土佐藩 片岡健吉の稽古記録について	森本	邦生	貫汪館		
10:00	II A−5	彦根藩における念流正法兵法未来記について	数馬	広二	工学院大学	菊本 (常葉	
10:15	II A-6	琉球の武術に影響を与えた薩摩藩の武術 (津堅 之棍)	早坂	義文	古武道研究会		
10:30	II A-7	柔道における「競争」概念の批判的検討	佐藤	雄哉	国士舘大学		
10:45	II A-8	現代における柔道の価値に関する一考察 一柔道の印象に関する意識調査より—	中山	佳子	早稲田大学 スポーツ科学 研究科	川戸(仙台	湧也 ^{大学)}
11:00	II A-9	武道における芸術性の活用と実践「武楽」2 一 武楽『神曲 修羅六道』実践報告:いかに「武の美」 を舞台芸術作品として表現したか		士郎	武楽座		
11:15	II A-10	朝鮮民主主義人民共和国における空手道の展開過 程に関する考察	宋	修日	朝鮮大学校		
11:30	II A−11	中国武術研究の基盤構築: 史資料の整理および その日本武道との関連	劉	暢	早稲田大学 スポーツ科学 学術院	加藤(皇學館	純一 官大学)
11:45	II A-12	中国の武当山武術に見られる武術の観光化政策について	張	卿	日本体育大学 大学院		

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (307)							
	障害者武道 専門分科会	なぎなた 専門分科会	剣道 専門分科会	弓道 専門分科会	空手道 専門分科会			
	413	301	303	304	305			

第2日目 9月4日(日) 自然科学系

B 会場 (302)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
10:00	ПВ−1	柔道療法が精神・知的障害者の行動体力に与える影響	中村 和裕	福山大学	
10:15	IIB-2	柔道背負投に関するバイオメカニクス的研究: 身体重心速度に影響を与える技術的要因	石井 孝法	了徳寺大学	松崎 守利
10:30	ⅡB-3	押し力を受け止める技術―体勢の違いの比較―	射手矢 岬	早稲田大学	(下関市立大学)
10:45		大学柔道競技者の稽古が高めるオキシトシン分 泌:精力善用と自他共栄の両立は可能か?	松井 崇	筑波大学体育系	

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (307)	総会 (307)							
	障害者武道 専門分科会			弓道 専門分科会	空手道 専門分科会				
	413	301	303	304	305				

第2日目 9月4日(日) 武道指導法系

C 会場 (303)

時間	演題番号	演 題	発表	者	所	属	座	長
9:30	ПС−1	柔道指導者における促発身体知に関する意識調査	中川原	知波	東京学芸 大学院	芸大学		
9:45	ПС−2	柔道療育の効果と課題に関する質的研究 一指導者を対象としたインタビュー調査から―	小崎	亮輔	鹿屋体育		みむゃ	17 JUZ 41.
10:00	ПС-3	トップ選手になるための必要な条件:2004年アテネ五輪金メダリストM氏へのインタビュー調査から	仲田	直樹	日本経済	 子 学	曽我音 (甲南	
10:15	II C−4	柔道のかけひき動作測定尺度の構成	有山	篤利	追手門等	学院大学		
10:30	II C-5	剣道の試合における暫定的な審判法による試合内 容及び戦術行動の検討	時村	実壮	順天堂大 スポーツ 学研究和	ソ健康科		
10:45	ПС-6	東京五輪空手組手競技における得点技に関する 研究:メダリストと非メダリストの比較	大徳	紘也	日本体育 大学院	育大学	齋藤 (専修	実 _{大学)}
11:00	ПС-7	弓道の弓弦の違いに着目した指導法への活用に ついて	松尾	牧則	筑波大学	Ż		

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (307)							
	障害者武道 専門分科会	なぎなた 専門分科会	剣道 専門分科会	弓道 専門分科会	空手道 専門分科会			
	413	301	303	304	305			

第2日目 9月4日(日) ポスター発表

P会場 (クリエイティブ)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座	長
9:30	ⅡP-1	旧制第一高等学校の資料分析からみた学生の剣 道観と剣道実践	佐藤 皓也	順天堂大学スポー ツ健康科学部		
9:35	IIP-2	中津藩中西家古文書における一刀流伝書につい て(第2報)	立木 幸敏	国際武道大学	中嶋(茨城)	哲也大学)
9:40	ⅡP-3	平常心の意味と構造的特徴	江川 玟成	東京学芸大学		
9:30	IIP-4	剣道形を取り入れた中学校剣道授業実践について 〜オンライン授業研究会の実施に向けて〜	太田 順康	大阪教育大学		
9:35	IIP-5	剣道体験に参加した小学生の剣道に対するイメー ジの変化	京林由季子	岡山県立大学	本多岩(福岡教	
9:40	ⅡP-6	ICT を活用した空手道授業の指導成果と課題	井下 佳織	麗澤大学		
9:30	IIP-7	柔道競技における個別コーチング実践	大嶋 悠正	筑波大学大学院 人間総合科学研 究群博士課程	LL	⊒1 #b
9:35	ⅡP-8	小学校中学年を対象とした柔道遊びの教材開発	與儀 幸朝	鹿児島大学	林 (びわる スポーツ	
9:40	IIP-9	柔道授業が身体に及ぼす影響 一養成学校生に対する認識調査を基にして―	福井悠紀子	東亜大学	2141	/ / (T)

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (307)						
	障害者武道 専門分科会	なぎなた 専門分科会	剣道 専門分科会	弓道 専門分科会	空手道 専門分科会		
	413	301	303	304	305		

本部企画シンポジウム

中学校部活動の地域移行について考える

司 会:三村 由紀(防衛大学校、空手道)

企画の趣旨

現在、中学校における部活動を学校単位から地域単位の取り組みに移す、つまり 地域移行がスポーツ庁主導のもと本格的に動き始めている。

従来の学校現場における部活動は、教師の献身的な取り組みに依拠している部分があまりに多く、長時間勤務や、特に当該競技に関する専門的な経験のない教師にとっては心身ともに相当な負担となっており、こういった実態が社会問題ともなっている。中学校における部活動の地域移行は、こうした現状に鑑みた教師の働き方改革の一環として進められる国の施策である。より具体的には、令和5年度以降、先ずは休日の部活動を段階的に地域移行し、望まない教師が休日の部活動に従事しなくてよいようにする方針が明示されている。これも、部活動改革のための第一歩であるとし、将来的には平日も含めて完全に地域に移行することが目指されているといってよい。

しかし、この問題には、学校における教師の働き方改革の目線だけでなく、生徒が運動する機会をいかに確保するかという生徒目線での地域における受け皿の問題や、従来学校単位で出場していた競技大会の在り方など、解決すべき課題は山積しているといわざるをえない。

一方、こういった義務教育世代の運動・スポーツ活動を地域で行うことが将来的 に定着すれば、この場が生涯スポーツの場になりうるとも考えられる。

本学会においては、国の施策としての中学校部活動の地域移行に関する問題を広く把握した上で、特にこの問題を武道に焦点化し、現状と課題、そして将来の見通しと可能性について、学会員全体が情報を共有し、今後、学術的にアプローチすべき課題について考えることが本企画の趣旨である。

今回は、スポーツ庁より講師をお招きし、中学校部活動の地域移行に関する問題を大局からお話しいただき、これを基に、特に柔道と剣道の立場から現場を肌感覚で熟知するパネラーの先生方に話題提供をしていただいた上で、フロアーも含めて武道全体について議論を進めていく。

本件は、2018年より本学会本部企画として複数年計画で進めてきた生涯武道の問題としても重要な課題であり、生涯武道を義務教育世代において考えるという従来にない視点が提示できるものと期待される。

企画委員会:

酒井 利信(委員長),大石 純子(副委員長),アレキサンダー・ベネット,増地 克之,鷲見 勝博,松井 完太郎,三村 由紀,軽米 克尊

基調講演

子供たちの成長を社会全体で支える、運動部活動の地域移行について

○小久保 智史 (スポーツ庁地域スポーツ課 課長補佐)

【プロフィール】2006年3月、東京大学教育学部卒。同年4月に文部科学省入省(初等中等教育局初等中等教育企画課)。2008年、学校現場派遣研修生として1年間、愛知県内の公立中学校に赴任(3年副担任、社会科担当、バレーボール部副顧問等)。その後、文部科学省の各部署で連絡調整を担当し、2015年7月、国立教育政策研究所教育課程研究センター学力調査課長、2017年4月、岩手県教育委員会赴任(学校教育課総括課長等)。2020年4月に文部科学省へ復帰し、2022年4月より現職。

(※本稿の内容は、令和4年6月下旬現在であり、スポーツ庁としては、令和5年度の予算要求をはじめとした総合的な対応について目下検討中であるため、当日の講演内容との差異については御容赦いただければ幸いである)

学校における運動部活動は、これまで生徒のスポーツ機会を確保するとともに、生徒の自主的・主体的な参加による活動を通じて、責任感・連帯感を涵養し、自主性の育成にも寄与するなど、学校教育上、大きな役割を果たしてきた。また、生徒同士や教師と生徒との人間関係の構築、生徒の自己肯定感の向上など生徒指導の観点からの意義、学校の一体感などの醸成にも貢献してきた。

他方で、近年では中学校等の生徒数はピーク時から約半減、出生数が令和3年には84万人にまで落ち込むなど、少子化が進み、部活動は持続可能性という面でその厳しさを増している。現在でも、集団競技において複数校の合同チームなどが結成されている例もあるが、将来的には、そうした対応を取ったとしても、学校単位の取組ではスポーツ機会の確保が難しくなる地域が増えていくことが強く懸念される。また、教師の視点からは、競技経験のない教師が指導せざるを得ない点や休日も含めた指導、大会引率、大会運営への参画が求められる点など、大きな業務負担となっている。また、地域に目を転じると、地域のスポーツ団体や指導者等と学校との連携・協働が十分でない状況も見られる。

スポーツ庁では、平成30年3月に「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を策定し、学校と地域が協働・融合した形で地域スポーツ環境整備を進めることを示すとともに、令和2年9月、「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」を各教育委員会等に対して示し、令和5年度以降、休日の部活動の段階的な地域移行を図るとともに、指導を望まない教師が休日の部活動に従事しないこととする方向性を示した。

令和3年度からは、全国各地での実践研究事業を創設し、全ての都道府県と12の政令指定都市に委託し、全国約100の市町村、約230校の中学校での取組を通じ、総合型地域スポーツクラブを含む多様な実施主体、都市部や地方部など様々なモデルが創出されている(実践研究事業は、令和4年度も継続)。また、地域移行の具体的な方策について集中的な検討を行うため、10月に(公財)日本学校体育研究連合会の友添秀則会長を座長とし、有識者、地方自治体、学校関係者、スポーツ関係者から構成される検討会議を設置し議論を重ね、令和4年6月に提言が取りまとめられた。

提言においては、まず、運動部活動の地域移行の目的、目指す姿として①少子化の中でも将来にわたって我が国の子供たちがスポーツに親しむ機会を確保し、あわせて学校の働き方改革を推進し、学校教育の質を向上させること、②子供たちがスポーツの「楽しさ」「喜び」という本質を感じるとともに、部活動の教育的な意義を継承・発展させ、新しい価値を創出すること、③地域の持続可能で多様なスポーツ環境を一体的に整備し、子供たちの多様なスポーツ機会を確保すること、の3点が示されている。現在、そして将来にわたっての子供たちの成長を支えていくとともに、生徒のみならず地域住民にとってよりよい地域スポーツ環境の構築を目指していくことが重要であると考えている。

改革の方向性として、令和2年9月時点での方向性と同様、まずは休日の運動部活動について段階的に地域移行していくことを基本とし、新たに目標時期として、令和5年度から令和7年度までの3年間を目途とすることとされた。なお、平日については、地域の実情に応じてできることから取り組むことが考えられる、とされている。また、受け皿となる、地域におけるスポーツ機会の確保や生徒の多様なニーズに合った活動機会の充実、地域のスポーツ団体等と学校との連携・協働の推進の必要性が示されている。

ただし、改革を進めていくに当たっては、様々な学校現場や地域の事情を踏まえ、統一的なやり方を示すのではなく、選択肢を示し、複数の道筋、多様な方法を強く意識することが重要であるとされた。

地域単位への活動への移行を進めるに当たっては、非常に多岐にわたる課題があり、検討会議の提言においても以下のような指摘がなされているのは御案内のとおりである。

- ・ 地域移行の受け皿として、地域に応じた多様なスポーツ団体等の充実に 向けた、スポーツ振興くじ(toto)助成など多様な財源確保の検討
- スポーツ指導者の確保のための、指導員資格の取得や研修の実施、指導を希望する教師の円滑な兼職兼業の活用
- ・ 施設の円滑な利用のための、協議会の設置やルールの策定
- 地域移行後のスポーツ団体等でも大会参加が可能となるよう、参加資格の見直し(日本中体連が参加を認める方針を示し、都道府県中体連と調整)
- 会費負担に関する支援や、保険の補償内容の充実を図ること
- ・ 学校教育上の位置付け(学習指導要領等)、高校入試における評価、教師 の採用時における評価の見直し

スポーツ庁としては、提言を踏まえて、令和3年度に実施した実践研究の事例集の作成・普及、ガイドラインの改訂や必要な通知の発出、関係団体への要請、令和5年度予算の概算要求などを総合的に進めていくとともに、様々な説明会、研修会等の機会をいただき、関係の方々との意見交換を進めていくこととしており、様々な課題や要望、工夫の声を伺い、可能な限り対応していきたいと考えている。

運動部活動は、長年にわたり学校で運営され、教育活動の重要な要素として、 教師等の献身的な取組によって支えられていることに心から敬意を表したい。 他方で、急速な社会変化の中、学校内にとどまらず、社会全体で子供たちの心 身の成長を支えていく必要性はますます大きくなっており、広く関係者の理解 と協力を得ながら、各地域の実情に応じた取組を進めていきたいと考えている。

教育現場から中学校部活動の地域移行について考える

○軽米満世(全日本剣道連盟常任理事、普及委員会 学校教育部会委員長)

【プロフィール】昭和 53 年日本体育大学卒業。卒業後は郷里大分県にて高校講師を務め、結婚後、千葉県公立中学校、袖ケ浦市教育委員会、袖ケ浦市立総合教育センターに勤務。 千葉県国体強化委員(2002 年~2016 年)。全日本女子選手権ベスト8、全国教職員大会ベスト8、全日本東西対抗2回出場。

【現状】

中学校の部活動は、生徒数の減少に伴う休廃部などにより存続の危機となっている。そのような中、国は、学校の働き方改革を踏まえた部活動改革を令和2年度に打ち出し、中学校における休日の部活動を令和5年度から段階的に地域へ移行することを検討している。また、スポーツ庁は、日本中学校体育連盟に対し、「学校から地域移行したクラブ等に所属する生徒の大会参加資格を緩和する」等を強く要望し、令和4年3月9日付けで日本中学校体育連盟は、地域クラブ等の大会参加を承認することとなった。こうした国の動向を踏まえ、全日本剣道連盟としても、生徒の多様化するニーズや生徒減少と学校の小規模化にともなう部活動の休廃部等に対応するため、地域剣道連盟が積極的に関与する仕組みの構築や指導者の確保と積極的な活用を促進することで、地域部活動の支援を行い、剣道の普及に繋げていきたいと考えている。

【課題】

中学校部活動の地域移行は各都道府県において徐々に増えてはいるものの、地域格差等様々な課題がある。主な課題としては次のようなものが挙げられる。

- ① 生徒数の減少に伴う部員数、部活動の設置数の減少
- ② 100 年以上続く部活動の歴史に鑑みた地域・保護者・教員の意識改革
 - ・部活動が担ってきた生徒指導等の教育的効果
 - ・生徒・保護者にとっての学校教育活動としての安心感
 - 無償での活動、中体連の大会運営の主管等
- ③ 指導者(指導者の確保、質の担保、生徒・保護者のニーズに合った指導者等)
 - 各競技の指導者や有資格者の不在
 - ・チームの安定性、指導の一貫性、コンプライアンス研修の必要性等
- ④ 兼職兼業教員の勤務管理
- ⑤ 環境整備(学校の施設管理、公共施設利用、生徒の移動等)
 - ・受け皿となる環境の構築、地域間格差、会費に見合うサービス、経費等
- ⑥ 中体連の運営の転換(大会への参加単位、学校→地域 or 個人)

【今後の方向性】

学校の運動部活動から地域の部活動への全面的な移行には上記のような多くの課題があり、その在り方については、学校と地域の「融合型」が望ましいと考える。また、求められる指導者の確保とマッチングシステム作りが喫緊の課題であり、各都道府県競技団体が指導者バンクを創設し、そこから指導者を派遣することが必要である。一方で、競技団体としては少子化が進む中、普及や底辺拡大のチャンスであるとも捉えられる。この点については、学校と地域指導者の連携が重要な鍵となる(団体の確保、費用負担のあり方等)。

柔道部活動指導現場から地域移行を考える

○髙橋健司(全日本柔道連盟理事・日本中学校体育連盟柔道競技部部長) 【プロフィール】

昭和 56 年度東洋大学卒業、卒業後、日本大学聴講生で保健体育科免許取得。以降、公立中学校保健体育科教諭として3校勤務。4校目の現在は、練馬区立貫井中学校主幹教諭として着任以降 18 年間勤続中。生活指導主任、柔道部顧問(36 年目)。競技歴として全国中学校柔道大会、全日本学生柔道優勝大会、日本マスターズ柔道大会(準優勝)等に出場。

【現状】

中学校の柔道部数や部員数は、全国的に減少の一途をたどっている。小学生児童の 柔道経験者は数多くいるのに、中学生の競技人口数が伸びないのは、公立中学校の現場 において柔道を専門とする指導者(正規教員)の不足により柔道部が創設できないことが 最大の要因とされてきた。柔道部に限らず、実績を上げてきた競技部の顧問が異動すると、 活動に支障をきたすどころか、一気に廃部へと追いこまれることもある。学習指導要領に位 置付けてきた「部活動は価値あるもの」を達成するべく、部存続のために年度末、年度当初 と、その手当てのために奔走する管理職の姿がある。公立学校特有の課題である。近年で は、柔道を専門としてきた教員が新規採用、または異動によって着任しても、柔道部創設 の願いを管理職が認めない傾向が強い。格闘競技の性格に併せて、一時期の柔道に対 するネガティブキャンペーンの影響もあったと推察する。怪我の心配、指導方法の在り方、 専門性が強いとされる競技特性など、顧問として就任する教員も少なくなり、団体戦として 出場できる学校数が激減している。中体連では主催大会において保護者引率による個人 種目の大会参加が認められている。学校には柔道部がないが、学校が中体連柔道競技部 に加盟登録を行い、保護者引率、外部指導者登録、代理監督依頼制度を活用して個人 戦に出場している選手も数多くいる。学校教員以外の方々に対して大会運営の協力や、 エチケット、マナーの励行をお願いして現在まで問題なく、大会を運営してきた。

【課題】

- (1)地域スポーツ団体とは、どのような団体を、どのような機関が有資格団体として調査、認定するのか、現段階において不明確である。
- (2)大会出場に際し、選手の居住地や地域団体チームの地域割りなどが示されておらず、 丸投げの現状である。
- (3) 土日の活動について、地域関係者による練習や大会運営などが提言されているが、そもそも平日に活動している生徒にとって、土日に大会開催がなければ、休息をとらせる (練習休み)ことが妥当ではないのかと判断する。
- (4)「働き方改革」の方策と言っておきながら、勤務時間が過ぎても学校に残留し、技術指導は地域指導者、事務処理は学校教員が行う形態にならないか危惧する。やる気をなくしている教員も出始めている。

【今後の方向性】

公立学校の文化部、運動部活動は長年に渡り、無償に近い形で運営、継続されてきた。中学生期は、ゴールデンエイジを経た後の重要な成長期である。心身ともに将来の礎を築く大切な時期である。放課後の活動について、校内を利用しての活動なのか、校外施設での活動なのかによって取り組み方や考え方も異なると判断する。スポーツ庁が発出した提言は時限措置である。地域のどのような団体が関わり、財源や保障、有能な人材確保の方策提示が急務であることは間違いない。地域指導者に対して学校のシステムや生徒の特性、教育活動の現状を把握するための研修実施が必須と考える。また担当する事業担当部署を明確にしなくては先に進めないと判断する。

日本武道学会第55回大会 空手道専門分科会企画

学校における武道授業 -特別支援学級・特別支援学校における空手道授業-

2019 年度より特別な支援を必要とする子供を含め,多様な子供たちを誰一人取り残すことなく,公正に個別最適化され,資質・能力を一層確実に育成できる教育環境を実現する GIGA スクール構想の実現に向け環境整備が進められることとなった。そんな中 2020 年 1 月以降,全世界で新型コロナウイルス感染が拡大し,各武道種目においてオンラインで大会のライブ配信や講習会などの新たな取り組みが見られた。こうした取り組みは、ポストコロナ禍においても継続され、今後ますます武道・スポーツにおける ICT 活用の加速化が進むと考えられる。そこで、昨年度は弓道専門分科会と合同で、コロナ禍におけるICT 活用の試みを紹介すると共に、それに対する評価や課題などを提示した。

そして今年度は、中学校武道(空手道)授業における「特別な支援を必要と する生徒に対する空手道授業の現状や課題」について検討する。

日 時:令和4年9月4日(日)14:00~15:00

場 所:桐蔭横浜大学 大学中央棟 3 階 305 教室(対面開催)

司 会: 空手道専門分科会企画委員 谷木 龍男(東海大学) 開会挨拶: 空手道専門分科会代表 豊嶋 建広(麗澤大学) 企画説明: 空手道専門分科会企画委員長 麓 正樹(東京国際大学)

講演 中学校武道授業「特別支援を必要とする生徒への授業」 浅井 一人(東京都立白鷗高等学校附属中学校)

報告 1. 全日本空手道連盟学校武道推進事業

「特別支援教育を推進するねらいとその取り組み」について 岡﨑 紀創(公益財団法人全日本空手道連盟)

報告 2.スポーツ庁委託事業武道等指導充実・資質向上支援事業 「特別支援を必要とする生徒への授業」について 井下 佳織 (麗澤大学) 日本武道学会第55回大会 剣道専門分科会企画 講演会 ハイブリッド (対面・オンライン) 形式: 令和4年9月4日(日) BUDO WORLD との共催

「武道学における精神文化史研究 序説ー研究方法論の探究ー」

講 師 筑波大学体育系教授 酒井 利信 氏

私の主な研究のフィールドは日本武道学会であるが、これまで武道の精神文化史について、特に刀剣の思想を中心としつつ、近年では身心論や教育論にも触れながら研究活動を行ってきた。今回は、特に研究方法論を話しの主軸としながら、「振り返り」「近年の研究活動」「今後の計画」に分けてレクチャーを構成していく。

【振り返り】

筑波大学武道学(論)領域で教鞭をとっておられた中林信二先生からのご縁で、高橋進先生(筑波大学名誉教授、倫理学・東洋思想)や湯浅泰雄先生(筑波大学名誉教授、哲学)、そしてこれとは別の人脈から竹本忠雄先生(筑波大学名誉教授、仏文学)や藤安将平刀匠から受けた学術的な影響について紹介する。

特に、研究活動を始めた当初、レヴィ=ストロースの構造人類学を援用した象徴論を用いて論文を書いていたが、高橋進先生の一喝のもとこの方法論を放棄したこと。高橋先生直伝の行間を読む文献学の手法を構築していったこと。そして、行間を読む感性について、湯浅泰雄先生や竹本忠雄先生から受けた影響。また、藤安刀匠との出会いにより更に感性を磨くべく催行した鹿島神宮日本刀奉納鍛錬について述べていく。

【近年の研究活動】

近年は、海外での活動的多少する中、特にユーゴスラビア紛争時にスナイパーであったという元 兵士との邂逅により現出した新たなテーマについて取り組んできた。

海外では日本にいては分からないことが実に多くあることを思い知らされる。例えば、キリスト教社会において武道による人間形成が受け入れられないこと。また、欧州などの心身二元論社会において武道教育の根幹をなす「身体を通して心を変える」というロジックも同様に受け入れられない。つまり異国のこういった状況では武道教育は成り立たないということである。しかし東欧で出会った前述の元兵士は、戦争で傷ついた心を武道の稽古によって癒そうとしているという。ここに海外における武道教育の可能性の萌芽を見ることができる。

そこで、この元兵士を研究対象とし、「日本武道の教育力が海外で通用するか?」ということをテーマとして、従来の文献学的手法に質的データ分析法を援用しつつ新たに構築した「文献学+質的研究」の方法論により論証した。研究成果として論文「東欧における武道の教育力に関する研究:ユーゴスラビア紛争時における元兵士の事例を中心に」(武道学研究 54(2), 2022)を発表しているが、この内容を諸々のエピソードを含めて報告する。

【今後の計画】

今後は、新たに採択された科学研究費助成事業(基盤 B,2022-2027)により、日欧対話により国際的な「生涯武道論」を再構築し^{課題I}、それを前提とした生涯武道インストラクター養成プログラムを開発する^{課題II}ことを目的として研究活動を進める。本プロジェクトにおいては当面の課題 I に取り組むが、ここでの基本的なデザインは先学における既存のロジックを書き換えることである。アプローチの方法としては、前述の「文献学+質的研究」の方法論を用いる。先ずは日本の歴史に照らして既存のロジックを再検討し(文献学)、更に東欧における事例を分析して(質的研究)、両者を照合させながら国際的に汎用性の高い生涯武道としてのロジックに書き換える。

パラアーチェリーに学ぶ弓道の新たな可能性を探る (日本武道学会第55回大会 弓道専門分科会企画)

アーチェリーは、障がい者スポーツとしての歴史を有している。1948年、ロンドン郊外のストーク・マンデビル病院内で、第2次世界大戦の負傷兵によって行われたアーチェリー競技会は、今日のパラリンピックの起源とされるものである。1952年には、パラアーチェリーの国際大会が開始された。そして、1960年の第1回夏季パラリンピック大会から、現在に至るまで、アーチェリーはパラリンピック公式種目として採用されている。アーチェリーは、障がい者が実施する国際的スポーツとして大きな発展を遂げている。

一方で、弓道では、障がい者の実施事例は僅かしかない。その普及は、ほぼ皆無といってよい。弓道も、アーチェリーのように、用具や環境などを工夫することによって、障がい者が実施することは可能である。実際、弓道専門分科会会員からは、大学の弓道授業等で障がい者を受け入れ、用具等の工夫によって実施した事例が報告されている。しかしながら、その経験や知見は限定的であり、今後障がい者が弓道を実施する上では、同じ弓矢を用いるアーチェリーの知見は大いに参考になると考えられる。

そこで、本分科会企画では、パラアーチェリーの最前線でご活躍されている競技者及び指導者の方から、パラアーチェリーの実際についてご講演いただく。そして、弓道において障がい者の方々が参加するためには、どのような工夫が必要であるのかをご提言いただき、障がい者の参加を通じた弓道の新たな発展の可能性について探求する。

日時 : 令和 4 年 9 月 4 日 (日) 14:30~16:00

開催方法 :対面+Zoom を用いたハイブリッド開催 (予定)

対面開催場所 : 桐蔭横浜大学 大学中央棟 304

予定:

① 弓道専門分科会代表挨拶 松尾牧則(筑波大学)

② パラアーチェリー競技の実際 大橋 俊 (株式会社コロプラ、パラアーチェリー ショルダーアーチャー)

③ パラアーチェリー指導の実際 松村晃志

(東京都アーチェリー協会 理事長)

④ 質疑応答

司会 : 五賀友継(国際武道大学)

参加方法について

弓道専門分科会に所属されていない方は、8月31日(水)までに弓道専門分科会事務局までご連絡ください。その際に、対面と Zoom いずれでの参加を希望するかをご連絡ください。

日本武道学会弓道専門分科会事務局 担当:五賀友継(国際武道大学)

E-mail : budo.kyudo@gmail.com

日本武道学会第 55 回大会なぎなた専門分科会企画

史料から読み解く"薙刀"の特性

日 時: 2022年9月4日(日) 14:30~16:00

日本武道学会総会終了後を予定しています

場 所:桐蔭横浜大学 大学中央棟 3階301教室

(対面+Zoom を用いたハイブリッドを予定しています)

講 師: 渡邊 佑里乃(公益財団法人日本美術協会 上野の森美術館 美術業務課)

司 会: 木村 有里(横浜保育福祉専門学校)

概 要:

日本中世に現れた有力な武器のひとつである薙刀は、現代では古武道の分野で"薙刀"として、そしてスポーツ・教育の場で"なぎなた"として継承・発展を遂げている。両者の間には、前者は太刀対薙刀の修練に、後者は薙刀対薙刀の修練に重点をおいているという違いこそあるものの、"なぎなた"というスポーツが"薙刀"から受け継がれた体さばき・打突の正確さを競うものであることは周知の通りである。

本講演では、室町後期~近世初頭にかけて成立した古記録数点にスポットをあて、薙刀を用いたとされる人物たちとその背景を紹介する。そして、彼らの社会的立場や置かれていた状況がそれぞれ異なることに留意しつつ「彼らはなぜ薙刀を選んだのか」ひいては「当時薙刀はどのような特性のある武器と捉えられていたのか」について考察をしていきたい。専門分科会の皆様方と共に史料を分析しながら、原点たる"薙刀"について考えていくことで、"なぎなた"の今後さらなる発展の一助となれば幸いである。

日本武道学会第55回大会 障害者武道専門分科会企画

障がい者柔道 - その効果検証と指導法確立の可能性 -

話題提供者 濱名 智男(日本文化大學) 知的障害者柔道指導法につながる事例類型化の可能性

— ID 柔道ハンドブック策定を通じて —

中村 和裕(福山大学) 精神・知的障害者に対する柔道療法の効果測定

コーディネーター 松井完太郎 (国際武道大学) 大橋 正康 (一般社団法人 障害者武道協会)

日時: 令和4年9月4日(日)13:00~14:30 場所: 桐蔭横浜大学 大学中央棟413 教室

Zoom 中継を予定しています。アドレスは kantaro@budo-u, ac. ip までご請求ください。

障害者武道の事例が少なく、また同じ障害に分類されても状態・状況がそれぞれに異なり、 かつ療法効果が出るまでに一般的に長い時間が必要となることなどが原因で、障害者を対象と する武道療法の効果を科学的に検証することは困難です。

それでも、客観的指標を策定して効果測定し、主観的効果測定と組み合わせて検証に成果を 出されている中村和裕先生に、その手法についてご紹介いただきます。

また、『ID(知的障がい者)柔道ハンドブック』(公益財団法人全日本柔道連盟)の作成を担った 濱名智男先生に、知的障がい者柔道指導法につながる事例類型化の可能性について紹介いただ きます。

両先生ともに障害者に対する柔道指導の現場を持っていらっしゃることに重要な共通性があると考えます。両先生からの話題提供を通じて、障害者を対象とした武道指導の効果検証と指導法確立の可能性について議論を深めたいと存じます。

参加無料 (一般の方も参加できます)

開会時10分ほど頂いて障害者武道専門分科会総会を実施いたします。

ご不明な点は、左記松井までお問い合わせください。 kantaro@budo-u. ac. jp 090-2240-5394

TA-1

柔道整復師国家試験出題基準に含まれる嘉納思想を整理する

〇稲川郁子(日本体育大学)

【目的】

柔道整復師国家試験は、柔道整復師国家試験出題基準(以下出題基準)に基づき出題される。出題基準は複数回の改訂を経て現在に至り、2020 年版では初めて「柔道整復師と柔道」が盛り込まれた。2022 年版の出題基準小項目「柔道の理念」には「嘉納治五郎師範の考え・言葉」が含まれ、学校養成施設の教員には、嘉納思想へのいっそうの理解が求められるようになった。本研究は、2022年版出題基準に含まれる嘉納思想の根拠文献を整理し、原典の検索を容易にすることで教育に資することを目的とした。

【方法】

出題基準(2022 年版)の大項目「柔道整復師のプロフェッショナリズム」、中項目「柔道整復師と柔道」、小項目「柔道の理念」に挙げられている嘉納の言説の主要な根拠文献を挙げ考察した。

【結果】いずれも主要文献を示す。〔〕内は嘉納治五郎大系。

- 1. 講道館柔道の目的
- 1889年「柔道一斑並ニ其教育上ノ価値」『大日本教育会講演録』[2巻 88-135 頁]
- 2. 嘉納治五郎師範の考え・言葉
- 1) 遺訓
- 1915年「柔道本義 講道館柔道概説第1回」 『柔道』1巻2号〔3巻121-126頁〕
- 2) 精力善用、自他共栄、尽己竢成、順道制勝
- ①精力善用、自他共栄
- 1922年「講道館文化会創設の趣旨」『講道館文化会会報』1巻[9巻 12-14頁]
- 1936年「柔術と柔道との区別を明確に認識せよ」『柔道』7巻2号[1巻70-72頁]
- ②尽己竢成
- 1903年「尽己竢成」『国士』7巻62号[4巻157-160頁]
- ③順道制勝
- 1922年「講道館柔道の文化的精神の発揮」『有効の活動』8巻2号[1巻2-13頁] 1916年「日本国民と柔道」『柔道』2巻2号[6巻252-256頁]

【考察および結論】

出題基準(2022 年版)に含まれる柔道関連項目に含まれる嘉納思想の主要な根拠文献を整理した。嘉納は、武道の攻防におけるいわゆる柔の理に限界を感じ、その後精力最善活用の思想に至ったが、精力善用思想から、愛護的・合理的であることを求められる柔道整復師の「骨接ぎ」の技術に共通する前提を仮定できた。国家試験に嘉納思想、とりわけ「遺訓」が含まれている事実は、柔道整復師には柔道整復術を通じた「己の完成と世の補益」が求められていると解釈することができる。また、出題基準に含まれる自他共栄、尽己竢成、順道制勝は、いずれも柔道整復師倫理綱領に通底する理念を持つ。学校養成施設においては、職業倫理などと関連づけながら、国家試験対策に留まらない嘉納思想の理解と教育が求められる。本研究では、教員が嘉納思想の原典に基づき教育を展開できるよう、基礎的な文献を示した。

TA-2

大東亜戦争後 (1945 年~1970 年)における柔道の展開事情に関する研究 一柔道界と柔道整復との関係性に着目して一

丸澤遼子(日本体育大学大学院)、久保山和彦(日本体育大学)

【目的】戦後 GHQ の日本統治施策の一環で、我国における武道の中核である大日本武徳会は解体させられた。すなわち、それまで全国に展開し、学校教育に浸透していた武道活動を禁止することで、戦前からの日本性を一新しようとしたものと考えられる。本研究においては、禁止となった柔道の担い手らによる町道場での様態について明らかにした。

【方法】本研究では、大東亜戦争後(1945年~1970年)における、柔道町道場の展開における柔道と柔道整復との関係性を踏まえた上で、柔道整復術の担い手らの事情を中心に、以下の史資料調査を行った。

- 調査1) 柔道整復術に関連した法の変遷(1945年~1970年)
- 調査2) 日本柔道整復師会の成立と変遷(1945年~1970年)
- 調査3) 柔道整復師養成学校の設立動向(1945年~1970年)

【結果】柔道の町道場において、柔道を教示するものらは、大日本士道会(昭和2年設立)を構成しており、会長には講道館の山下義嗣(音)を招聘している。その頃、町道場の運営基盤となるのは、柔道を教授する以外に、柔道整復術の施術所を開いていた。すなわち町道場における柔道及び柔道整復術の担い手らは概ね共通しており、大東亜戦争後においてもこの構成は継続していたものと考えられる。

調査 1: 柔道整復術は昭和 22 年『あん摩、はり、きゅう、柔道整復等営業法』公布、昭和 23 年の施行により施術所の営業が認められている。また、昭和 45 年において「柔道整復師単独法」が成立している。

調査 2: 柔道整復師の業種団体の名称は、昭和 5 年の時点では、全日本柔道整復師会(改称)であったが、戦後、昭和 21 年には、日本接骨師会(改称)へと改称している。また、昭和 28 年には社団法人全日本柔道整復師会の成立に至っている。尚、この年には学校における武道教育が再開されている。

調査3: 戦後の柔道整復師養成学校の成立は昭和23年に始まる(財団法人日本高等整復学校大阪接骨学校から改名)。また、第1校となる宮城県の養成校においても、校名に「柔道整復」がみられず、その後、同校は昭和27年に改称し「柔道」の名称が用いられるようになった。尚、全国の養成校数は昭和48年までの間に14校が設立された。

【結論】武道活動が禁止されていた期間において、柔道の町道場では、柔道整復術を「接骨術」として運営することで継承されており、柔道についても併用して行われていたと考えられる。つまり、町道場で柔道が継続的に行われたのは、接骨術を標榜した柔道整復術の担い手らの下支えがあったためである。

IA-3

ドイツの事例から見たライブステージに合わせた柔道教育の在り方を考える: ドイツ柔道連盟の昇級審査規定の改正 (2022 年) に見られるアプローチを中心に

○マーヤ・ソリドーワル (津田塾大学)

【目的】本研究は科学研究費助成事業(若手研究 B)「ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の捉え方:対象者別の指導法を中心に」(2020 - 2024 年)の一環としてドイツ柔道連盟が 2022 年 7 月 1 日から実施する「昇級規定」(Kyū-Graduierungsordnung)に見られる生涯柔道に対するアプローチを考察した。2004 年以降、柔道人口の減少傾向を示したドイツにおいて、7~14 才の少年の登録人口が減少すると同時に 41 才以上の中高年の割合が徐々に増えてくる。したがって、ドイツの柔道は子供を中心とした教育的なスポーツから生涯スポーツへと変容してきたと考えられる。今回、ライブステージに合わせた生涯スポーツとしての柔道に焦点を当てながら、昇級システムの改正を考察してみた。

【方法】ドイツ柔道連盟のガイドラインを中心に、一次資料の分析を行った。 文献調査に加えて、今回の昇級システムの改正にかかわったドイツ柔道連盟の ワーキンググループの委員 Wolfgang Dax-Romswinkel 氏を対象に、聞き取り調 査も実施した。資料分析及び聞き取り調査に基づいて「昇級審査規定」 (Kyū-prüfungsordnung)から「昇級規定」(Kyū-Graduierungsordnung)への改正の 背景、その主な内容、及び 2022 年の昇級規定に見られるライブステージにあわ せた柔道教育へのアプローチを考察してみた。また、2022 年の改正をドイツ再 統一以降の 1995 年、2005 年及び 2015 年の改正と比較しながら、現在の昇級規 定に至った社会的な背景を考察してみた。

【結果および考察】昇級は「柔道を始める」8級から4級までの初心者の段階及び、「柔道家に成長する」3級から1級までの上級者の段階に分けてあるが、この昇級システムは昇段規定の「柔道に励む」(1~3段)と4段以上の「柔道を生きる:柔道の専門家になる」と連携されている。初心者の段階において「基礎プログラム」(Grundprogramm)を習得し、手技、腰技と足技を含む投技に加えて抑込技、関節技や絞技の一部からなる固技を学ぶ。また、8級は以前の昇級審査規定と違って、技術の獲得程度ではなく、数時間で学べる柔道の基礎的な理解を示す柔道の「黒帯への第一歩」として捉えている。上級者は基礎プログアムから「拡大プログラム」(Erweiterungsprogramm)へと入り、投技において真捨身技と横捨身技が加えるようになり、固技においても技の幅が広がる。1級から「競技柔道」、「形」、「護身術」(16才以上)及び「柔道体操」(16才以上)という四つの領域から一つを選択し、これからの柔道人生の方向を決める柔道家としての個人的なプロファイルの基盤を作る。

【結論】ドイツ柔道連盟が2022年7月1日に新たに導入する昇級規定は、柔道を始めるハードルを下げると同時に、選択肢を増やすことによって年齢に関係なく以前の「昇級審査規定」より昇級し易いシステムになると考えられる。また、ドイツの「昇級規定」は技術の習得(Fertigkeitsmodell)を重視した「昇級審査規定」から柔道活動に参加、活躍できる技能の習得を強調する柔軟性がある「技能モデル」(Kompetenzmodell)への柔道教育におけるシフトを示す。

IA-4

武道必修化による剣道授業における学習成果の変化

○阿部剣征(順天堂大学大学院), 関伸夫(順天堂大学大学院), 中村充(順天堂大学)

【目的】

平成24年より、中学校保健体育授業において武道が必修化となった。必修化にあたっては、指導者養成・施設整備や生徒の否定的イメージ払拭の必要性が指摘されていた。それに対し、文部科学省は公立中学校の施設整備への補助として予算を計上し、日本武道館や全日本剣道連盟は剣道を専門としない教員向けの研修会を実施するなど、様々な取り組みを行ってきた。

保健体育授業の効果には「環境」が影響し、特に「勢い」「雰囲気」が重要であると報告されている(高橋他,2008)。しかしこれまでのところ、環境整備や教材研究による学習成果の変化検証は行われていない。

そこで本研究では、武道必修化前後に受講者が感じた学習成果の変化を明らかにし、授業 条件の影響について検討することを目的とした。

【方法】

○調査対象者及び調査方法

中学校で武道(剣道)授業を受けた者とし、武道必修化後 19歳~22歳、武道必修化前 28歳~31歳の男女約 600 名を対象とした。調査方法は、Web での質問紙調査法を用いた。

○調査内容

《学習条件に関する質問項目》

授業条件について、「授業の基礎的条件 (4 項目)」、「授業の内容的条件 (3 項目)」とした。 《学習成果に関する質問項目》

学習指導要領 (H20 年版)から 4 つのカテゴリー「技能 (2 項目)」、「態度 (5 項目)」、「知識 (6 項目)」、「思考・判断 (2 項目)」を抽出し、さらに「達成度 (2 項目)」を加え、5 カテゴリー17 項目で構成した。

【結果及び考察】

学習条件は、2 項目について有意な変化が認められた。必修化前と比較して必修化後は、授業の雰囲気は明るいと感じる割合が増え(p<0.01)、授業内でゲーム的な要素の実施が多いと感じる割合が増えていた(p<0.05)。

学習成果は、5 カテゴリー全て及び 15 項目について有意に上昇していた。知識、態度、 思考・判断、達成度については、必修化前は否定的な得点であったが必修化後には肯定的な 得点に上昇していた。しかし技能については、有意な得点上昇が認められたものの必修化後 も否定的な得点にとどまった。

本研究での調査項目においては、技能については学習段階とゲーム的な学習活動が影響を及ぼし、知識、態度、思考・判断、達成度については雰囲気とゲーム的な学習活動が影響を及ぼすと推察された。

IA-5

剣道試合・審判規則第1条の「公明正大」について

○加藤純一(皇學館大学)

【目的】全日本剣道連盟は、「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合審判法」を策定した.この規定では姑息な「鍔競り合い」、意図的な「時間空費」や「防御姿勢」による相手への「接近する行為」を反則とし、その根拠を「剣道試合・審判規則第1条:剣の理法を全うしつつ、公明正大に試合をし、適正公平に審判すること」とした.本稿ではこの「公明正大」を取り上げ、「公明正大に試合をする」ことの意味について考察する.このことは日本国内のみならず、剣道の海外普及においても重要な意義を有すると考えている.

【公明正大の語源・出典】酒井純子によれば、漢語が氾濫していた明治初期において、福澤諭吉は漢字節減論を自ら実践すべく多くの四字漢語を使用していたとし、「公明正大」「一身一家」などを上げている。「公明正大」は「公明」と「正大」が合わさった言葉であり、大槻文彦『大言海』にも「此語ノ出典、探り得ず」(第2巻 P235)とある。用例としては福澤諭吉『西洋事情初編』(慶應2年)より前の加藤弘之『鄰艸』(文久元年)に既に見られるため、福澤諭吉の造語とも言い難い。諸橋轍次『大漢和辭典』では、「公明正大」は「心が潔白で正しく大きい」とあるのみで、出典は明記されていない。なお、「公明」の意味は「私心がなく、かくしだてしないこと。よこしまのないこと」とあり、「正大」は「ただしくおほきいこと、意思・言行が正々堂々と立派であること」とある。

【剣道・剣術書にみる公明正大】小川金之助『帝国剣道教本』(昭和12年)には、「剣道修行の心得」の1つとして「剣道と名誉廉恥」が上げられている。そこには「剣道を學ぶ者は此の古武士の高潔なる氣風を偲び、常に心を公明正大に保ち、私心邪念を去り、欲を離れ、毀譽褒貶に囚はれず、名譽を重んじ恥を知り、卑怯・未練な振舞があつてはならぬ」(pp9-10)とある。また、陸軍戸山學校劍術科『劍術教範詳解』(昭和16年)では「武徳ノ徳目」として五つを上げ、その四「信義ニ該當スル徳目」には「1. 實直,2. 廉恥,3. 公明正大」とある。ここでの「公明正大」は心の有り様の「一つの様態」として理解される。

【スポーツと公明正大】阿部生雄は「武田千代三郎の『競技道』の系譜とその性格」(筑波大学体育科学系紀要 25:31-48,2002)において、「競技道」を「人らしき人を養成する目的を達する手段の一つ」(明治 37年)と示し、「武田は西洋的競技運動(スポーツ)を通じて、礼儀を重んじ、仁義を尊び、公明正大に全力を尽くし勝負し、相手を己の師と見なし、勝敗を天運に委ねるという武士気質の養成、即ち『競技道』の確立を期待していた」として、忠誠や犠牲、信義、廉恥、礼儀、潔白、質素、倹約、尚武、名誉、情愛といった武士道に見られる資質は「競技道」の求める資質と合致するとしている。(pp44-45)

【まとめ】「公明正大」が武士気質(武士道)と関わり合いがあるとすれば、それは当然ながら「人間形成の道」とも関わりを有するということになろう.

明治から昭和戦前期に設立された弓道の統括団体に関する研究: 定款の分析を中心として

五賀友継(国際武道大学)

【研究の背景及び目的】

明治維新以降、近代スポーツが日本へと導入されると、活動範囲の拡大に伴って種目ごとに組織化が進展し、それらは全国的な競技統括団体として成立していった。こうした組織化は、在来の身体運動文化であった弓道でも行われたが、明治期から昭和戦前期にかけて、弓道では複数の全国展開を行う団体が存立した。会員数から言えば、大日本武徳会の弓道部が最大であり、それに匹敵する勢力として大日本弓道会、学校や政界に影響力を有していた生弓会、その他の新興団体に加えて、流派団体の中にも一定の全国展開を図るものがあった。その結果、例えば弓道形の統一を巡る混乱及び失敗でみられるように、弓道では様々な事柄において「統一」を図ろうとした際、各団体の利害関係が衝突し、時には弓道家間の分断をもたらすことがあった。

それでは、なぜ弓道では複数の団体が存立することになったのか。これまで、 各団体に関する研究は一定の蓄積がなされてきたが、それらを比較検討すると いった視点からの研究は行われてきていない。

そこで、本研究では明治期から昭和戦前期において存立した弓道団体について、定款の分析を通じて、それぞれの組織の特徴を明らかにする。そして、それらを比較することで、複数の全国展開を行う弓道団体が存立するに至った背景について明らかにする。

【方法】

弓道団体のうち、法人格を有し、政府によって「体育運動団体」と認められていた4つの団体(大日本武徳会、大日本弓道会、生弓会、大日本射覚院)を分析対象とした。『本邦ニ於ケル体育運動団体ニ関スル調査』(文部省、1933)を主史料とし、各団体の定款に記載された目的及び事業を中心として、比較・検討する。

【結果及び考察】

定款中の記載から見てみれば、弓道の組織化は「試合」の開催を前提としておらず、競技規則の統一や制定などを記載している弓道団体は確認できなかった。一方で、いずれの団体も「技術審査」を定款中に記載し、重点を置いていた。

複数の弓道団体が存立するに至った要因の一つとしては、「技術審査」の違いがあったことが指摘できる。各団体が設定する「目的」が異なっていることから、その違いによって各団体独自の「技術の合理化」が行われ、それが「技術審査」の内容および評価法の違いを生みだしたと考えられる。

武道歌の計量テキスト分析による居合術の理念と術理の抽出

〇小林勝法(文教大学)

【目的】武道歌には武道の理念や術理が詠まれているが、これらを把握しようとする場合、人が解釈をする段階で主観的にならざるを得ないし、大量の武道歌を解釈する際に妥当性や信頼性を保つのは困難である。そこで、計量的な分析方法を使用することで、より客観的で労力も少なく分析ができるのではないかと考えた。しかし、短詩は比喩表現が多く、ほとんどが文法規則を満たしていないので、計量テキスト分析の適用が適切かどうか、そのこと自体も検討する必要がある。そこで、①計量テキスト分析で武道歌の意味内容を抽出できるか、②流派の特徴を抽出できるか、③これらの方法は適切かについて明らかにすることを本研究の目的とする。武道歌の解釈をより客観的で簡便な方法できれば、武道間や流派間での比較もしやすいと期待できる。

【方法】分析の対象とした武道歌は、『武道歌撰集』(今村嘉雄編)に採録されている居合術7流派の武道歌180首である。計量テキスト分析には、技術情報が公開され、広く研究に使用されている分析ソフトのKH Coder (樋口耕一2014)を使用した。分析の手順と手法は、まず①頻出語を抽出し、特徴的な語を把握した。そして、②階層的クラスター分析により頻出語をグループ化し、それらの語をもつ武道歌を確認し、その内容を分析した。最後に、③流派を外部変数として共起ネットワーク図を描画し、その結果から流派の特徴を把握した。

本手法の妥当性の検討については、先行研究の小林勝法(2004)「武道歌に見る居合術の理念と術理」の結果と比較考察した。

【結果および考察】①頻出語は、名詞では、「心」(48 回)、「居合」(25 回)、「敵」(24 回)であった。動詞では、「抜く」(32 回)、「切る」(31 回)、「知る」(29 回)であった。②階層的クラスター分析により生成された 13 のクラスターについて、小林(2004)が示した 11 の主題にしたがって分類したところ、「(居合の)理念」、「技法」(身体技法)、「心法」(精神的技術)、「武道精神」、「稽古心得」となった。これらは小林(2004)の結果の上位 5 項目と一致した。したがって、本研究の方法でもどのような主題が詠まれているかを推測することは可能であると言える。そして、③共起ネットワーク図からは各流派の特徴を読み取ることができた。その結果は、小林(2004)の結果と一部が一致し、より顕著な特徴が浮かび出された結果となった。

【結論】①頻出語の抽出は計量テキスト分析が得意とする方法であり、武道や流派の特徴を大掴みすることができると評価できる。②階層的クラスター分析による内容分析は先行研究の結果と一致したことから適切な方法であると評価できる。③共起ネットワーク図からは各流派の特徴を一目瞭然に読み取ることができ、優れた方法だと評価できる。

より多くの武道歌や他の武道を対象とした研究を行い、本手法の妥当性についてさらに検討を進める必要がある。

異なる対象への Grit に関する研究 - 学生アスリートとその競技成績に着目して -

岩尾敬太 (京葉ガス㈱)

【目的】近年、アスリートのセカンドキャリアは様々な議論の対象となってきた。しかし、現役のアスリートにとって円滑なキャリアトランジションを達成することはとても難しい。このような背景を踏まえて本研究では、「競技で培ったスキルは本当にビジネス社会でも活かすことが出来るのか」という疑問を解明していくこととする。

【方法】本研究は Grit 能力の本来的な性質を明らかにし、それを基に学生のキャリア選択への一助となることを目的とするものである。また個人に備わるとされている Grit スコアは、その個人の身体能力や思考力に影響を受けることなく、その双方に同じ Grit スコアを発揮することが出来るのだろうか。以上の疑問は、Grit 能力をドメイン別に調査することによって明らかとなるだろう。本研究では、競技を生活の中心とした学生アスリートの Grit を 3 種類のドメイン別に調査する。すべての対象者に年齢、競技継続年数、競技成績について質問した。競技成績は、全国大会出場経験無し、全国大会出場経験有り、全国大会入賞経験有りの 3 群に分け分析を行った。また、本研究では、Duckworthet al (2007)が開発した Grit 尺度を竹橋ら (2019)が日本語に訳し検討を行い作成した日本語版 Grit 尺度を用いた。

【結果および考察】分析の結果、ドメイン別の Grit スコアに有意な差が見られた多重比較 (Bonferroni 法、5%水準) を行ったところ、全てのドメイン別 Grit スコアの間で有意な差が見られた。さらにドメイン別の Grit スコアにおける競技成績の影響を分析するために分散分析を行った。その結果、競技成績はドメイン別の Grit スコアに対し有意であった。

上記の結果からわかることは、Grit の粘り強さはある程度転用できているが、興味を持てないことが Grit 能力の転用を妨げており、よってアスリートの Grit 能力の他分野への転用は限定的と言える。さらに、ドメイン別 Grit スコアを従属変数に設定し、競技成績を独立変数とした解析の結果、一般 Grit とアスリート Grit は競技成績に比例して高くなることが確認された。一方、学業 Grit は競技成績に対して有意な差がみられなかった。この結果からは、競技スポーツを目的として進学した学生アスリートにとって学業が興味を惹くものではなく、そのため競技における Grit が他のドメインに転用されないことの証明ともなった。

【結論】本研究では、競技を生活の中心とした学生アスリートがドメイン別にGritを測定した際に差が生まれるのか、さらにそれが競技成績に関連するのかといった疑問を明らかにすることが出来た。今後は、異なる領域におけるGritスコア調査をする必要があるだろう。

大学女子柔道選手が柔道に向かう動機付けに関する調査研究

○川戸湧也(仙台大学), 南條充寿(仙台大学)

【目的】近年,柔道を取り巻く環境は多様化しており,柔道に対する世間の印象や柔道に取り組む選手自身の価値観も多様になっていると考えられる.指導者は多様化する選手の価値観を受容する姿勢が求められている.これまでも柔道選手を対象として価値観や動機付けを調査した研究や,柔道に対する印象の調査は行われてきたが,特に大学生の女子柔道選手に着目をした研究はなかった.そこで本研究では,大学女子柔道選手が柔道に向かう動機付けを調査し,彼女たちがどのような価値観や動機付けによって柔道に取り組んでいるのかを明らかにすることを試みた.

【方法】本研究では、全日本学生柔道優勝大会(女子 5 人制)に出場している 8 大学に調査への協力を依頼し、回答を求めた. その結果、94 名から承諾を得て、調査を実施した. 対象者はいずれも 4 年制大学に在籍する大学生であり、平均年齢は 20.2 歳(±1.2 歳)であった.

本研究は、先行研究に倣ってデザインされた.調査項目について、基本的属性として①年齢、②競技レベル、③過去の実績、④競技歴を収集した.あわせて、柔道に向かう動機付けに関する自由記述回答を収集した.柔道に向かう動機付けについての調査では、20 答法が参考にされた.20 答法は、「私は~である」といった文章を 20 回書き出す文章完成法であり、対象者には、些細な内容を含めて 20 回を目安に可能な限り多く挙げるように求めた.本研究では、941の自由記述が回収され、これらを分析の対象とした.

自由記述の分析には、KH Coder によるテキストマイニングを用いた. テキストマイニングによって、抽出された文章における単語の出現頻度や文章の類似性を整理し、対象者の柔道に向かう動機付けについて検討した.

【結果および考察】テキストマイニングを用いて、単語の出現頻度を検証したところ、「好き(148回)」、「楽しい(124回)」、「嬉しい(58回)」といった語が頻出していた.このことから対象者の多くは、柔道に対して肯定的な印象を持っていることが示された.

続いて、文章の類似性を検証したところ、15 のまとまりが整理された.これをみると、例えば、「先輩」と「尊敬」は同じような文章で用いられていたことが示された.他にも、「結果」「残す」「親」「恩返し」というまとまりや、「精神」「鍛える」というまとまり、「同期」「頑張る」「出会える」「思える」といったまとまりが確認され、多様な動機に基づいて柔道を継続していることが示された.

【結論】本研究を通して、大学生女子柔道選手は多様な動機付けに基づいて柔道に取り組んでいることが示された。ただし、これは全日本学生柔道優勝大会(女子5人制)に出場している大学に所属している選手の回答であるということに注意が必要であろう。今後は、対象者を増やしてより深く検討したい。

各国の少年柔道における傷害調査

○曽我部晋哉 (甲南大学), 戸田将太 (兵庫教育大学), 山崎俊輔 (甲南大学)

【目的】柔道は、これまでにも少年期における他競技と比較しても傷害(外傷及び障害を含む)の多い競技であることが報告されている.柔道連盟登録者数の多いフランスでは、我が国と比較して事故や傷害少ないと報告ことが報告されているが、実際の状況と異なる可能性もある.そこで、本研究では各国の道場に協力を得て、日本おける少年柔道世代(6歳~12歳)を対象に、各道場単位で傷害の発生状況を比較した.

【方法】調査対象国は、日本(n=143)、カナダ(n=92)、フランス(n=128)、オランダ(n=104)、イギリス(n=92)、オーストラリア(n=118)、アメリカ(n=130)とした.調査方法は、各国道場に記述式のアンケートを依頼し、12歳までの柔道を実施している保護者に対して回答させた.道場による指導法の偏りを考慮し、少なくとも各国3道場以上より回答を得た.調査内容は、柔道始めた年齢、柔道歴、柔道による傷害歴の有無、傷害の部位、受傷時の練習内容、受傷回数とした.得られたデータを項目ごとに平均化し比較した.

【結果および考察】各国の柔道開始年齢・練習頻度・練習時間を表 1 に示す. 柔道開始年齢が最も早いのがフランス $(6.07\pm2.44\mathrm{yrs})$ であり、最も遅いのがカナダ $(7.49\pm2.18\mathrm{yrs})$ であった。また、1 週間の練習頻度は日本が最も高く $(2.65\pm1.2\,\mathrm{回})$ 、また 1 回の練習における時間においても日本が最も長かった $(1.97\pm0.59\,\mathrm{時間})$.

XIII THE WELL AND THE THE															
		日本 (n=143)		カナダ(n=92)		フランス(n=128)		オランダ(n=104)		イギリス(n=92)		オーストラリア(n-118)		アメリカ(n=130)	
`	$\sqrt{\ }$	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
開始生	年齢	6.14	2.02	7.49	2.18	6.07	2.44	4.91	1.52	6.72	2.57	6.09	1.69	6.5	2.16
平均	頻度	2.65	1.2	2.17	0.61	1.47	0.66	1.44	0.94	2.52	0.86	1.87	0.83	2.26	0.95
平均田	時間	1.97	0.59	1.15	0.31	1.26	0.43	1.42	0.72	1.72	0.54	1.27	0.93	1.38	0.41

表 1. 各国の柔道開始年齢・練習頻度・練習時間

また,通院するほどの傷害の経験について「有」と回答した割合については,イギリス 27.9%,次いで日本 19.6%,オーストラリア 12.4%,カナダ 6.0%,フランス 5.0%,アメリカ 3.0%,オランダ 2.0%,順となった.特に日本の場合,肩周囲の損傷の割合が高く,全体の傷害の中でも 20.7%と高い頻度で生じていることが分かった.

【結論】日本やイギリスの様に練習の頻度や1回における練習時間が長い国は、当然傷害のリスクが大きくなる.日本の場合は、肩部の傷害の割合が高いのに対し、イギリスでは上腕骨の骨折の割合が高い.つまり、日本の肩の傷害が多い原因の一つに、初心者にみられるような手をつくという行為で受傷するのではなく、投げられた時に肩から落下し受傷するということが考えられる.これらのことを考えると、日本の様に早期から乱取を実施することが傷害のリスクを高める理由の一つではないかと考えられた.

近代期の武士道論者にみられる武道観に関する一考察

〇堀川 峻(筑波大学),酒井利信(筑波大学),大石純子(筑波大学)

【背景及び目的】

武道は「武士道の伝統に由来する」身体文化と定義されており、その伝統性 は武士道の語によって表現されることが多々ある。一方で、近年では近代以降 の武士道思想を「創出された伝統」であるとの立場からの考察する先学も多く みられ、武士道の伝統性自体に多く問題提起が為されている。しかし現代武道 の伝統性・文化性を改めて問い直す上では、このような先学の指摘を踏まえつ つ、近世武士の思想から近代武士道へと続く思想的な連続性を紐解き、さらに 近代以降の武士道と武道(近世でいうところの武術・武芸)との関連を解き明 かしていくことが急務の課題であるといえる。演者はこれまで近代期の武士道 論について、特に明治 30 年前後に始まる「武士道ブーム」発生以前からの思想 的連続性に注目して研究を進めてきており、その中で史学者である重野安繹・ 松本愛重・内藤耻叟、当時を代表する武士道論者である井上哲次郎が、「武士道 ブーム」発生以前から培ってきた史学に対する立場を背景として武士道論を語 ったことを明らかにしてきた。そこで本研究では、上記4名の武士道論におい て武道がいかに語られているのかを、彼らの思想的な基盤である史学に対する 立場・認識に注目して紐解くことで、近代武士道がもつ思想的連続性と近代以 降の武道との関連性を明らかにすることを目的とする。

【方法及び資料】

本研究は、上記4名の武士道に関する論稿を取り上げ、まず彼らの武士道論について演者のこれまでの議論を含めつつ改めて詳細に検討を行い、さらにその中で武道がいかに語られているのかについて紐解いていく。具体的な文献資料としては、松本愛重「武士道」(明治38年、1905)・重野安繹・日下寛『日本武士道』(明治42年、1909)・内藤耻叟『日本兵士』(明治28年、1895)・井上哲次郎「宮本武蔵と武士道」(大正4年、1915)を用いる。

【結果および考察】

まず史学の中でも、史実の探求のみを重視する「史実を忠実に世に傳える」 立場の流れを汲む重野・松本は、武士道に関しても思想的変遷を叙述すること に終始している点に特徴がある。そのような武士道論の中で、彼らは武道を武 士道の歴史的な盛衰と一体のものとして捉えており、さらに重野は近世期に活 躍した柳生宗矩を取り上げつつ、禅に関わる思想も武士道の一要素として歴史を 道徳的に見る」立場である内藤・井上は、武士道を「人としふみ行うべき道」 や「武士の守るべき道徳」と明確に定義しながら、「武藝とそれから武士道と や「武士の守るべき道徳」と明確に定義しながら、「武藝とそれから武士道と云 ふものは、相互に關係があるけれども、區別しなければならぬ」など、武 武士道の区別を強調しており、その点で重野・松本との相違がみられた。 し井上は宮本武蔵を取り上げて、「劍道からして悟を開いて、武士道と云か と一致するところがある」とも述べており、「悟り」の部分は武士道の道徳に 致するところがあると考えていたことも明らかとなった。

その他詳細な考察については紙面の都合上割愛する。

剣道における比喩表現に関する一考察 一明治・大正期の剣道書を中心に一

○中野香月(天理大学大学院) 軽米克尊(天理大学体育学部)

【はじめに】剣道は戦場で戦う技術であった剣術を起源とする、日本発祥の運動文化である。しかし、現在の日本社会における生活様式からすると、非日常的な動きが多い。このことが、剣道の技術習得を困難にしている要因の一つではないだろうか。このように習得が困難な技術を指導する際に剣道では様々な比喩表現が用いられる。本研究では近代期の剣道書の中でも特に明治・大正期の剣道書に焦点を当て、比喩表現を抽出し、考察する。

【先行研究と問題の所在】先行研究としては、生田久美子の「わざ言語」に関する研究がある。わざ言語とは相手にある感覚や行動を生じさせたり、現する言葉であり、生田は伝統芸能の指導現場におけるフィールドワークから、音葉であり、生田は伝統芸能の指導現場におけるフィールドワークから、有を役す、③卓越者の達成状況の感覚を学習者が自ら探っていまうに誘うといくとも指導書に記されたわざ言語が効果を発揮する可能性を指摘し、わざ言語が対果を発揮する可能性を指摘し、わざ言語が対果を発揮する可能性を指摘し、わざ言語が技のなりないでいる。これらを踏まえ、軽米は『兵法家伝書』『五輪書』に決まると述べている。これらを踏まえ、軽米は『兵法家伝書』『五輪書』にみられる言語表現を考察し、特に伝えたい事柄に比喩表現が多用されること指摘し、剣術伝書における比喩表現を考察することで技術の要点や微妙なニュアられる主要がると述べる。以上の先行研究の知見から、剣道におき文献に記載された言語表現に注目する意義があると考えてよい。

本研究で考察対象とする近代期は、公教育への参入、大日本武徳会による武道教員の養成、大日本帝国剣道形の制定(大正元年)による剣術流派の統一などが行われた。これらの史実に鑑みると、明治~大正期までにおおよそ現代剣道の原型が形成されたと考えられ、この期間の剣道書を考察することにより現代剣道の指導にも役立てることが出来ると考える。以上のことから、本研究においては近代期の剣道書にみられる比喩表現について考察し、その技術の要点を明らかにすることを目的とする。

【研究方法】近代期の剣道書を集成した『近代剣道名著大系』(全 14 巻)から から比喩表現を抽出し、文脈に留意しつつ、その表現が①何(のわざ)の②ど のような性質について表現しているのかを考察する。

【考察】現段階では、特に理想的な心のあり方に比喩表現が多用されていることが明らかとなった。澄んだ心については「明鏡」、一か所に留めてはいけない心には「水が流れるように」といった表現がみられる。また、手の内に関する記述も多く、「茶巾絞り」や「鈴を振るように」などの表現が用いられていることが確認された。

なお、本研究は科学研究費 22K11692 の助成を得て行ったものである。

近代初期女子教育における武道論の考察:星野天知に着目して

○大石純子(筑波大学)

【背景と問題の所在】明治初期は、武士社会の崩壊及び近代社会形成より武術・武芸への関心の停滞がみられたが、それも次第に克服され、徐々に武術・武芸に関する言説が表出している。一方この時期は、女性解放思想や女子教育論の台頭によって、近世期に比べ社会思潮における「女性」の存在感の増大がみられた。当時の社会思潮において存在感を増しつつあった「女性」という要素は、この時期における武道思想の発展や展開に何らかの影響を及ぼしたのか否か、影響を及ぼしたのであるとすれば、それはどのような影響であったのか。これらを解明すべき課題とし研究を進めている。この研究は、現代社会において多様性を許容しつつ未来に向かって展開している武道のあり方を見据える一助になるのではなかろうか。

ここまでの演者による研究の進捗において、近代期剣道論における女性論の分析を行い、香川輝著の『剣道極意』に顕著な女性論の展開があることを確認した。また、香川がそれに先立って、彼の言説において「女性」に言及していたことも明らかにした。香川の言及に遡る明治 23 年頃には、明治女学校の教育に薙刀を中心とする武道の導入や、『女學雜誌』の編集刊行、掲載記事の執筆に活躍した巖本善治もいた。『女學雜誌』での巖本著「武道の辨」では、未だ検討の余地は残るものの、巖本を中心とした女学思想に喚起され武道の教育的意義が論じられた様相が垣間見えた。巖本とともに明治女学校教育に関わり、特に女子の武道指導に携わった星野天知も『女學雜誌』に武道に関する論説を掲載していた。その論稿において武道がどう語られ、論の展開にて「女性」という要素がどう影響したのか否か、詳細な解釈は進んでいない。演者の研究課題に照らし、この点が問題の所在である。

【研究目的】ルクミナイテは、星野天知が『女學雜誌』及び星野自身が編著した別の雑誌『女學生』に武道に関する論稿を多数掲載したことを指摘している。井上アヤ子もまた星野が『女學雜誌』に「女子教育と武道」と題する論説を掲載したと述べる。しかしそこでは、星野の武道論への女性の影響は考察していない。本研究では、星野の初期の論稿で『女學雜誌』に「論説」として掲載された「武道の發源」等に着目し内容を分析するとともに、星野という人物や周辺事項も踏まえて解釈することで星野の武道論における「女性」という要素の影響の有無を検討していくことを目的とする。

【研究方法】星野天知の伝記や「武道の發源」が『女學雜誌』に掲載された頃の諸状況も踏まえつつ、「武道の發源」等に語られる星野天知の武道論の様相を解釈し、そこに当時の社会思潮において存在感を増しつつあった「女性」という要素の影響を検討していく。

【考察及び結論】当日の発表資料にゆだねる。

武道種目に携わるスポーツ少年団指導者における 救急対応に関する実態

○佐野颯斗, 山本利春, 笠原政志, 清水伸子(国際武道大学)

【背景】スポーツ活動を直接的にサポートする指導者は、活動時に発生した負傷・疾病に対して救急対応を施す役割がある。近年、運動部活動改革の推進と地域における子供・若者のスポーツ機会の充実が本邦のスポーツ政策として掲げられ、その役割を担う地域団体のひとつにスポーツ少年団がある。生涯スポーツとしての意義や魅力をもつ武道では、救急対応を適切に行う必要性はより一層高い。しかしながら、武道種目に携わるスポーツ少年団指導者の救急対応の経験や自信などの実態については未だ明らかではない。

【目的】武道種目に携わるスポーツ少年団指導者の救急対応の経験や自信、種目別の救急対応に関する実態を明らかにし、地域において子供たちが安全で安心して武道に取り組める環境構築のための基礎資料にすることを目的とした。

【方法】全国の単位スポーツ少年団に在籍する指導者を対象に、Google フォームを用いてウェブ調査を実施した。調査内容は、1)対象者の基本的属性、2)救急対応の経験、3)救急対応の自信、に関する項目で構成された。本調査では4,408 名の指導者から回答を得て、全ての回答に欠損がなく、武道種目の指導に携わっている761名(剣道:363名、空手道:165名、柔道:136名、少林寺拳法:97名)を分析対象とした。調査結果は単純集計およびクロス集計を行い、種目別の救急対応に関する実態の比較検討には χ^2 検定を用いた。なお、統計学的有意水準は危険率5%未満とした。

【結果】武道種目に携わる指導者のうち、55.7%(424名)が指導現場で救急対応を行った経験を有しており、種目別に比較したところ、「柔道」、「空手道」で救急対応を行った経験を有する指導者の割合は有意に高い結果であった(柔道:75.7%、空手道:65.5%)。加えて、柔道の指導者は他種目の指導者よりも、骨折や脱臼、頭頚部外傷など、いずれの負傷・疾病においても対応経験を有する者の割合が有意に高かった。また、救急対応に対する自信を傷害分類別で比較集計したところ、全体の半数以上が自信無しと回答した項目として「骨折/脱臼」、「頭頚部外傷」、「歯・口の外傷」、「眼の外傷」が挙がった。

【結論】武道種目に携わるスポーツ少年団指導者は、指導現場で発生する様々な負傷・疾病に対し救急対応を行う可能性が十分あるものの、傷害分類の中には救急対応に自信が無い項目も多々存在することが明らかになった。さらに、武道種目間では救急対応の経験やその自信に大きな差異が生じていた。これらのことから、今後指導者を対象とした救急対応に関する講習や研修の見直しを図るとともに、武道種目それぞれに適した内容を実施することが課題だと考える。なお、本調査は日本スポーツ協会との共同研究により実施した。

弓道において矢の着点のばらつきを左右する発射時の要因について

○原田隆次(国際武道大学・早稲田大学大学院),相澤岳(早稲田大学大学院大学)

【目的】

弓道おける近的競技は、射手と的の距離が 28m で、的の大きさが半径 0.18m の競技環境で、基本的に実施される。勝敗は的中数で決定されるため、①矢の着点を的の中心に制御すること、および②試技間の誤差を小さくすることが射手に求められる。しかし、これまで射手が矢の着点をどのように制御しているのか直接的な要因は明らかになっていない。そこで本研究では、発射時における矢の挙動に関する変数のばらつきに着目し、矢の着点のばらつきとの関係を明らかにする。

【方法】

被験者は健全な男性 10 名で、実験矢(カーボン矢、ジュラルミン矢)以外は通常時と同じ弓具を使用し、それぞれ 20 射試技を実施した。

実験環境は、屋内において近的競技距離 28m とし、測定には 3 次元モーションキャプチャシステム (VICON) を用いた。射手の立つ位置から的まで直線を引き、延長線上の同じ高さの床から 0.27m 上を的の中心点 (原点) とし、上が正、下が負とした。さらに水平軸と鉛直の方向を垂直軸とし、右を正、左を負とし、原点と矢の着点の距離を上下左右それぞれ実測した。

また、発射時の矢の挙動に関する変数として、発射直前の狙いの向き、弦と矢の分離直後の発射位置・初速度・発射角度、初速度ベクトルに対する矢の角度、矢の曲率を算出した。そして、被験者ごとの、発射時の矢の挙動に関する変数について試技の標準偏差(SD)を算出し、矢の着点の SD と、ピアソンの積率相関分析を行なった。

【結果および考察】

矢の垂直誤差の SD と発射時の矢の挙動に関する変数の SD について、カーボン矢は、垂直面における、発射直前の狙いの向き (r=.81, p<.01)、初速度ベクトルと矢の角度 (r=.82, p<.01)、発射位置 (r=.70, p<.05)、発射角度 (r=.85, p<.01) と有意な強い正の相関、または正の相関がみられ、ジュラルミン矢は、垂直面における初速度ベクトルと矢の角度 (r=.88, p<.01)、発射角度 (r=.84, p<.01) と有意な強い正の相関がみられた。

水 平 誤 差 に つ い て は 、 カ ー ボ ン 矢 は 、 発 射 直 前 の 狙 い の 向 き (r=.74, p<.05) 水平面における初速度ベクトルと矢の角度 (r=.85, p<.01)、発射位置 (r=.63, p<.05)、発射角度 (r=.65, p<.05) と有意な強い正の相関、または正の相関がみられ、ジュラルミン矢は水平面における初速度ベクトルと 矢の角度 (r=.87, p<.01) と有意な強い正の相関、または正の相関がみられた、水平面における初速度 (r=-.65, p<.05) と有意な負の相関がみられた。

これらの結果は弓道の場合、カーボン矢を使用する際は、発射直前の狙いのばらつきと発射時の矢の挙動のばらつきが、矢の着点のばらつきを左右する要因となっているのに対し、ジュラルミン矢の場合は、発射時の矢の挙動のばらつきが、矢の着点のばらつきを左右する可能性があることを示唆している。

異なる素振り動作における上肢の筋発揮タイミングの特徴

○椿 武(神戸親和女子大学)

【目的】

これまでに、剣道初心者と熟練者の打突動作や素振り動作の特徴を動作分析などの手法を用いて比較検討した研究は数多く行われている。また、剣道に類似した運動の実践により、打突動作の習得を試みた研究が報告され、段階的な指導方法などが紹介されている。

筆者もこれまでに剣道初心者を対象に、気剣体の一致した打突動作(実践的な打突動作)の習得を目的とした研究に取り組んでおり、身長の70~80%程度の竹刀を使用した際に打突と踏み込みの時間差が短縮することを報告した。しかしながら、熟練者と初心者の打突動作の根本的な違いである、踏み込みと打突のタイミング(順序)の違いは、同様の様相にはならなかった。このことから、打突動作の機序となる筋の発揮タイミングを検討することによって、気剣体の一致した打突動作習得に寄与する新たな知見が得られると思われる。

そこで本研究では、基礎的なデータをとることを目的として、剣道初心者を対象に様々な条件での素振り動作を行わせ、その際の上肢の動作に関わる筋の発揮タイミングの違いを明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象者は、剣道の専門的な指導を受けたことのない女子大学生8名とした。本研究で実施した異なる素振り動作は、①座位で大きい素振り、②座位で小さい素振り、③立位で大きい素振り、④立位で小さい素振り、⑤送り足で大きい素振り、⑥送り足で小さい素振り、⑦踏み込み足で大きい素振り、⑧踏み込み足で小さい素振りの8種類の条件とした。

測定方法は、被験者の前方に光刺激発生装置を設置し、光刺激呈示後に上記の8種類の方法で素振り動作を行わせた。対象者には、光刺激呈示後できる限り早く素振り動作を開始するように教示した。その際、対象者の身体上部の8か所にワイヤレス筋電センサ(ロジカルプロダクト社製)を貼付し、サンプリング周波数1000Hzで計測を行った。筋電センサの貼付位置は、右僧帽筋、右三角筋前部、右上腕三頭筋、右上腕二頭筋、右撓側手根屈筋、右尺側手根屈筋、左上腕三頭筋、左上腕二頭筋の8か所とした。得られた筋電図の生体信号は、PCに取り込みBIMUTAS-Video(キッセイコムテック社製)を用いて分析を行い、光刺激呈示から各筋の筋発揮までの時間を算出した。

【結果および考察】

筋発揮タイミングにおいては、大きい素振りと小さい素振りとでは、光刺激呈示から素振り動作を開始する際の最初に筋活動を行う筋が異なることが明らかとなった。その他の結果や得られたデータの詳細については、学会大会当日に報告する。

TB-4

剣道難聴予防のための高機能サポーターの提案

○濱西伸治(東北学院大学)

【目的】ボクシングや剣道などの選手は 2~4kHz の周波数域で聴力低下が見られる. これらは頭部に繰り返し打撃や衝撃が加わることで, 頭蓋骨を伝わる振動である「骨導」が大きな要因となっているのではないかという仮説に至った. 我々はこのような難聴を「コンタクトスポーツ難聴」として新たに提唱する.

最近,筆者らにより3Dプリンタの技術を用いて衝撃を吸収できるサポーターが提案され,衝撃の低減効果が確認された.本研究では提案したサポーターを装着した面防具への打撃実験を行い,頭部での加速度と,外耳道内の音圧に着目した低減効果を評価した.

【方法】本研究では、2種類のサポーターを3Dプリンタで作成した.一つは加速度の低減を目的としたシリコン素材のサポーター、もう一つは衝撃音の保護を目的としたポリウレタン樹脂のサポーターであり、いずれも蜘蛛の巣のような構造になっている.

打撃実験では、剣道における打撃を想定し、石膏で作成した頭部模型を用いて頭頂部に加速度センサ、外耳道内部に小型マイクを取り付けた. ハンマーにより、一定の打撃力で打突部に振り下ろした際の頭頂部の加速度と外耳道内部の音圧を計測した.

【結果および考察】面防具の外側にサポーターを装着したものは、内側に装着したものより加速度が低減し、面防具のみへの打撃よりも加速度が約72%も低減した。面への打撃頻度が多い稽古時に本研究で提案したサポーターを面防具の外側に装着するだけで頭部への衝撃、および、それに起因する難聴を防げる可能性がある。また、装着時の頭部の違和感も抑えられる。

耳介部にサポーターを装着して同様の実験を行ったところ,面防具のみへの打撃時よりも,外耳道内部の音圧を約16dB低減させることに成功し,聴覚器官にダメージを与えるレベルから飛躍的に低下させることができた.

【結論】 3 Dプリンタ技術によって新たに提案したサポーターは,面の打撃頻度が多い稽古時などに面防具の外側に装着することで骨導や衝撃音の影響を最小限にできることが期待される.

科学研究費補助金(基盤研究 C)研究課題 21K11416 科学研究費補助金(基盤研究 C)研究課題 17K01775

大学男子剣道選手における面打突動作と各種跳躍能力について

○佐々木陽一朗(筑波大学),香田郡秀(筑波大学),谷川聡(筑波大学)

【目的】対人技能を伴う球技において、実戦に近い条件下で方向転換を素早く行うためには、下肢の爆発的な力発揮が必要であることが明らかとなっている. 対人競技である剣道競技においても、相手の動きに対して適切な判断を行い、瞬時に身体を移動させる能力は必要不可欠である.しかし、選択を伴う条件下での打突動作と、剣道選手の跳躍能力に着目した研究はなされていない.そこで本研究は、大学男子剣道選手を対象とし、選択を伴う面打突動作と跳躍能力の関係性を明らかにすることを目的とした.

【方法】対象者は、大学男子剣道部員 20 名とし、競技歴により上位群 10 名、下位群 10 名に区分した。

面試技において、協力者は被打突者として対象者と対峙させ、選択無しでは面部位を打突させ、選択有りの試技では、ランダムに打突部位を呈示もしくは竹刀で防御を行い、対象者に打突させた.面の試技として、選択の有無に加え、打突開始の間合を各被験者の身長×1.35 (以下:1.35 選択)、身長×1.4 (以下:1.4 選択)、230cm (以下:230 選択)の3つの間合を設定し、選択有無で各3つの間合で実施した.分析項目は、選択無しの試技においては、打突時間のみ、選択有りの試技においては、協力者の竹刀がy方向に動き、且つ0.03m/sに達した地点から、被験者の左大転子が0.05m/sに達した地点までを反応時間、反応時間終了地点から、被験者の竹刀が協力者の面部に接した地点までを打突時間、反応時間と打突時間を合わせたものを総打突時間と定義した(村瀬、2021).各試技、1人2本成功するまで実施し、選択無しでは打突時間、選択有りでは総打突時間が短い試技を分析対象試技とした.

跳躍能力は、リバウンドジャンプ(以下:RJ)、両脚及び片脚垂直跳び、両脚及び片脚立ち幅跳びを用いて測定した.分析項目は、RJ は跳躍高、接地時間、RJ-index、両脚及び片脚垂直跳びは跳躍高、両脚及び片脚立ち幅跳びにおいては跳躍距離とした.各跳躍試技において、2回ずつ測定し、高い値を示した試技を分析対象試技とした.

【結果および考察】選択無しの面試技においては、上位群と下位群の間で有意な差はみられなかった.選択を伴う面試技では、1.4選択で総打突時間、230選択では、総打突時間、反応時間において上位群が下位群よりも有意に短い値を示した.

また、跳躍能力においては、左片脚立ち幅跳び、右片脚立ち幅跳び、RJ 跳躍高及び RJ-index において上位群は有意に高い値を示した.

全体として選択無しの試技と跳躍能力の間では、いずれも相関関係はみられなかったが、選択を伴う試技において、RJ-index及び片脚立ち幅跳びに相関関係が見られ、短い時間で水平方向に爆発的な力発揮を行うことができる上位群が短い反応時間で打突動作に移行している可能性が示唆された.

剣道授業における「かた」学習が新学習指導要領の3つの柱の育成に 及ぼす学習効果に関する研究

○菊本智之(常葉大学)

【目的】現行の中学校学習指導要領は、学校教育法施行規則の一部改正と同時に平成29年3月31日に改訂が行われた。従前の中学校学習指導要領(平成20年告示)の体育分野に示されていた(1)技能、(2)態度、(3)知識、思考・判断、という内容構成は、令和3年度から全面実施されている「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編」では、体育分野において育成を目指す資質・能力と豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する観点から、(1)知識及び技能、(2)思考力、判断力、表現力等、(3)学びに向かう力、人間性等、という三つの柱を踏まえた内容構造に整理された。このような学習指導要領の改訂の趣旨を鑑みた場合、限られた時数の中で防具を着装し竹刀の打突を前提とする剣道授業では十分な学習効果の獲得が困難である実態がある。そこで本研究では、より充実した剣道授業を体現化する方策として、我が国固有の伝統と文化とも言い換えることのできる「かた」学習の原理を導入した学習プログラムを提案し、その学習効果の検討を行うことで、義務教育において必修となっている中学校の剣道授業の教材開発を進める一助としたい。

【方法】まず現行の中学校学習指導要領によって企図されている武道領域の学習の観点について明らかにし、防具を着装して竹刀で打突を伴う授業における学習内容に期待される効果について現状把握を試みる。そこから現在の剣道の授業の抱える課題の解決策として「かた」学習のプログラムを組み込んだ単元計画を提案し、学習者の思考や学習過程を確認していくことを企図したワークシートを活用することによって、学習プログラムの効果、課題、検討を試みる。

【結果および考察】運動能力の向上や技能(スキル)の獲得に主眼を置き、攻防を楽しむことを目的とする競技的な剣道授業の教材は、一部の技能を獲得できた学習者にとっては有効に機能する可能性がある。しかし、全国すべての中学校1年生、2年生という多様な発達段階にある学習者に対して有効な授業内容となるには、より多くの学習者にとって有効な教材である必要があり、他の領域では代替不可能な観点からの単元計画が必要である。攻防に関する考え方も、如何に相手に勝つ技能を身に付けるかという結果に結び付く攻防ではなく、「かた」に内包される「技の構成」「攻防の原理」を学ぶ教材として「かた」学習という日本的な学習論の学習方法を獲得することに大きな意味を見出せる。

【結論】「かた」学習を活用した剣道授業では、個人内の一人称的な課題、相手との関係性を意識することで得られる二人称的な課題、違う組の表現する「かた」を評価することで獲得できる三人称的な課題に取り組むことが可能であり、学習指導要領のねらいとする「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての教材開発に貢献できる可能性が認められる。

「アダプテーションマッチ」を取り入れた中学校の 剣道授業に関する定性的研究

○山田弥香(福岡教育大学大学院),本多壮太郎(福岡教育大学)

【目的】本研究は中学校第3学年を対象に、剣道授業で「アダプテーションマッチ」を導入し、生徒が記入したアダプテーションシートの分析を通して、アダプテーションマッチを取り入れた中学校の剣道授業の有効性について明らかにすることを目的とした。

【方法】F 中学校第 3 学年 121 名の生徒を対象とし、2021 年 11 月~12 月にかけて 12 時間で構成される授業を実施した。アダプテーションマッチを 6~9 時間目にかけて行い、生徒には 7~9 時間目にアダプテーションシートへ記入をしてもらった。第 6 時間目と第 7 時間目は男女別で試合を行い、第 8 時間目と第 9 時間目は男女混合の試合を行った。 $7\cdot8\cdot9$ 時間目に生徒が記入したアダプテーションシートを分析対象とし、楽しさの 10 段階評価の度数分布を算出するとともに、全体、男子、女子に分類してそれぞれの平均値及び男子と女子の平均値の比較を行った。また、感想の記述をテキストマイニングソフトウェアである KH Coder を用いて分析・検討を行った。

【結果および考察】欠席・見学・回答の不備を除いた92名を分析対象とした。 授業で行ったアダプテーションマッチへの取り組みが楽しかったのかを明らか にするために、楽しさの10段階評価を男子と女子の平均値で見ていくと、7時 間目の男子は8.77、女子は8.68、8時間目の男子は8.60、女子は8.89、9時間 目の男子は9.02,女子は8.98となり,各時間の男子と女子の平均値を比較した 結果,どの時間も有意な差は見られなかった。これにより、アダプテーション マッチの取り組みの楽しさについて男子、女子関係なく高い評価を示したこと が明らかになった。また、対象者がアダプテーションマッチを通してどのよう なことを感じたのかを明らかにするため、各時間の生徒の感想の記述を KH Coder を用いて分析を行った結果、「お互いいい気持ちで試合をするためによく 話し合って納得したうえで活動することができた」など7時間目から相手のこ とを意識した記述が見られた。また、「右足を強く踏み込んで打った後に抜ける 勢いで面を打つとよい面が打てた」といった自己の技能について触れることが できている記述も見られ、9時間目になると「技を 1 つだけに制限をかけられ たときにフェイントを使うと,面と小手をあけさせることができた」などの攻 撃方法の工夫に関する記述が見られていることが明らかになった。

【結論】分析の結果、生徒はアダプテーションマッチを通して様々な違いを超えて互いに楽しく試し合うことができ、技能面で様々なことへの気づきや、できるようになったことが増えていることがうかがえた。このような結果より、アダプテーションマッチが共生の視点での学びや技能の改善に向けた取り組みを促す上で有効であったのではないかと考えられる。

剣道における指導行動と動機づけの関係

○白須鉄也(東海大学大学院), 天野聡(東海大学), 笹木春光(東海大学), 松本秀夫(東海大学)

【目的】

剣道における指導者の指導行動は、指導を受ける側の動機づけに大きな影響を与えている.これまで中高の運動部活動を対象にした研究は、伊藤(2016)、藤田(2010)、松本(2018)らによって行われているが、幅広い年齢を対象とした研究は見当たらない.剣道は、幼児から高齢者まで幅広い年齢がともに稽古できることから、その指導者の指導行動の影響も特徴があることが考えられる.そこで本研究は、剣道用の指導行動と動機づけの質問紙を作成し、指導行動と心理的欲求、動機づけとの関係を明らかにすることを目的とする.

【方法】

- 1. 調査対象:現在剣道を行っている 18 歳以上の成人を対象とした.
- 2.調査方法: SNS にて機縁法による調査依頼を行い, SurveyMonkey(オンライン調査システム)を用いて調査を実施した.
- 3.調査内容: 剣道指導者の指導行動測定尺度を作成するにあたっては、伊藤ら(2016)が作成した指導行動を測定する尺度、松本ら(2018)が作成したコーチの統制的行動尺度(日本語版 Controlling Coaching Behaviors Scale)をもとに4因子(関係性支援行動,有能さ支援行動,統制的行動,関係性阻害行動:17項目)を作成した。また、心理的欲求、動機づけとの関係性をみるため、藤田らが作成した、「心理欲求尺度」3因子(有能さへの欲求、自律性への欲求、関係性への欲求:12項目)、池本らが作成した、「動機づけ尺度」4因子(内発的動機づけ、同一視的調整、取り入れ的調整、外的調整、計18項目)をそれぞれ剣道用に修正し、質問を行った。
- 4. 分析方法: 剣道用の指導行動・心理的欲求・動機づけ尺度を作成したことから各項目に対して、それぞれ重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転探索的因子分析を実施した. 固有値 1.0 を基準に因子数を決定し、解釈は因子負荷量 0.4 以上を採用した. 各因子の因子得点を算出し、相関分析、重回帰分析、直接効果、間接効果の検討を行った.

【結果および考察】

調査の結果 457 名 (男性 344 名,女性 111 名)を分析対象とした.指導行動では,有能さ支援行動 (7項目),関係性支援・阻害行動 (6項目),統制的行動 (4項目)3因子が抽出された.関係性の支援と阻害は負荷量にマイナスとして同一因子として抽出された.心理的欲求では,関係性への欲求 (4項目),有能さへの欲求 (4項目),自律性への欲求 (4項目)の3因子が抽出された.動機づけでは,外発的動機 (6項目),内発的動機 (5項目)という2因子が抽出された.取り入れ的調整2項目と外的調整4項目の内容から外発的動機として捉え外発的動機因子とし解釈した.同一視的調整は因子負荷量が小さいことからすべて除外された.

指導行動,心理的欲求,動機づけの各因子の関係についての解析結果の詳細 は当日発表する.

TC-4

中等教育の合気道指導:巣鴨学園における「奪取技」を用いた乱取の取り組み 〇羽場逸夫(巣鴨学園),工藤龍太(早稲田大学)

【目的】

日本伝講道館柔道創始者・嘉納治五郎師範は、柔術を体系化し主に「投技」と「固技」で構成される襟袖に組みついた状態での柔道乱取法を考案した。

競技スポーツとしての柔道が盛んになる一方、嘉納は武術と体育の観点から 乱取で改善すべきことを述べている。特に、武術的観点から当身技に対する用 意を怠る態度を修行者に戒めたが、当身技に対処する柔道乱取法は、嘉納の存 命中に成し遂げられることはなかった。

この課題に取り組んだのが、合気道競技創始者・富木謙治師範(1900-1979) であった。富木は、離れたときの格闘形態に属する当身技と関節技の部門について乱取さらに試合ができるように合気乱取法を考案した。

しかし、富木の合気道の競技化の構想は生前には完成したとは言えず、課題を抱えたまま現在に至っている。発表者は、巣鴨学園(東京都)の合気道部(1988年創部)で中高生を対象に、これらの課題に取り組んでいる。

本研究で用いられている「奪取技」を導入した合気道乱取法(以下「巣鴨奪取乱取」)は、従来の合気道乱取競技が抱える課題を解決し、中等教育における 学校体育の立場から、発表者が改良を加えた稽古法である。

本研究では、「奪取技」について次の3点を検証することを目的とする。

- ①「奪取技」の攻防により、離れた状態の格闘形態が成立する。
- ②「奪取技」の攻防により、技が活性化され掛かり易くなる。
- ③「奪取技」の判定は、客観的に遂行することができる。

【方法】奪取技とは、競技者双方が紅白の帽子(以下「面」)をかぶり、それを 奪い取る技術を指す。巣鴨奪取乱取は、離れた間合を基本とする奪取技の攻防 と、主に当身技と関節技で構成される「徒手技」で行われる。

発表者がこれまで関わった競技会、交流試合、部内練習試合の実例から見たパフォーマンスを分析し、上記の3点を検証した。

【結果】本研究で設定した3点に対し、以下の結果を得た。

- ①奪取技に対する防御として、手刀や運足を用いて体を捌く必然性が生まれる ことから、奪取技の攻防により、離れた状態での格闘競技が成立した。
- ②奪取技は、相手の姿勢を崩しそのまま継続して施技に至るところに特色がある。奪取技の攻防により、徒手技に勝機が生まれ技が掛かりやすくなった。
- ③奪取技は、面を奪取して頭上に掲げる残心姿勢が確認できるため、審判にとって判定が容易となり、第三者にも理解しやすいものとなった。

【結論】奪取技の攻防は、襟袖を掴めば柔道乱取競技へ、また顔面や前腕部を 捉えれば合気道乱取競技へ移行することが可能となり得る。奪取技を介するこ とで、嘉納の唱えた体育と武術を兼ねた柔道乱取法、また富木の唱えた離隔態 勢を基本とした合気乱取法の具現が可能となるのではないだろうか。

なお、本研究は JSPS 科研費 (22K11643) の助成を受けたものである。

高次脳機能障害者への剣道指導を通して見える武道の可能性

~競争社会から共創社会へ~ その4

*三苫 保久」,渕上 博昭2、長谷川 豊彦3、櫻井 美子4、東山 明子5

(1. 滋賀県立大津清陵高等学校, 2. 心合武館, 3. びわこバリアフリー剣道クラブ, 4. 秋田工業高等専門学校, 5. 大阪商業大学)

【はじめに】

発表者らは、障害者、留学生、不登校生等への武道指導を通して共生・共創社会の実現を目指す「びわこバリアフリー剣道クラブ」(以下クラブとする)を主宰し7年を迎える。今回は、高次脳機能障害を持つH(65歳男性、剣道経験歴4年3ヵ月)への指導実践を通して、得た知見を報告する。

【日が剣道を始めようとした動機】

Hは、高校国語教師で、バレーボールを得意とするスポーツマンであった。X年、出勤中のバイク事故で救急搬送。外傷性くも膜下出血・急性硬膜下血腫・びまん性脳損傷と診断。高次脳機能障害(遂行機能の低下、記憶力の低下、失調性歩行のためのふらつき、抑鬱等)の後遺症により、明るく氣さくだったHは深刻な鬱状態に陥る。X+2 年から障害者支援施設に通所。X+3 年からクラブに参加。

【現在のHの感想】

剣道をしている時は、身体が悪いことを忘れ、無になれる。外国人留学生がたくさんいるので、元国語教師の僕でも日本の文化を伝えることができる。居場所がある、行くところがあるということは本当にありがたい。僕と同じ様に交通事故で高次脳機能障害となったTさんが最近クラブに参加したので、先輩として彼に指導していきたい。

【日への指導を通して得た指導上の知見】

- ① 失調性歩行によるふらつきがあるため、前後左右の足幅を若干広く保たせ安定させた。
- ② 「ボールの上を歩いている感覚」で転倒の不安感があるため、滑り止めのついたシューズを着用し、歩み足で移動し、基本原理の習得を目指した。
- ③ 記憶障害があるため、動画を撮影し共有することで振り返りを可能とした。
- ④ 社会的行動障害(欲求コントロールの低下等)があるため、相手と向き合い、氣を合わせ、体の運用を行い、生徒役と先生役を体験させることで、常に相手の立場に立つこと (社会性)を体感・体得させた。

【まとめ】

高次脳機能障害者には「社会参加」が有効であるといわれ、武道は一対一の対面が多い競技のため効果的である。一方で、剣道は道具類の準備等課題が多い。そこで、主宰者は道具類を準備し、手軽に参加できるようにした結果、障害者にとっての居場所ができ、無理せず、かつ社会性を広げていけるようになった。敷居が高いと思われている武道が、氣軽にできることが大切で、その感覚が氣持ちを前向きにさせ、有能感の向上に寄与し、行動変容を促したと推察できる。対応を工夫することでバリアフリーが推進され、これからの共創社会における武道の可能性を広げることに繋がると考える。

柔道三角絞における足の技術の効果:足首屈曲および進展

〇石井直人(秋田工業高等専門学校),三戸雄生(帝京平成大学),三戸範之(秋田大学)

【目的】

本研究の目的は、三角絞における足の技術の効果を明らかにすることである。 足の技術とは、三角絞を施したときの足首の使い方で、「足首を屈曲させたとき」 「足首を伸展させたとき」の2つの方法である。2つの足の技術の効果を比較 検討し、得られた知見は固め技の練習法・指導法に示唆を与えるものと考える。

【方法】

(1)被験者

被験者は、大学生の柔道経験者 18 名である。被験者に、横三角絞および表三角絞の技能を予備実験において試技させ、被験者全員が、足の技術、三角絞の 基礎的技能を習得していることを確認した。

(2)手続き

被験者が3人1組となり、取り1名、受け1名、足首を保持する役1名で3つの役を交代で試技を行う。取りは横三角絞および表三角絞で足首を屈曲させたとき、足首を伸展させたときの2つの足の技術で1回ずつ試技を行う。足首を保持する役1名は、足首が伸展している状態および屈曲している状態を、両手を使いその状態が保たれるようにする。足首を屈曲させたとき、おおよそ90度になるよう試技を行う。取りが右技を得意とする場合は、右技の試技を行い、左技を得意とする場合は、左技の試技を行う。試技の後、被験者は、質問紙に回答する。

(3)分析

横三角絞および表三角絞で足首を屈曲させたとき、足首を伸展させたときの技の決まりかたの強さを、取りおよび受けの質問紙回答の平均値の差を分析する。平均値の差の検定にはt検定を用いる。

【結果および考察】

横三角絞および表三角絞において、受け・取りともに「足首を屈曲させたとき」が「足首を伸展させたとき」に比べ決まり方の強いことが示唆された。 足首を屈曲させる技術は、柔道三角絞めの決めの局面において効果的であることが示唆された。

【結論】

本研究では、三角絞における足の技術を取り上げた。足の技術とは決めの局面における足首の使い方で、「足首を屈曲させる技術」と「足首を伸展させる技術」の2つの方法である。この2つの技術を比較・検討した結果、「足首を屈曲させる技術」は「足首を伸展させる技術」に比べ、技の決まりかたを強くすることに効果的であることを明らかにした。

柔道競技における大外刈のキネマティクス的技術分析 一受の崩れに着目して一

○清水祐希(早稲田大学スポーツ科学研究科)、伊藤悦輝(早稲田大学スポーツ科学研究科)、 射手矢岬(早稲田大学スポーツ科学学術院)

【目的】本研究は、柔道競技における大外刈の熟練者と未熟練者の崩し動作の違いを、3 次元動作分析法を用いて比較検討し、効果的な崩しとは何かを明らかにすることを目的と する。

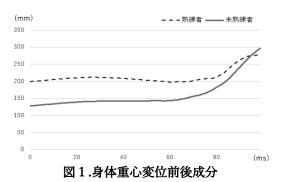
【方法】

対象:W大学体育会柔道部の男子部員の中から、競技年数10年以上の5名を選出した。その内、大外刈を得意とする者(以下、熟練者という)2名と、得意としていない者(以下、未熟練者という)2名の計4名が大外刈を掛ける役(以下、取という)、1名が大外刈を受ける役(以下、受)とした。

手順:光学式3次元カメラを用いて、大外刈で投げられる受の3次元座標値(37点)を得た。また、フォースプレートを用いて受の床反力も同時に計測した。サンプリング周波数はモーションキャプチャー240Hz、フォースプレート1000Hzであった。取には普段の練習通りに技に入るように、受には普段の練習通りに技を受けるように指示した。分析区間は、取の軸足が踏み込み動作を開始する地点から、掛足が相手に触れた地点までとした。

【結果および考察】熟練者と未熟練者に大外刈を掛けられた受の身体重心の変位をそれぞれ比較すると、前後成分(図1)において、未熟練者の試技ではなだらかに後方へ変位しているのに対し、熟練者の試技では26ms~61msの地点で、後方へ変位する前に14mm前方へ移動していることが明らかになった。以上のことから、熟練者が施す大外刈の崩し動作では相手の重心を一旦前方に揺することで、相手の姿勢反射を利用し、崩していると考えることができ、この動作が効果的な大外刈を施す要因と推測される。

【結論】大外刈の崩しにおいて、掛脚が相 手に触れる地点までに相手の重心を一旦前 方に揺する動作が効果的である。



剣道高段者における剣道の実践と人間形成の関係 (その3)

○笹木春光 (東海大学), 天野聡 (東海大学), 松本秀夫 (東海大学)

【目的】

前回・前々回大会では、剣道実践者が目標の一つとして掲げている「最高段位の取得」を実現した八段者が、どのような経験を経て、どのような価値観を持って剣道修行を行ってきたのか、インタビューを調査行い考察した。年齢50~60歳の八段者合計10名を対象にインタビュー調査を行ってきたが、今回の研究では全国大会レベルの競技経験が豊富で、優秀な競技実績を持つ公務員の研究協力者の発話を対象とし、分析することを目的とした。

【方法】

2021 年 10 月~2022 年 3 月にかけて、個別面接が可能な部屋にて 50~60 分程度の半構造化面接を行った。研究協力者は、剣道教士八段の男性 3 名(年齢 46~54 歳)とし、文章と口頭で研究の趣旨と方法を説明し同意を得た。音声データは対象者の承諾を得た上で IC レコーダーに記録し、質問においては、ありのままのエピソードや思い・考えを語ってもらうために配慮した。逐語化されたデータ分析については、SCAT(Step for Coding and Theorization)を用いて行い、抽出された理論記述からさらにカテゴリーの構築を行った。

【結果および考察】

〈剣道実践の重要性〉については、『目標達成に向けた工夫と鍛錬』を構成する概念として「勝利を第一とした正剣の実践」の回答が特徴的であった。このことから、これまでにあった「追求すべき一流指導者」「課題設定・達成による充実感の獲得」「勝負享楽を通じた実力向上の努力」「技の攻防による自己鍛錬」「新たな目標設定による充実感の獲得」「相手を活かす技術に繋がる精神の集中」「日常生活に活きる精神の集中」など、指導者としての立場、または稽古を主体とした実践経験から生まれる価値観に加えて、稽古・試合(立合)で勝利することを通じた自己の向上過程にも重要性を感じていることがうかがえた。また、「八段修得後に発展した価値観」「経験を重ねた事により変化した剣道観」といった、『自己形成との関連』に繋がる回答もこれまで同様抽出された。

〈獲得できる満足度〉については、『剣道の鍛錬による充足』として、これまでと共通する回答である「生涯を通して実感する修行成果の獲得」「健康を保持した稽古継続」に加えて、「成長し続ける可能性の獲得」「指導者と実技者の一体化」に関する回答があり、現在でも稽古・競技を通じた実践者として「満足度」を感じてることがうかがえる。

また、〈使命感〉については、『八段者としての自己意識』として、「失敗や未熟さの自己承認」「若年者・未熟者の意見尊重」などの謙虚さがうかがえる回答、〈自己成長〉については、「自己の客観化」「自信による行動の実践」などの回答が抽出され、今回も剣道高段者における剣道実践と人間形成の関係についての特徴が明らかとなった。

他詳細については当日報告する。

剣道具製作における SDGs の取り組みと地域社会におけるその必要性

株式会社七星 取締役管理部長 工場責任者 山村 星子

【目的】日本製剣道具製作に日々勤しむ中、職人の高齢化、材料業者の廃業等様々な問題に直面している。また、岩手県久慈市では過疎化も進んでいる¹⁾。七星は地域企業として利益追求の経済活動だけではなく国連が提唱する「持続可能な開発目標(SDGs)」の7つのゴールについて地域で重点的に取り組んできた。私たちは剣道具製作現場の現状と問題提起、社会へ与える影響に企業責任を持ち今後の剣道具業界の展望を考えようとした。

【方法】調査は2018年から2022年6月にかけて実施。調査実施に際し「持続可能な開発目標(SDGs)」の7つのゴール「3,5,8,9,11,12,13」について七星の生産体制や業務体制及び地域貢献活動の内容を再検証した。その際、剣道具の材料のその先を考えリマーケティングビジネスの可能性を探るべく「不要になったモノ」の流れを最適化する知見を得に専門企業を訪問。また、技術創出と実用化で社会課題の解決に取り組む専門機関を訪問した。

【結果および考察】

- ①3 すべての人に健康と福祉を… (1) 剣道具メーカーとして安全で機能性のある剣道具製作・開発。(2) 2019~ 2023 年度岩手県スポーツ推進計画に基づき、年齢や身体能力、障害の有無に関わらず誰もが生涯を通じてスポーツを楽しむ機会を創出し健康社会の実現と人的・経済的交流を推進するために、ユニバーサルな技術を開発する。
- ②5 ジェンダー平等を実現しよう…当社は岩手県に本社をおき工場全員女性。この体制の中仕事の意義を考え意識を共有しつつ女性が気持ちよく子育て・介護・看護等をしながら働けるよう努めている。(いわて働き方改革 AWARD2018 女性躍推進部門受賞。「性別による固定的な役割分担意識をなくそういわて宣言」に費同。「いわて女性活躍認定と業等」)
- ③8 働きがいも 経済成長も…(1)地場産業としての企業の永続性 (地域に働く場を提供。 雇用の維持。地元とのコラボ商品開発。久慈駅前に縫製品販売店)
- (2) やりがいのある仕事(良い職場作り。女性主体の新製品開発・新プロジェクト。)
- ④9 産業と技術革新の基盤をつくろう…伝統技術継承の基盤作りをしながら society5.0 への取組み (AIや ioTを理解し製造業の今後や社会に寄与できる技術開発・研究。)
- ⑤11 住み続けられるまちづくりを… (1)過疎化が進む地域にて雇用を守る。
 - (2)地域課題に積極的関与(2019年10月久慈会議所主催未来ディスカッションパネラー講師として登壇し地元高校生と意見交換。地元企業との縫製品コラボ。)。
 - (3)2020年地元高校生が久慈市に寄付するマスク縫製指導。当社も寄付。
- ⑥12 つくる責任 つかう責任…(1)材料業者様の廃業が深刻。有限な資源について常に考える必要がある。現在剣道具の低価格化により修理代のほうが高い市場である。剣道家の方には剣道具を大切にして欲しい。今後も修理やメンテナンスの積極的情報発信を続ける。(2019 年全日本剣道演武大会にて『Japanese Materials 'MOTTAINAI'』活動。剣道具製作の材料紹介) (2)近年岩手県ではシカの頭数が増加し、農林業被害の早急な軽減と自然植生被害の抑制を目的とした捕獲数も増加²)。このことにより近年岩手県では駆除鹿革を使ったプロダクトも増加している。剣道具生産で鹿革を吟味する際に出る鹿革を岩手県で2次製品としての製品化すべく地元企業と進めている。
- ①13 気候変動に 具体的な対策を…当社はパーツから完成まで全て国内で一括製作。また 海外製商品を輸入販売していない点より炭素排出量が少なく脱炭素に貢献している。

「持続可能な開発目標(SDGs)」の取り組みは地域に知の財産や循環経済や付加価値を創出し、サスティナブルな視点から新たな産業へマテリアルの循環も生み出す。業種を超えて新たな技術を学び新たなモノを生み出す挑戦は多くの人に剣道具製作を知って頂く機会にも繋がっている。このことは今後の製造技術や材料調達にも大いに可能性を感じる。業界規模が縮小している剣道具業界において剣道具を「大切につくる」ことは結果として日本伝統文化の存続に繋がると考える。

参考文献 1) 久慈市過疎地域持続的発展計画 2) 岩手県環境生活部自然保護課シカ管理 檢討委員会資料

欧州における柔道環境調査

〇戸田将太(兵庫教育大学),山崎俊輔(甲南大学),曽我部晋哉(甲南大学)

【目的】幼少期からの過度な勝利至上主義への偏重を受け、2022 年度より全日本柔道連盟主催の小学生を対象とした全国大会が廃止となった.この点に関して言えば、柔道のみならず幼児教育や早期教育に関する功罪についても指摘されており、必ずしもスポーツに限ったこととは言えない.子どもの習い事を始める理由については「子どもが希望するから」という回答が多いという報告もある反面、一方でスポーツや情操面の教育については、保護者の意向が強く反映されている、と指摘している(伊藤,2000).そこで、本研究では、柔道に対して教育的かつ好感を持っている欧州の子どもの柔道への印象と取り組みについて明らかにすることを目的とした.

【方法】欧州各国のクラブの協力を得て、子どもに柔道を習わせている保護者を対象に柔道に対する子どもの意識を調査した.対象国は、日本(n=90)、フランス(n=80)、オランダ(n=108)、イギリス(n=99)とした.柔道に対する子どもの意識調査は、保護者の客観的評価とした.調査項目は、子どもの柔道に対する好き・嫌いの感情の程度、子どもの柔道を辞めたいとの意思表示の有無とした.得られたデータは、それぞれの項目ごとに百分率で表示し、各国を比較した.

衣1. 条道の好さ・嫌いの感情の程度									
(%)	大好き	好き	普通	嫌い	大嫌い				
日本	23.3	31.1	36.7	8.9	0				
フランス	30.0	35.0	25.0	10.0	0				
オランダ	25.9	57.4	16.7	0.0	0				
イギリス	66.7	15.2	12.1	6.1	0				

表1. 柔道の好き・嫌いの感情の程度

【結論】本研究は、子どもに対する調査ではなく、保護者に対する設問による回答であるため、必ずしも日常の子どもの意思が反映されているとは言えない。しかし、子どもに柔道実践の環境を与える保護者の立場から、子どもにとっても柔道の評価が高いと判断している。今後、どのような点がこの結果につながるのか、具体的に調査していきたい。

TP-4

柔道選手における肩の位置覚についての基礎的研究

〇竹澤稔裕(順天堂大学),佐伯悠里香(順天堂大学大学院),岡安智弘(所沢中央高等学校)

【背景・目的】

柔道では、投げ技の技術を習得するための代表的な練習方法として、かかり練習、約束練習などがあげられる.投げ技としての正しいフォームを身に付けるためには、引き手と釣り手の使い方を再現する必要があり、肩関節の位置覚に起因すると言える.

そこで本研究では柔道競技者の肩関節の位置覚について着目し,基礎的知見 を得ることを目的とする.

【方法】

被験者はJ大学柔道部部員 14名(年齢:20.0±1.1歳,身長:172.3±5.5cm,体重:85.0±17.8kg)とした. 肩関節の位置覚の測定には,BIODEX system3を用いて,屈曲・伸展運動(60,90,120°),外転・内転運動(60,90,120°),外旋・内旋運動(5,35°)を実施した. 測定課題として,目標角度を示した後,視覚と聴覚の情報を遮った状態で,目標角度と同じ位置だと思う個所でアーム止めてもらった. それぞれの課題は,自動および他動運動で各3回実施し,それぞれの運動方向は別日に実施した. 加えて,位置覚の測定と同様の運動方向と目標角度において等尺性の筋力測定を実施した. データの分析には,3回の測定で得られた目標角度との差(絶対値)の合計を使用した. 統計学的解析においてはt検定,Wilcoxonの順位和検定およびFriedman検定を実施した.いずれも有意水準は5%未満とした.

【結果】

軽量級選手(73kg級以下)と重量級選手(81kg級以上)の2群間で比較検討した結果,60°および90°の自動外転において,軽量級選手の方が目標角度に対する誤差が大きいことが示された.加えて,35°の他動外旋においても軽量級の選手の方が目標角度に対して誤差が大きかった.

引き手と釣り手の2群間で比較検討した結果,60°および90°の他動外転・内転において引き手側の方が目標角度に対する誤差が大きいことが示された.なお,利き手と非利き手の影響も懸念して検討を試みたが,有意差は得られなかった.

目標角度である 60° , 90° , 120° の 3 群間で比較検討した結果, 他動内転において 60° および 90° において 120° と比較して目標角度に対する誤差が大きいことが示された. 加えて, 自動および他動, 運動方向を考慮せずに, 目標角度別で比較検討した結果, 屈曲伸展において 120° に対して 60° で誤差が大きかった.

【結論】

軽量級選手と重量級選手では、全体を通して重量級選手の肩関節の位置覚が優れている傾向にある。引き手と釣り手の比較では、釣り手側の位置覚が優れている可能性が示唆された。また角度別では 120° が最も誤差が少なく、位置覚が優れている結果となった。

柔道競技の小外刈りにおける効果的な切替技能の検討

○高野綺海(東京学芸大学), 奥村基生(東京学芸大学)

【目的】柔道は,直接の対戦と身体接触がある攻防一体型の対人競技であり,自分と相手の動作が直接影響し合うため,それに応じて攻防を展開しなければならない.そこで本研究の目的は,柔道で攻撃から防御へ切り替える実験を設定し,その技能の熟練差を分析し,状況の変化に素早く正確に対応するために有効な切替技能の特性を明らかにすることであった.

【方法】大学女子柔道部に所 属する14名を参加者とし、全 国大会ベスト8以上になった 経験がある選手を上級群, そ れ未満を中級群とした. 実験 では、実戦で使用する頻度の 高い小外刈りを課題とした (図. 上段). 反撃には燕返し を用いた (図. 下段). まず, 動かずに反撃してこない相手 を攻撃する単純課題を設定し た. 次に, 相手が反撃してくる かどうかわからない状況で, 反撃してこなければ小外刈り で攻撃し(単純 AB), 反撃して きたときには防御に切り替え る(切替 AB) 選択課題を2つ 設定した. 切替 A は相手が早

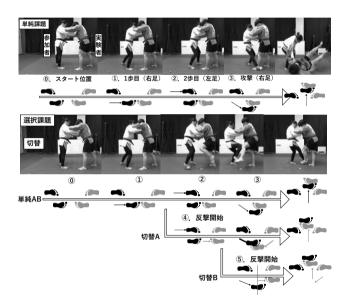


図1. 単純課題(上段)と選択課題(下段)

いタイミング(図④)で反撃し、切替 B は相手が遅いタイミング(図⑤)で反撃してくるため、切替 B の方が参加者の防御への切替が難しくなっていた.参加者の動作を試行間や参加者間で可能な限り同じようにするため、そしてまた、参加者の動作に応じて実験者が反撃を行うため、スタート位置(図①)と踏み込み位置(図①②)は固定し、踏み込みのリズムも指定した.分析では、参加者の刈足の動き出しから実験者の左足に接触するまでを運動時間とした.また、接触した位置の正確性を参加者の刈足から、実験者の左踵までの距離とした.さらに、選択課題において、参加者の刈足と実験者の反撃足が接触したかどうかを回答させ、切替の成功率を算出した.

【結果および考察】分析の結果、参加者の攻撃の運動時間と正確性、切替の成功率に群間に相違は認められなかった。この結果は、切替の成功と失敗を区別せず、各課題におけるパフォーマンスを分析し比較したものであった。現在は参加者と実験者の足の接触の有無によって試技を分類し、動作分析によって効果的な切替動作を検討している。

全日本サンボ選手権大会における競技分析的研究 -サンボ競技の技術体系の観点から-

○馬場元気(至学館大学大学院),岩田敬太(桜丘学園),松本秀彦(至学館大学)

【目的】サンボは、旧ソ連の国技とされており、柔道とレスリングを合わせたような競技である。現在、世界 5 大陸、90 カ国以上で発展し続けているサンボは、国内大会において柔道選手が挑戦している状況が見受けられる。しかし、独特の組手や投げ技、足関節技といった柔道にはない技術が必要であるため、国際大会において日本人男子選手は厳しい戦いを強いられている。そこで本研究は、全日本サンボ選手権大会の競技分析をすることにより、日本のサンボ競技における現状把握と日本人男子の競技力向上の一助とすることを目的とした。

【方法】2020年2月9日に行われた第46回全日本サンボ選手権大会(東京・墨田区総合体育館)の男子選手の全試合を対象にApple 社製 iPad2 台で試合場の端から2m離れた位置より撮影を行った。その後、PCに収録し男子9階級の68試合(全76試合のうち棄権、不戦勝といった分析不可能な8試合を除く)をオリジナルの用紙に記録し、サンボの技術体系をもとに分析を行った。なお、競技内容の記録および分析は、サンボ競技の日本代表選手として国際大会に出場した経験のある3名で行った。

【結果および考察】ポイント獲得技の種類は In-stand が 90 技,Lying-down が 24 技であり,両者にポイント獲得技数で大きな開きが見られた。このことは,松本らの研究(2009)と同様の結果であり,In-stand におけるポイント獲得の重要性が示唆された。

一本勝ちの種類は In-stand が 4 技, Lying-down が 14 技であり Lying-down の一本勝ちは、柔道競技で許されている肘の関節を極める技が 86%を占め、サンボ特有の脚の関節を極める技が 14%と少なかったことから、脚の関節を極める技の技術を向上させることが、サンボ競技における男子選手の競技力向上につながると考えられる。

ポイント獲得時間は試合開始から 1 分 30 秒までのポイント獲得技が 40 試合で 59 技(52%)見られた。その中で 38 試合(95%)が勝利に結びついている。このことから、試合前半でポイントを獲得する必要性が示唆された。

ブレイクの回数と時間は決勝戦以外におけるブレイクを除いた1試合の時間が、189.3±14.6秒であった。この結果から、決勝戦以外の実際の試合時間は約3分間であり、国際大会の5分間(ブレイク時に時間を止める)と比較して、試合時間に約2分間の差が見られた。今大会は、世界サンボ選手権大会の日本代表を決める試合であるため、決勝戦以外の試合方式は不十分であり、変更する必要があると考えられる。

In-stand のポイント獲得技における施技者の組み方は, 両手組のポイント獲得技が 86 技(96%)と片手組の技 4 技(6%)を大きく上回り, その内,袖口を持ったポイント獲得技が約 60%を占めていることから, 両手で組んだ時にどちらか一方の手が, 袖口を握って技を施すことの重要性が示唆された。

男子柔道選手の稽古中における生理学的応答

○薗田瑞穂, 高橋 進, 宮城 修(大東文化大学)

【目的】柔道は対人競技であり,競技中の酸素摂取量($\dot{V}O_2$)を測定することは困難である。先行研究ではあらかじめ実験室で測定した心拍数($\dot{H}R$)と $\dot{V}O_2$ による関係式を用いて,稽古中に触診法で測定した $\dot{H}R$ から $\dot{V}O_2$ を算出している報告がある(小澤ら,1994)。選手の稽古中におけるエネルギー消費量を明らかにすることは,稽古内容について検討していくうえで重要な基礎的資料となり,競技力向上や選手のコンディショニング管理にも役立つと考えられる。そこで本研究では,男子柔道選手を対象に漸増漸減負荷法の運動負荷試験から算出した, $\dot{H}R$ と $\dot{V}O_2$ の関係式に,稽古中に測定した $\dot{H}R$ を代入し,稽古中の $\dot{V}O_2$ とエネルギー消費量を推定することで,男子柔道選手の稽古中における運動強度を検討した。

【方法】対象者は男子柔道選手 6 名(競技歴 12.2±3.3 年)であった。測定項目は身体的特徴として身長,体重,及び身体組成を測定した。体力的特徴は,トレッドミルを用いた漸増負荷法によって最大心拍数 (HRmax)と最大酸素摂取量($\dot{V}0_2$ max)を測定した。HR と $\dot{V}0_2$ の関係式はトレッドミルを用いて,漸増する 5 段階の速度を 3 分間ずつ走行して,その後に下降する 5 段階の速度を 3 分間ずつ走る漸増漸減負荷法を行い,各速度における最後の 1 分間の HR と $\dot{V}0_2$ の データをもとに 1 次回帰方程直線式を算出した。HR は携帯型心拍計(Polar:H10)を用いて立技と寝技を含めた約 2 時間の稽古中に継続的に測定し,1 分ごとの HR を代入することで, $\dot{V}0_2$ とエネルギー消費量を推定した。なお,稽古終了直後と 3 分後には血中乳酸濃度の測定を行った。

【結果および考察】対象者の身体的特徴について、身長が 170.8±6.1cm、体重が 70.7±27.3 kg、体脂肪率が 16.7±6.1%、そして除脂肪体重が 66.8±7.0 kg であった。体力的特徴は、HRmax が 193.5±6.6bpm(187~206)そして \dot{V} 02max が 54.1±6.2ml/kg/min(45.4~64.1)であった。

対象者 1 (81kg 級) の稽古中の生理学的応答をみていくと,総エネルギー消費量が 1668.9kcal,酸素摂取水準(% \dot{V} 02max)が 76.6%であった。%HRmax については,おおよそ半分の時間が 84%から 95%を示しており,柔道の稽古中は継続して高い負荷がかかっていた。5 分間行われたサーキットスピード打ち込みでは約 1 時間行われた立技乱取りの平均%HRmax と 1 分間当たりのエネルギー消費量がほぼ等しかった。

以上のことから,柔道の稽古中には継続して身体に高い負荷がかかっており, 有酸素性の運動を維持しながらも高強度の無酸素性の運動を発揮していると考 えられた。

TP-8

柔道競技中における柔道場内の二酸化炭素濃度に関する研究

〇西奈緒(皇學館大学),大木雅人(皇學館大学),松田悠佑(皇學館大学), 佐藤武尊(皇學館大学)

【目的】柔道競技中における、感染症リスクを軽減させるためには、柔道場内の十分な換気を行うことが重要になると言われている。そこで本研究では、柔道競技中における柔道場内の換気条件毎の二酸化炭素濃度の変化を明らかにすることを目的とした。

【方法】東海学生柔道連盟加盟大学であるA大学の柔道場を対象とし、非分散型赤外線吸収法(NDIR 方式)を採用した、CO2 マネージャー「TOA-CO2MG-001」(以下、CO2 センサー)を使用し、二酸化炭素濃度の定点測定を行った。柔道場内の二酸化炭素濃度の平均的な状態を把握するため、柔道場内の2か所に CO2 センサーを設置した。CO2 センサーの設置場所として、対象者が呼吸する高さ(床上75 cmから150 cm)で測定を行った。また、人の呼吸の影響を避けるため、人がいる場所から50 cm以上離れた場所に設置した。柔道場内の、窓の閉開による換気条件を①全窓開放時、②上窓開放時、③下窓開放時を条件とし、二酸化炭素濃度の測定を行った。

なお,使用する CO2 センサーの数値については,ビデオカメラで CO2 センサーを撮影し,記録を行った。

【結果および考察】全窓開放時に二酸化炭素濃度の測定を行った結果,最大値が627.5ppmであり,最小値が416.0ppmであった。稽古開始から多少の変動は見られるものの,厚生労働省が健康影響を防止できる値としている,二酸化炭素濃度1,000ppmを終始,超えないことが確認された。また,上窓開放時の測定結果では,一部,厚生労働省が健康影響を防止できる値としている,二酸化炭素濃度1,000 ppm以上の数値が見られたものの,これは,あくまでも一時的なものであり,それ以降は超えないことが確認された。加えて,下窓開放時の測定結果では,競技開始約30分は,厚生労働省が健康影響を防止できる値として

いる,二酸化炭素濃度 1,000ppm 以下であったが,30 分以降から競技終了時まで数値が低下することなく,基準値以上であることが確認された。

これらのことから,柔道競技中に おける柔道場内の二酸化炭素濃度の 測定結果から,全窓開放時と上窓開 放時では,換気が十分にされている 状態であったが,下窓開放時では, 換気が十分にされていない状態であ ることが明らかとなった。

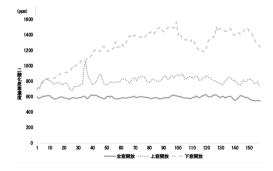


Fig.1 柔道競技中における条件毎の柔道場内の二酸化炭素濃度の変化

血流制限下における 4 方向ジャンプトレーニング効果の検討 -大学女子柔道選手を対象として-

〇大川康隆 (東海大学),塚田真希 (東海大学),河内雪乃 (東海大学),宮崎誠司 (東海大学),小澤雄二 (鹿屋体育大学),石橋剛士 (熊本学園大学),

【目的】

柔道では片足での技の攻防場面が見られる。優れたパフォーマンスを発揮する上で片脚支持姿勢による動作は重要な課題である。この片脚支持姿勢のトレーニングとして代表的なものには4方向ジャンプがあげられる。

柔道における研究例として、有賀ら (2005, 2007)では、片脚でバランスを取りながら体重を支持する局面が多くみられることから、実験として片足 4 方向ジャンプを実施し、反復横跳びの測定値との間には、有意な正の相関があることを報告している。

そこで本研究では、大学女子柔道選手を対象とし、血流制限下における 4 方 向ジャンプトレーニングの効果をジャンプの回数と体組成の変化から検討する ことを目的とする。また、俊敏性に影響を与えるトレーニングを、血流制限下 で実施した場合の影響を明らかにする。

【方法】

2本の十字に重なったラインを片足で素早く4方向にジャンプしラインを跨ぐ動作を行う。実験前後の4方向ジャンプ回数の測定では20秒間で飛ぶことのできる回数の測定を行う。この場合は、加圧群もベルトの装着は行わない。最初の回数測定後は、1セット20秒の4方向ジャンプを10秒のインターバルを挟みながら5セット繰り返すことをトレーニングとし、3週間継続して実施する。このトレーニングの際には、加圧群は加圧ベルトを大腿部に装着しトレーニングを実施する。体組成の測定に当たっては、実験の前後にinBodyを用いて、体重、骨格筋量、部位別筋量の測定を行った。

【結果および考察】

実験前後の体組成において、加圧群、比較群ともに、有意な差は見られなかった。

実験前後の4方向ジャンプ回数では、男子において加圧群、比較群ともに有意な差があったこと、実験前後の4方向ジャンプの増加回数において、加圧群が有意に増加した回数が多いことが報告されている。しかしながら本実験の対象となった女子において、いずれの項目においても有意な差は見られなかった。

【結論】

男子での骨格筋量、下肢の骨格筋量等、体組成に有意な変化はないが、4方向ジャンプの回数に有意な差が認められたという現象は女子を対象とした本研究では観察されず、血流制限下におけるトレーニング効果について男女ともに一般化することへの課題が残されることとなった。

TP-10

剣道の面マスク着用が練習中の心拍数へ与える影響

○高橋健太郎 (関東学院大学), 川口 港 (関東学院大学)

【目的】

令和2年1月以降、新型コロナウィルス感染症はスポーツ界に大きな影響を与えている。剣道に関しても例外ではなく、感染予防の観点から全日本剣道連盟は集団感染を防止するために、対人稽古の自粛を要請し、多くの大会が中止となった。現在、全日本剣道連盟では剣道用面マスクの着用義務と飛沫飛散防止のための面シールドとの併用を推奨するガイドラインを作成し、それに沿った稽古や大会等の実施を認めている。さらに、面マスク着用による熱中症発生リスク等の注意喚起がなされているが、面マスク着用による剣道動作や運動強度への影響がどの程度あるかなどの検証はあまり行われていない。先行研究において、Robergeら(2021)はサージカルマスク着用での歩行運動では、心拍数、呼吸数、経皮二酸化酸素分圧において有意に増加しており、マスク着用が生理的負荷になりうると報告している。しかし、Keelyら(2022)は、運動中にフェイスマスクを着用しても、筋や血液中の酸素動態へ有害な影響はないと報告しており、一致した見解は得られていない。

そこで、本研究の目的は剣道の練習中に面マスクを着用することで、心拍数など生理学的応答へどう影響するかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

被検者には、剣道着の下にウェアラブル心拍センサ(my Beat: UNION TOOL社)を装着させ試技中の心拍数、三次元加速度を 5Hz にて測定した。センサで測定されたデータは、Bluetoothを介して PC へ送信し記録した。試技内容は、一般的な剣道の対人稽古としておこなわれている、切り返し、打ち込み、互角稽古を連続的におこないトータルで約 15 分とした。試技は面マスク、面シールド両方着用、面シールドのみ着用の2種類とし、使用した面マスクは、スポーツマスクとして市販されているポリエステル製のものを使用した。なお、面マスク着用、未着用時の試技は別日を設定し、気温は両日ともに摂氏 23 度であった。

【結果および考察】

剣道練習中の心拍数は、面マスク着用時に比べ未着用時には低い傾向が見られた。試技終了時までの平均値をみると面マスク着用時で約 160bpm、未着用時は約 150bpm であった。特に打ち込み時、面マスク着用時の心拍数が高く平均でおよそ 180bpm まで上昇していた。また互角稽古時においても、それぞれ平均約 160bpm、140bpm と面マスク着用時の方が高い値を示していた。

剣道マスクを着用した剣道の素振りに関する研究では、初心者を対象とした場合、短時間の運動中の心拍数や RPE には剣道マスク着用の影響はない、と報告されている。しかし、実際に面をつけて、通常通りの練習内容をおこなうと剣道マスクを着用した時の方が、生理学的負荷が高いと考えられる。本研究では、試技時間が約 15 分程度と短い設定であったが、今後は練習時間や気温の違いなど、様々な条件下での検討が必要であると示唆された。

TA-1

近世の軍学者・花房義制をめぐる武術の人脈

足立賢二(宝塚医療大学)

【目的】近世の軍学者・花房厳雄源義制(以下「花房義制」とする)は、勤皇の志士・藤本鉄石(1816-1863: 天誅組の変で総裁として討死)の師として一般には知られている。一方で、天心獨明流師家とされる花房義制は、神傳實用流の継承者としてもその名が見えるほか、天保~嘉永期の竹内流を語る上で重要な人物でもあったことが、筆者の研究(足立 2022)により明らかとなった。しかし、これまでに彼の詳細な履歴や武術をめぐる人脈については体系的に整理されていない。そこで本発表では、花房義制研究を今後進めるための基礎史料を整備する目的で、現時点で判明する花房義制関係史料とその履歴、および花房義制をめぐる武術の人脈を整理・検討した。

【方法】第一に、花房義制関係史料について、A:花房義制在世時の史料、B:没後に門下が作成した史料、C:A・B以外で花房義制に言及した史料に三区分し、現在所在情報を確認できるものをリスト化した。第二に、かつて岡山県の郷土史家・渡辺頼母(1885-1970)が作成したと見られる花房義制の履歴に関する「年表メモ」(岡山県立図書館所蔵)について、A・Bの史料からその内容を検討し、花房義制の履歴に関する「年表」を整理・更新した。第三に、A・B・Cの史料をもとに、現時点で判明する花房義制をめぐる武術の人脈を明確化した。以上を踏まえ、花房義制研究の学術的重要性を明らかにし、併せて今後の課題を提示した。

【結果および考察】第一に、花房義制関係史料について、A:花房義制在世時の史料として現時点で少なくとも26点、B:没後に門下が作成した史料として1点、C:それ以外で花房に言及した史料として9点の所在情報を確認し、「花房義制関係史料リスト」を作成した。第二に、渡辺頼母による「年表メモ」ではA・Bの史料と比較すると内容に若干の齟齬を認めることから、補足・修正を加えてより詳しい花房義制の「年表(令和版)」を作成した。第三に、花房義制をめぐる武術の人脈として、①公家・公家侍の門下を確認できること、②僧侶の門下を確認できること、③勤皇派の人脈多数を認めること、を明確化した。以上から、花房義制の武術の人脈は公家・公家侍・僧侶に及んでおり、近世の公家・僧侶の武芸実践の実態を調査する上でも、花房義制研究が今後必要不可欠であることを指摘した。

【結論】現時点で所在情報を確認できる花房義制関係史料をリスト化し、その履歴を「年表(令和版)」として作成した。これらによると、花房義制の武術をめぐる人脈は、勤皇の志士のほか、公家・公家侍・僧侶に及ぶことが判明した。本発表の結果は、今後の花房義制研究および公家の武術実践に対する研究において、多面的に活用可能と考える。

(参考文献) 足立賢二 2022『「古武道」伝承の歴史人類学的研究』言叢社.

TIA-2

近代の武術・武道における小太刀に関する研究

〇中山竜一(明治大学大学院 国際日本学研究科)

【目的】明治維新以降の剣道史において、指導法の統一を目的に、「警視流木太刀形」〈明治 19年(1886)制定〉や「大日本武徳会剣術形」〈明治 39年(1906)制定〉といった形が制定されたが、そこには所謂「小太刀の形」が採用されなかった。幕末期の講武所にて、竹刀の寸法を「全長三尺八寸(約 115.1 cm)に限る」と定められたことを契機に、近代の撃剣では、互いに全長三尺八寸程の竹刀で打ち合う稽古が一般的に主流となっており、当然の帰結とも考えられる。しかし、大正元年(1912)に制定された「大日本帝国剣道形」においては「小太刀の形」も採用されることとなった。その採用理由については、未だ不明瞭である。そこで本研究では、近代の剣道家たちが、武術・武道における小太刀に関して、如何なる考えをもっていたのかを考察することとし、それによって「小太刀の形」の採用理由を推察するための、手掛かりを得ようとするものである。

【方法】明治 17 年(1884)から昭和 19 年(1944)までに発行された、計 42 点の著書(主に『近代剣道名著体系』に所収されるもの)における小太刀に関する記述に注目し、以下の三つの観点から考察を行なった。

- ①近代における竹刀の長短論と小太刀の関係
- ②戦争・戦闘の場における小太刀の技法
- ③日露戦争の影響と小太刀の意義

【結果および考察】①に関して:効果的な上達方法として、あるいは実戦の場 を想定した技法の習得と、そのとき必要となる気力・胆力を養成するために、 全長三尺八寸より短い竹刀を推奨するといった、竹刀の長短論がしばしば展開 されていたが、その際に小太刀の理法や伝承(逸話・教訓)を拠り所とするかた ちで説かれているものが見て取れた。②に関して:明治期、多くの帝国軍人た ちが影響を受けたとされる、隈元実道の『武道教範』にあたり、戦争・戦闘の 場における小太刀の技法を考察した。その結果、剣術と柔術の複合武術である ことが顕著に見て取れた。③に関して:日露戦争後の剣道書においては、当時 の軍事思想(白兵戦闘主義)に基づく言葉が散見された。その考え方が浸透する 中で、銃剣を装着した小銃をかざして突撃する「銃剣突撃」と、剣道の「撃ち 込み稽古」とを同一視している記述や、「突撃精神」を「入身」と結び付けて説 く記述が見て取れた。一説に、当時の銃剣(三〇年式銃剣)は、武士の魂である 刀剣を意識して、単独の武器としても使えるように作製されていた(高橋昌明 『武士の日本史』)というから、その使用法の訓練と、勇猛果敢な精神力を涵養 するために、明治後期頃の剣道界では、改めて小太刀の修練の必要性が想起さ れたのではないかと考察した。

【結論】以上、三つの観点から考察した結果、直接的な手掛かりは得られなかったが、大日本帝国剣道形に「小太刀の形」も採用されることとなった理由に迫る、いくつかの間接的な手掛かりを得られた。

IIA-3

剣術伝書にみられる比喩表現に関する一考察 一直心影流を中心に一

〇軽米克尊(天理大学体育学部)

【はじめに】剣道は武士たちの戦技であった剣術を起源とする、日本発祥の伝統的な運動文化であるが、現代社会に生きる我われにとっては、その動作や技術は非日常的である。こうした非日常的な動きを理解させ、上達させるために、剣道では様々な言語表現が用いられる。本稿では多様な言語表現の中でも「比喩表現」に焦点を当て、直心影流の伝書から考察する。

【先行研究と問題の所在】先行研究としてはまず生田久美子の「わざ言語」に 関する研究が挙げられる。生田の研究から、比喩表現に代表されるわざ言語が 指導現場において使われる理由として、①学習者の内的な対話活動を活性化し、 ある種の動作を生じさせたり、動作を改善するように機能する、②指導者と学 習者の身体感覚の共有を促すなどの利点を有していることが挙げられる。また 倉島哲は市販のスポーツ技法解説書におけるわざ言語の検討を行っており、そ の結果から、その表現が有効かどうかはどのような日常的動作と結びついてい るかによって決まると述べている。つまり、学習者の日常的動作によりわざ言 語の有効性が異なるということであり、指導者が同じ技術を説明する表現を複 数有していることが重要であると考えられる。以上の先行研究を踏まえ、筆者 は昨年度「近世剣術伝書にみられる言語表現に関する一考察―比喩・擬音・擬 態表現を中心に一」と題した研究発表を行った。この発表は近世剣術の二大伝 書である『兵法家伝書』『五輪書』にみられる比喩表現、擬音・擬熊表現を抽出 し、考察したものであり、特に比喩表現に関して、『兵法家伝書』においては心・ 機(気)、『五輪書』においては戦術(特に「先」に関すること)を説明する際 に用いられることが多い点を指摘した。これら比喩表現によって説明されてい る事柄は両書の特色とも言うべき点であることから、特に伝えたい事柄に比喩 表現が多用されると考えられ、剣術伝書における比喩表現を考察することでそ の流派、あるいはその伝書に記される技術の要点や、その微妙なニュアンスを 理解することに繋がると考えられる。本研究で考察対象とする直心影流は近世 中期に興り、しない打ち込み稽古を導入し隆盛した歴史を持つ。このことから 現代剣道につながる部分が少なからずあり、このような流派における技術の要 点を理解することは現代剣道の指導に資するところがあると考えられる。以上 から、本研究においては直心影流の伝書にみられる比喩表現について考察し、 その技術の要点を明らかにすることを目的とする。

【研究方法】直心影流の関係伝書(前身の直心正統流も含む)から比喩表現を抽出し、文脈に留意しつつ、その表現が①何(のわざ)の②どのような性質について表現しているのかを考察する。

【考察】現段階では、相手に自分の気を当てる「気当たり」の記述に比喩表現が多く用いられていることが明らかとなった。また、現代剣道においても手の内の遣い方を表現するときに用いられる「茶巾絞り」という表現が確認された。なお、本研究は科学研究費 22K11692 の助成を受けている。

TIA-4

土佐藩 片岡健吉の稽古記録について

森本邦生 (貫汪館)

I はじめに

片岡健吉(1844~1903)は土佐藩士であり明治維新以降は自由民権運動の活動家、またキリスト教徒として活動した。片岡は安政5年(1858)から4年間にわたり稽古記録を残している。

論者は安政5年および安政6年の稽古記録を分析し片岡健吉の馬術、剣術、居合・體術の稽古について日本武道学会中四国支部会で発表した。本研究は片岡健吉の安政7年(1860)および万延2年(1861)の稽古記録の分析を加えて当時の土佐藩における武術稽古の一端について明らかにしようとするものである。

Ⅱ 片岡健吉について

片岡健吉は天保 14 年 12 月 26 日、土佐藩士片岡俊平 (馬廻格・250 石)の嫡男として高知城下中島町に生まれ、文久元年 (1861)には御扈従を仰せつかり、戊辰戦争では迅衝隊大軍監・右半大隊司令を務めた。維新後は新政府に出仕し、明治 4 年からロンドンに 2 年間留学。帰国後に海軍中佐となったが、征韓論派の失脚に伴い職を辞して高知に帰った。明治 7 年、板垣退助らと共に立志社を創設し初代社長となる。明治 23 年に第 1 回衆議院議員総選挙で当選。以後第 8回まで連続で当選した。また敬虔なプロテスタントで、日本基督教団高知教会の長老であり、同志社第 5 代社長 (現総長)に就任している。

片岡健吉の武術修行を『片岡健吉日記』にみると次のように記されている嘉永6年(1853) 正月「沢田勘平門ニ入リ馬術ヲ学フ」、安政4年(1857)6月「寺田忠次門ニ入リ剣術ヲ学フ」、安政5年(1858)7月23日「下村茂市門ニ入リ長谷川流居合 高木流体術ヲ学フ」、万延元年(1860)10月21日「本山団蔵門ニ入リ竹内流組打ヲ学」、同11月4日「郷円之丞門ニ入リ槍術ヲ学」、同12月ヨリ「谷村亀之丞ニ馬術ヲ学」、文久元年(1861)8月25日「本山団蔵ノ門ニ入リ古傳馬術ヲ学」、同9月11日「中山衛門七郎門ニ入リ北条流兵学ヲ学」

Ⅲ 片岡健吉の稽古記録について

片岡健吉は安政 5 年に『安政五年牛 (ママ) 年文武修行日記』『稽古玉帳万控蝶』を、安政 6 年に『安政六未年武藝扣 正月吉日』『玉帳』を、安政 7 年に『安政七申年正月吉日文武玉帳』『文武修行日記』を、万延 2 年に『文武修行日記』を記している。『稽古玉帳万控蝶』『玉帳』『安政七申年正月吉日文武玉帳』および万延 2 年の『文武修行日記』の冒頭にはその年にそれぞれの流派を何回稽古したかの回数をまとめており、『安政五年牛 (ママ) 年文武修行日記』『安政六未年武藝扣 正月吉日』『文武修行日記』 2 冊には各月日ごとに何を稽古したかという記述がある。詳細については大会当日に発表する。

Ⅳ まとめ

片岡健吉は馬術、剣術、居合、体術、槍術など広く武術を学んでおり、稽古 回数も多い。

土佐藩では奨励法で文武の稽古回数によって褒賞を与えているが、この制度 が片岡健吉の詳細な稽古記録と稽古意欲の一因となったと考えられる。

TIA-5

彦根藩における念流正法兵法未来記について

○数馬広二(工学院大学)

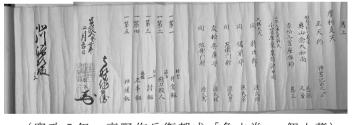
はじめに L野国多胡郡馬庭村の樋口定次が友松偽庵から天正 10年(1591)に 継承した念流正法兵法未来記は、馬庭念流として知られている。定次の師・友 松偽庵は元和2年(1616)年頃、近江国彦根藩に出仕し、樋口定次弟の頼次(勘 三)を佐和山に逗留させ指導をし、また旧知の小幡勘兵衛に形を披露した(松 本家文書)。江戸中期以降の彦根藩には念流兵法正法未来記のほか念流を流儀 名に冠するものが他に3流儀あり、それらは天明元年の藩内での見分に参加し ている²。本発表では、友松偽庵が彦根藩の武士に伝えた念流正法兵法未来記の 伝授内容につき伝書を明らかにし、上野国馬庭村樋口家伝の内容と比較したい。

1. 彦根藩における念流正法兵法未来記

元和2年(1616)年頃、佐和山に住居した友松偽庵は、小幡勘兵衛を自らの 家に迎え「我等弟子脇又市、磯島与五七、愚息佐右衛門見申候間、則勘兵衛方 〜拙者色々の事を仕、見せ申し」た(松本家文書)。脇又一郎(?-1626 家老 役,2,000 石)と磯島与五七(?-1657,御母衣役,800 石)、偽庵息子・佐右衛門 は彦根藩における偽庵の高弟と考えられる。

2. 友松偽庵の息子佐右衛門への継承と彦根藩での道統

偽庵は息子・佐右衛門に継承した彦根藩での念流兵法正法未来記が、寛政 5 年高野作兵衛朝成発行、北川源 次宛ての「象之巻」に、写真の ように記されている。「扇之巻」 (永居新五左衛門尉知明) など 樋口家に伝わらなかった彦根 藩伝の念流兵法正法未来記に



(寛政5年 高野作兵衛朝成「象之巻」:個人蔵)

3. 彦根藩での継承について

ついても考察したい。

彦根藩の念流兵法正法未来記は藩内にとどまり、その継承者は多人数であっ た。幕末まで上野国馬庭村の一家で継承した樋口家は、念流継承の独自の要素 をもっていたのかもしれない。

¹ 村山勤治:幕末期における近江諸藩の剣術について一彦根・大溝各藩におけ る剣術流派について一: 武道学研究,20-2:1987

² 青木俊郎:資料紹介「天明元年御代見出前写」について,彦根城博物館研究 紀要,27:2017

IIA-6

琉球の武術に影響を与えた薩摩藩の武術 (津堅之根)

○早坂義文(古武道研究会)

【序文】

沖縄の武術は、琉球王朝時代に薩摩藩が統治したことから琉球の侍に大きな影響を与えた。その中でも示現流と天流が沖縄古武術の棒術、櫂術、鍬術等に最も影響を受けた。

私が学生時代に学んだ津堅の棍は、沖縄の棒術としては一番古く、今まで研究してきた沖縄の武術とその歴史を後世に伝えたい。

【津堅之棍】

1 開祖 津堅親方盛則

生没不明(推定 1558 年~ 1629 年)首里士族、位階は親方、津堅棒の開祖、騎馬法の始祖、名を盛則、唐名を全興盛といい騎馬に秀でて、その名は薩摩まで聞こえた。

「慶長時代に鑓棒法あり(自了傳)。また津堅棒として津堅親方盛則の伝えし棒法あり、 示現流剣術に酷似せり。琉球の棒術は六尺と三尺(尺小)とあり、一つは鑓法にして他 は剣術なりといふ」津堅棒は、勝連村にある津堅島の漁師から幕末の武士安慶名直方に 伝わり、これを又吉真光が学んだ。現在行われている津堅之棍である。

(球陽附巻一)(沖縄一千年史)

2 津堅之棍の技法

演武内容は、独り型。演武線は、八方を仮想敵としている。その技法は、担ぎ技からの打ち込み、更に貫き棒、獲物落としから突き技。打ち込みから突き技が一体とした技。後ろ突き。払い受けからの尻手。五連打と称する長刀の変化技からなる。

【琉球の武術に影響を与えた薩摩藩の武術】

1 示現流剣術

薩摩藩を代表とする剣術流儀示現流は、東郷重位(1561年~1643年)を元祖として東郷家が代々相伝家である。津堅親方盛則が滞在していた1609年から数年、又、1617年から1625年の間に学び琉球に帰還して、津堅棒が完成されたものである。沖縄に伝わる尺小、杖術などには、トンボの構えから一撃をする形が網羅されており、まさに剣が尺小(三尺棒)杖術などに変化されたものであることが推測される。

2 天流

薩摩天流は、常州住斉藤主馬伝鬼(1550年~1587年)の弟子となつた伊地知又左衛門宗明を初代として代々伊地知家が相伝家である。天流は、太刀、薙刀等総合武術である。 琉球の棒術、櫂術、長鎌などに大きな影響を与え、優れた薙刀の技法が網羅され沖縄の武術の独り形として現在に継承されている。

【結論】

私はかつて、琉球士族阿嘉直識の遺言「示現流の書、天流鑓長刀の書…家宝にいたし、 子孫へ可相譲候」を見て、享保年間にこれらの武芸が既に琉球で行われており、さらに勝 連盛豊先生の著書「沖縄の棒踊り」を一読し、津堅親方盛則が開流した棒術が津堅之棍と して故又吉眞豊先生の指導の下、現在まで継承されている。

柔道における「競争」概念の批判的検討

〇佐藤雄哉 (国士舘大学)

【目的】

スポーツ活動の中核には、「競争」概念が存在する。嘉納履正(1954)は、柔道にスポーツ的な性質が含まれていることを認めており、よって柔道は「競争」概念を含んだ身体活動として捉えることができよう。しかし柔道界では、競争の過熱が引き起こす弊害を危惧し、それを抑制する取り組みも為されている。若年層における競技会の廃止や、指導者講習会などがその一例として挙げられよう。他の競技スポーツにおいても、競争の過熱を抑制する試みは散見されるが、柔道のそれは文化的価値の継承を憂う主張とも重なって展開されている。そしてそのことは、柔道が(競技)スポーツの一種でありながらも、極めてユニークな「伝統文化」としての特性を内包する身体活動であることを示唆しているのである。近年では、この問題に対する柔道界の取り組みや議論が度々見られるものの、柔道に内在する「競争性」を焦点化した議論はほとんど見られない。このような背景を踏まえて、本研究は、多様な意味を内包する柔道の「競争」概念について、批判的に検討することを目的とする。

【方法】

本研究は、以下の手順によって考察される。

- ① スポーツの「競争」概念を「卓越性」の視点から考察する
- ② ①の議論から、柔道の「競争」概念について考察する
- ③ ①②の議論を基に、柔道の「勝-敗」概念について考察する

【結果および考察】

P. ワイス (1991) は、競技活動は深い所で、そして独特の仕方で若者を満たすものであり、その現象が、「卓越性」という一つの概念を軸に展開されているとする。「卓越性」とは一般に「秀でること」と理解されるが、その本来的意味は単なる「勝利」として一面的に捉えられるものではない。換言すれば、競技に対する衝動は、勝利のみならず「卓越性」の追求によって生起するものと考えられる。柔道もまた同様に、その鍛錬の目的は卓越性の追求にあると言えよう。しかし「競争」概念の拡大は、その対抗措置として競争の場の縮小にも繋がっており、そのことは「卓越」する場が失われる危険性も孕んでいる。

競争において「勝-敗」は表裏の関係であり、そこで明示される優劣の基準は人を勝利に駆り立てる。しかし、そのような普遍の原理を前にして、柔道は勝敗に伴う喜びや悲しみを抑制し、その優劣を感じさせることなく競争を終えることを善とする。それは他者との共栄を目指す、柔道の文化的価値観の一端を示すものでもある。つまり柔道の「競争」概念は、勝利と敗北の「異同」を表出しつつ、共に「己の完成」に向かう手段として認識されるものなのである。よって勝利が過度に強調される時代にあっては、柔道における「競争」概念を、改めて再評価する必要があろう。

TA-8

現代における柔道の価値に関する一考察 - 柔道の印象に関する意識調査より -

○中山佳子(早稲田大学スポーツ科学研究科) 射手矢岬(早稲田大学スポーツ科学学術院)

【目的】嘉納治五郎による柔道の創始から約120年を経た現在、柔道は国際化が進み、さらに時代の変遷とともに嘉納の提唱した柔道の価値から実際の価値は変容していることが予想される。全日本柔道連盟のブランディング戦略推進特別委員会(2022)も、社会における柔道のイメージを把握するために、柔道に対するイメージや興味関心の実態調査を行い、公表している。しかし、柔道実践者ではない現代社会の一般人と柔道実践者とのイメージに関するギャップまでは調査されていない。そこで、本研究では、柔道実践者である大学柔道部員と一般人を対象に、柔道および柔道家に対するイメージについてアンケート調査を行い、日本における現在の柔道の価値と柔道経験の有無による柔道イメージの差異について明らかにすることを目的とした。

【方法】

- 1)対象 柔道実践者として大学柔道部員 172 名(以下、柔道群とする) および 学校の授業以外で柔道を1年以上習ったことのない一般人 205 名(以下、一般 群とする)
- 2) アンケート調査期間 2021年10月より2022年6月
- 3)データ収集方法 Google フォームを使用したインターネット調査および質問紙にて収集
- 4) 質問方法 強制選択尺度である四件法「とてもあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「とてもあてはまらない」を使用
- 5) 質問内容 柔道のイメージについて、嘉納の目指した柔道の価値を中心に、「人格形成」「知性」「体力や健康の保持・増進」「相互向上」「護身」「礼儀」「上下関係」「危険度」について質問した。また、柔道家のイメージについては、柔道の創立に大きな影響を与えた儒教の「五常の徳」である「仁義礼智信」の要素に加え、「忍耐力」、「コミュニケーション力」、「積極性」、「協調性」、「明朗さ」、「近寄りがたさ」などの質問項目を設定した。

【結果および考察】柔道群と一般群のいずれも「あてはまる」(「とてもあてはまる」と「あてはまる」の合計)という回答が9割以上であった項目は、「体力や健康の保持・増進」、「護身術」という身体に関わる項目と「礼儀」、「上下関係」という敬意表現に関わる項目であった。一方、柔道群と一般群で大きな差がみられた項目の中で、柔道群>一般群と示されたのは、「知的」「温和」「コミュニケーション力」「協調性」「明朗さ」「危険」であり、柔道群<一般群と示されたのは、「勇気」「近寄りがたさ」であった。

【結論】柔道は、礼儀など相手を敬う態度や姿勢である敬意表現の習得および 護身や体力・健康維持増進が期待されていることがわかった。一方、明朗さや 協調性などの周囲への積極的アプローチ、コミュニケーション力に関わるイメ ージは、柔道実践者より一般人は低いことが明らかになった。

武道における芸術性の活用と実践「武楽」2

- 武楽『神曲 修羅六道』実践報告:いかに「武の美」を舞台芸術作品として表現したか

源 光十郎 (武楽座 代表/武楽 創始家元)

■背景・目的

「武楽(ぶがく)」は、「武の美」をテーマに、武士が研鑽した武道と、武士が嗜みとした能などの武士文化を組合せた総合藝術である。演武・公演・講演・展示や稽古を通して、武道・サムライ・日本伝統文化・現代アート等多彩な視点で、日本の美と「和を貴ぶ心」を国内外に積極的に発信してきた。

2018 年第 51 回大会にて、「武道における芸術性の活用と実践 - 『武の美』と『武楽』- 」と題して、口頭発表を行った「武楽」の活動も、この 5 年間で「武楽座 NIGHT」といった演武と講演・解説を毎月累計 45 回行うことによって深く、より多くの人に〈武道の「芸術性」〉を認識してもらい、武楽が〈それを活用し「芸術」として表現する試みと実践〉であることを伝えてきた。

特に、私が「武の美の金字塔・武楽の集大成作品」として 2021 年に初演発表し、2022 年にはさらに 2回の再演を行う新作舞台作品、ダンテ 700 年記念作品・武楽『神曲 修羅六道』において、いかに「武の美」を舞台芸術作品として表現したかの実践報告を行いたい。

■ 方法

「武の美」とは、武術を含む武士文化に現在する「武」の機能美や、武士の美意識・死生観・生き様や精神性・思想哲学等を一つの文化価値視点基準としてまとめたものである。

舞台作品・武楽『神曲 修羅六道』は、ダンテ「神曲」と能の謡曲の共通点に着目し、キリスト教的な死後の世界を武士の死生観に置き換え、イタリア・ルネサンスと武楽の活動が「サムライ・ルネサンス」であることを重ねわせて、ダンテが武士の生き様・死生観や行動原理など「武の美」を知り得て成長する物語。

1) 演武による「武の美」の表現

源 光士郎がシテ5役を、全て異なる能装束と刀・薙刀・槍などの武具での勇壮な演武で勤めあげる。

2)「武の美」を会得してくことで成長する主人公

西洋人であるダンテが神功皇后より「七支刀」を授かり、修羅道の旅において、<中心の意識/清眼の構え/剣に入り中心を守る/上段の構え/真向。陰の構え。袈裟斬り/斜の構え/かまいたち/打つ/返る/斬り上げ/源氏車(げんじぐるま/武楽技)/残心/剣心一如>など、義経より武術の技の稽古を受けるシーンがある。またその鍛錬が、ダンテが最終幕において七支刀で斬り組を行い<己の真と向き合い乗り越える「克己」>につながっていく。

3) 各シテ(主役) キャラが、それぞれダンテに「武」の要素や精神性を伝える

第一圏 神修羅/素戔嗚尊/テーマ:志・守・中心/武具:太刀

第二圏 祝修羅/神功皇后/テーマ:仁愛/武具:弓

第三圏 勝修羅/源 義経/テーマ:義・剣術/武具:刀

第四圏 負修羅/平 経正/テーマ:礼・風雅/扇舞

第五圏 狂修羅/平 知盛/テーマ:智慧の表裏・予言/武具:薙刀

第六圏 鬼修羅/修羅王/テーマ:信・克己/武具:大槍

4) 公演やパンフレットによる、「説明・解説」と「演武」を両方行う

■ 結果及び考察

「日本伝統文化を初めてカッコいいと思った」「日本人としての DNA に驚くほど響いた」等、非常に反響を得ており、「武道を藝術表現に昇華する」という目的はより大きな前進をもって認識を広められている。2022 年 11 月再演が決定しており、海外公演にも展開していく予定である。

朝鮮民主主義人民共和国における空手道の展開過程に関する考察

○ 宋修日(朝鮮大学校)

【目的】

朝鮮半島には古くからスバクやテッキョンという武術・武芸が盛んでありそれらは国の国防力強化と人民の肉体的能力向上に役立ててきたと言われている。朝鮮半島北部(北朝鮮)において武術は時代の変化と共に発展し特に 1955 年にはテコンドー連盟が結成されてからはテコンドーが朝鮮の武道として人民たちに広く普及された。朝鮮民主主義人民共和国(以下・DPRK)においては建国後、柔道やボクシングが広く知れ渡りオリンピックにおいても好成績を残してきたが、空手道が普及されたのは 2000 年に入ってからである。しかしその普及も極めて限定的な普及であった。本研究では朝鮮民主主義人民共和国(以下・DPR. KOREA)における空手道の受容と展開過程を調査・考察する。また本国における空手道の組織構造にも着目し、本国の空手と空手母国の日本に住む在日朝鮮人空手道の歴史の関係性についてもアプローチを試みた。

【方法】

DPR・KOREA における空手道の受容と展開過程の歴史を本国における資料・文献と自身が実際に本国連盟の副書記長として携わってきた経験から考察する。また空手の発祥地の地と言われる日本で空手を学んできた在日朝鮮人空手家たちが本国における空手道の受容と発展にどのような影響を及ぼしたのかをインタビューを通して分析した。また日本と DPR・KOREA の空手交流の歴史についても関係者からのインタビューを試みた。最後に 2000 年朝鮮空手道連盟結成以降、国際競技連盟加盟やアジア競技大会をはじめとする国際大会への参加を通して築き上げてきた本国と在日同胞選手の共同努力・作業が今後、どのような可能性が持っているかについて探ってみた。

【結果および考察】

本研究の考察結果は以下のとおりである。DPR・KOREA における武道の発展過程においては本国が『民族競技』と称するテコンドーの発展がその中心にある。しかし空手道においては古くから長い繋がりがある朝鮮半島と日本の関係からDPR. KOREA においても空手道発展の土壌があったと考えられる。結果的に朝鮮空手道連盟結成から 20 年の歴史においては本国の空手道連盟関係者・選手と、日本で空手を学んだ在日同胞空手関係者の共同努力・作業によって活動が展開されてきた。2000 年本国における朝鮮空手道連盟の結成、2001 年在日本朝鮮人空手道協会の結成、2001 年アジア空手道連盟(AKF)加盟を起点とする DPR・KOREAにおける空手道の展開過程は極めて限定的でもあり特殊であったと考えられる。また DPR・KOREA においては『民族競技・民族武道』と称するテコンドーの普及発展が空手道の展開過程に多大なる影響を及ぼした。また今後は DPR・KOREAと日本の空手・武道交流、技術の発展と相互理解においても空手道が果たす役割が大きいものと考えられる。

中国武術研究の基盤構築: 史資料の整理およびその日本武道との関連

劉暢(早稲田大学)

【目的】中国武術の近代化過程で日本武道よりどのような影響を受け、その後の国際的普及につながったのか。この問題を明らかにするため史料批判に基づいた歴史的研究が重要となる。しかし日本における関係研究の蓄積は浅く、加えて一次史料の不足もあげられる。よって本研究では準備作業の一環として、中国に現存する中国武術の史料の整理、および新たな史料の収集を通して中国武術研究の史料一覧を作成し、そのうち日本武道に関連する史料その性格や概観を特定することを目的とした。なお、本研究では中華人民共和国が成立する1949年以前の史料に限定した。

【方法】本研究では主に以下の史料を収集・分析した。

- 申報(1872年創刊~1949年廃刊)における関連記事。
- 辛亥革命(1912)以降、中国国内で出版された中国武術と日本武道の書籍。
- 『民国国術期刊文献集成』(全31巻、1912年から1949年までの主要な武術雑誌)、『中国武術大典』(全101巻、漢代から1949年までの古籍)、『中国古代武芸珍本叢編』(全18巻、清朝までの古籍)に収録された史料。

【結果および考察】申報において日本武道に関する記事は計 250 件検出された。このうち柔術・柔道、剣術・剣道に関する内容が多く全体の 3 分の 2 を占めた。1912 年以降、中国国内で出版された中国武術と日本武道の書籍について、中華民国期(1912-1949)では計 189 冊を収集した。このうち『日本柔術』(中華書局出版、1917 年、底本は講道館の教材)、『率角法』(中央国術館出版、1932年、底本は『柔道教範』) などの柔術・柔道の訳書がみられたほか、『短兵術』(教育部国民体育委員会主編、1945年)などで剣道を言及した書籍もみられた。さらに、『民国国術期刊文献集成』に収録された雑誌では、中国人武術家の訪日の見聞、柔道の体験談などの記録が数十件見つけることができた。

このほか、弓術・弓道、銃剣道、相撲、空手などを言及した史料もみられた。

【結論】中国武術の史料一覧を作成する過程で、中国武術と日本武道(特に柔術・柔道、剣術・剣道)の結びつける史料が存在することが明らかになった。 今後、こうした史料に基づき、中国武術と日本武道の関連性をより深く掘り下げる必要があるだろう。

中国の武当山武術に見られる武術の観光化政策について

〇張卿(日本体育大学), 朴周鳳(駿河台大学)

【目的】本研究は、中華人民共和国の建国以来、体育やスポーツとして展開されてきた中国武術が、中央政府の文化産業政策における観光政策によって、改めて中国文化としての重要な役割を担うようになったのかということを明らかにする。

【方法】本研究では、中国武術の中で、最も中国文化を表している武術と言われる武当山武術(道教武術)を研究対象とした。

調査方法は、文献資料やインタビュー資料を用いた。具体的には、中央政府の観光政策に応じるために、地方政府(湖北省政府、十堰市政府および武当山特区政府)がとった武当山武術観光化政策に関する一次資料(通知、明文条約、発展計画、会議記録など)を蒐集した。次にその地方政府によって実施された実状の資料(業績評価会議記録、報告書、データ統計書など)を集めた。また、武当山に関する地方政府機関・協会の関係者へのインタビューを行った。

【結果および考察】中央政府は1949年の建国以来、武術を体育・スポーツと同様のものとして扱ってきた。その中で、文化大革命期には封建文化とみなされて排斥されてきたが、文化大革命の終結(1976年)によって、全国で武術を改めて発掘する政策が取られ、各地で武術が整備された。

一方で、中国の経済体制においても、時期を同じくして文化大革命後、共産党中心の経済体制から自由競争経済への転換が行われた。2000年に入ると、中央政府が地方伝統文化資源を利用し、「文化参与」という新しい観光振興策を打ち出した。これに追従して、湖北省の地方政府は元々あった武当山地区の道教旅行資源を整理し、武当山武術に焦点を合わせた。そして少林寺武術の観光化をモデルにし、武当山の観光産業を創り出した。要するに旅行資源としての武当山武術は、上演用の武術として再構成され、伝統武術から逸脱した観光客の目線に合わせた新時代の武当山武術に生まれ変わったのである。その一環として武術修行に関するショーや映画、物語などが創られた。

このように武当山武術は中国の伝統的な宗教文化である道教と関連しつつも観光資源として展開されたが、それは中央政府による文化政策の中で行われたものであり、中央政府から地方人民への政治宣伝と地方経済発展の促進という二つの効果が期待できるものであった。

【結論】本研究は武当山武術の観光化を事例に、中国の観光政策の政治的意図を導き出し、その中で伝統武術が担っている責任とそれ自体の変容過程について明らかにした。さらにこうした政府主導の武術の再文化化は、今後も絶えないことにより、中国武術が伝統文化から政治的に創られた文化として変容していくことには大きな問題点が潜んでいる。

IIB-1

柔道療法が精神・知的障害者の行動体力に与える影響

〇中村和裕(福山大学)

【目的】精神・知的障害者は、先天的に運動機能が低下していること、あるいは運動が提供される機会が少ないことなどに起因して、行動的体力が低い場合が多い。精神・知的障害者に対する柔道療法は、主として障害の治療を目的として行われる。しかしながら、柔道を定期的に行うことにより、行動体力が高まる可能性がある。この点について、知的障害者に柔道療法を施したところ、痙直性四肢麻痺で歩行ができなかった者が乱取りを行えるようになったこと(村井ら,1988)、あるいは平衡性が改善され、巧みな回転運動ができるようになったことなどが報告されている(宇都宮と濱田,2008)。しかしながら、いずれも事例研究であり、統計的な分析はなされてはいない。そこで本実験では、療法の実施期間および実施頻度が社会的に許容できる範囲内での柔道療法が、精神・知的障害者の筋力、柔軟性および全身持久力に及ぼす影響を検討することを目的とした。

【方法】本研究は、福山大学学術研究倫理審査委員会(受付番号 H-168)の承認を受けた。被験者は、A病院(精神科)の精神科デイケアに通う、精神障害あるいは知的障害を有する地域生活者であった。参加希望者は34名、そのうち20名(以後、JT [judo therapy] 群と記す)が柔道療法と体力測定の両方への参加を、残りの14名(以下、NON [non-therapy] 群と記す)は体力測定だけへの参加を希望した。JT群に2018年12月から2019年5月までの6ヵ月間、柔道療法を1回1時間程度、月に2回(計12回)実施した。平均年齢は、NON群では45.7歳(26~64歳)、JT群では37.7歳(20~61歳)であった。また診断名は、知的障害、うつ病、統合失調症、注意欠如・多動症、アルコール依存症、てんかん、解離性障害などであった。JT群とNON群に柔道療法開始前および終了後に、体力測定を実施した。測定項目は、握力、膝屈曲力、膝伸展力、長座体前屈および最大酸素摂取量(推定)であった。

【結果および考察】2 要因分散分析の結果、握力および長座体前屈において、グループと時期による交互作用および時期による主効果が検出された。握力の下位検定の結果、NON群では、柔道療法前と比べ終了後に高値が認められた(P < 0.05)。長座体前屈の下位検定の結果、JT 群では、柔道療法前と比べ終了後で高値が認められた(P < 0.05)。また、柔道療法終了後では、NON群と比べ JT 群で高値が認められた(P < 0.05)。柔軟性の指標である長座体前屈は、練習頻度が低いにもかかわらず向上することが観察された。柔道療法では、準備体操として回転運動を行っている。この運動には、開脚前転や開脚後転など動的なストレッチ運動が含まれており、主にこれらの運動によって、下肢筋の柔軟性が向上したものと思われる。

【結論】以上の結果から、社会的に許容できる範囲の柔道療法によって、柔軟性が向上することが明らかになった。

IIB-2

柔道背負投に関するバイオメカニクス的研究: 身体重心速度に影響を与える技術的要因

〇石井孝法(了德寺大学),越田専太郎(了德寺大学)

【目的】本研究では、柔道背負投の身体重心速度に影響を与える技術的要因を明らかにするため、高技能群と低技能群の背負投のキネマティクスを比較した. 【方法】被験者は、世界柔道選手権大会のメダリストで背負投を得意とする一流選手3名(年齢:24.3±2.1歳、身長:1.66±0.05 m、体重:72.6±6.9 kg)と学生選手16名(年齢:19.7±1.7歳、身長:1.66±0.04 m、体重:69.1±6.5 kg)とした. 背負投の約束練習を実施させて、三次元動作分析装置(VICON)を用いて身体分析点の三次元座標値を収集した.分析区間は、取が最初の1歩目を踏み出すために軸足を離地させた時点から取が背負投を施し受の身体の一部がマットに接地した時点までとした. 受の角運動量、取の身体重心速度・加速度、軸足における膝関節および股関節屈曲伸展角度・角速度を算出した. 全身の角運動量は Hinrichs(1987)の方法に基づいて身長の二乗と身体質量で規格化した.分析区間における受の規格化角運動量の大きさに基づいて、上位6名(高技能群)と下位6名(低技能群)を選択し、比較した.2 群間の差を検定するために Mann-Whitney U test を行った.有意水準は5%に設定した.

【結果および考察】取の身体重心速度の前後および鉛直成分は、一歩目の軸足接地後から掛け局面にかけて高技能群が低技能群に比べて有意に大きかった. 低技能群の身体重心加速度は、軸足接地後に負の値になっていた. 高技能群の軸足膝関節角速度は、低技能群に比べて有意に屈曲速度が大きかった. また、軸足股関節角速度は、低技能群が高技能群に比べて屈曲速度が大きかった. これらの結果から、高技能群は軸足接地時に地面反力が大きくならないように(ブレーキがかからないように)、軸足の動きを調整していることがよいように(ブレーキがかからないように)、軸足の動きを調整していることがらないように(ブレーキがかからないように)、大きな身体重心速度でコンタクトすることで相手を効果的に投げる(回転させる)ことがわかっている. これらのことから、コーチは背負投において競技者が軸足接地時にブレーキをかけていないかを観察することで、背負投の作りにおける技能の改善を図ることが可能になると考えられる.

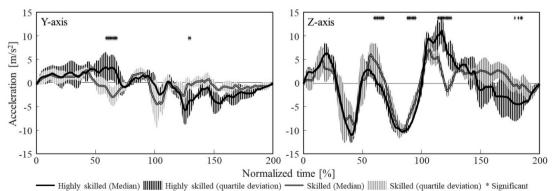


Figure 1: Changes in acceleration of the whole-body COM for the tori in seoi-nage.

TB-3

押し力を受け止める技術 —体勢の違いの比較— ○射手矢 岬¹、伊藤悦輝²、金明燮²、米山哲弘²

1早稲田大学スポーツ科学学術院、2早稲田大学スポーツ科学研究科

【はじめに】

相撲や柔道などの対人格闘技ではお互い接触してからの押し引きの動きがある。例えば、押してくる相手に対して、その押しを受け止めるための様々な技術がある。これらの技術を用いると相手に十分な力を発揮させず、押されても後方に下がらずに受け止めることができる。

そこで、本研究は押し力を受け止める技術を力学的な観点から解明することを目的とした。この研究結果はいろいろなスポーツの押し力を受け止める場面で活用できる可能性がある。

【方法】

対象: 一方が押す役(以下、取という)、他方がその押しを受け止める役(以下、受という)とし、取は1名(165cm、85kg)、受は3名(168.3±6.3cm、68.0±0.8kg)であった。

手順: 2台のフォースプレート上に取と受がそれぞれ乗り、取は受を後退させるように水平方向 に押し、受はそれに耐えた。取と受は右(または左)自然体で構えた。床反力の鉛直方向を Z、前後方向を Z、左右方向を Z とし、サンプリング周波数は Z

実験条件:以下のA・Bの押し方に対して①単純に耐える、②技術を用いて耐える、とした。

A: 取が受の胸を両手で押す場合①受は手を使わず体のみで耐える、②受は両手を相手の両肘に それぞれ下から当て、外側から内側へ絞り込むようにして耐える。

B:取が受の両手首を横から握って押す場合①受は単純に耐える、②受は膝の伸展を用いて手首をやや上方に上げて耐える。

【結果と考察】

条件 A①と B①において受が押し力を受け止めることができなかったときは鉛直成分と前後成分の値は「取>受」となった。条件 A②と B②において受が押し力を受け止めたときは鉛直成分の値は「取<受」となった。

図 1 は条件 B② (写真 1) のときの取と受の鉛直成分の床反力値を示した。押し力を受け止めたとき (250~1250ms 区間) 受の鉛直成分の値は800~850N、取は650~700Nを示し、受の値は約150N上回った。このとき前後成分の値は同等であった。受が押し力を受け止めたとき、取の鉛直成分の値は減少し、取が水平方向に十分な力を発揮できず、受を上から下に押している状態に類似した体勢になっていることが伺われた。

【結論】

相手の押しを受け止めるとき、単純に「押し返す」「踏ん張って耐える」のではなく、受自身がよい姿勢を作ること、取に十分な力を発揮させない体勢を作ることが重要である。これらの技術は、力学的には鉛直成分の床反力値が「受>取」となることから、相手の水平方向に押す力を鉛直成分の床反力で受ける、すなわち足腰で受け止める技術と言える。





写真 1. 取(左)と受(右)

TB-4

大学柔道競技者の稽古が高めるオキシトシン分泌 :精力善用と自他共栄の両立は可能か?

O 松井 崇 (筑波大学)、吉武誠司 (筑波大学)、髙橋史穏 (筑波大学)、 内沢彰子 (筑波大学)、近藤衣美 (筑波大学)、下山寛之 (筑波大学)、 平岡拓晃 (筑波大学)、増地克之 (筑波大学)、岡田弘隆 (筑波大学)

【目的】精力善用自他共栄。言わずと知れた柔道の究竟の目的であるが、これらの理想を両立できるかどうかは議論がある。これまで、柔道競技力に資する体力・技術・戦略向上のための「精力善用の科学」が精力的に進められてきた。一方、一般の子どもや学生の日常的な武道稽古が共感性の向上、攻撃性の抑制などの社会性の改善をもたらすとする「自他共栄の科学」も始まりつつあるが、精力善用を高レベルで希求する競技者のそれは未着手である。

共感性は他者の感情や思考を直感・論理的に理解する能力であるが、その醸成には身体接触で分泌される絆ホルモン・オキシトシン(OT)が重要な役割を果たす。最近、打撃主体のデニスサバイバル柔術ではなく、寝技主体のブラジリアン柔術を愛好する成人男性の稽古がOT分泌を促進すると報告された(Rassovskyら、Sci Rep、2019)。しかしながら、組技系武道で立技と寝技とが混在する柔道稽古の効果やその性差は全く不明である。同じ立技でも組技は打撃よりも身体接触の機会が多いことから、大学柔道競技者においても稽古が立技・寝技によらずOT分泌を促進すると想定した。

【方法】T 大学柔道部所属選手 35 名 (男子 24 名、女子 11 名、平均年齢 19.6±1.1歳) を対象に、内容順の異なる約 2 時間の稽古を別日に 1 回ずつ実施してもらった(1 回目:立技→寝技、2 回目:寝技→立技)。稽古前、前半終了時、後半終了時、稽古終了 30 分後の 4 時点において、主観的疲労感(RPE)と気分(二次元気分尺度: TDMS)を質問紙により回答してもらいながら、唾液を採取した。唾液はすぐに凍結し、後日 OT 濃度を ELISA 法により定量した。各測定項目について、性別毎に稽古の内容順と時点の 2 要因分散分析を行った (P < 0.05)。

【結果】RPE は稽古中に内容順や性別によらず顕著に増加し、稽古終了 30 分後も高い水準を維持した。TDMS の覚醒度は、稽古により内容順によらず稽古前に比べて高まるが、寝技→立技の方が立技→寝技よりも稽古終了時に高い値を維持した。TDMS の快適度は男子では内容順の効果は見られなかったが、女子では寝技→立技の方が稽古全体を通じて高かった。唾液 OT 濃度は、男子では内容順によらず稽古前よりも増加するものの、寝技→立技の方が立技→寝技よりも稽古終了時に高い値を示した。女子の OT 濃度は寝技→立技の前半終了時にのみ稽古前と比べて増加したが、その他では変化しなかった。OT 濃度は、男子では覚醒度と、女子では快適度と正の相関を示した。

【結論】大学柔道競技者の稽古が内容順や性差に応じて OT 分泌を高めることが初めて明らかになった。柔道稽古は高度な精力善用を志す競技者においても、神経内分泌反応を通じて自他共栄との両立を促す可能性がある。

柔道指導者の促発身体知に対する意識調査

〇中川原知波 (東京学芸大学大学院), 久保田浩史 (東京学芸大学)

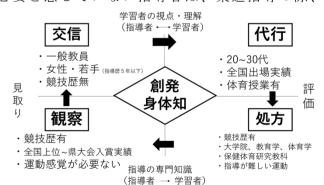
【目的】運動学習者が新しい動きかたを自ら生み出すことを「創発」といい、その身体知を「創発身体知」という。また、指導者が学習者に新しい動きかたの発生を促すことを「促発」といい、その指導者の能力は「促発身体知」という(2005、金子)。これまで体操をはじめとするスポーツや体育では促発指導に関して多くの実践的研究がある。一方、柔道における促発指導に関する研究は多くはない。そこで本研究では、柔道指導者の運動指導における促発身体知に対する意識を明らかにすることを目的とし、調査を行った。

【方法】調査対象者は体育授業や柔道教室などにおいて柔道指導を行っている 指導者94名とした。質問紙調査法により、柔道指導場面における工夫、学習者 への働きかけ、指導に対する意識などについて調査した。分析方法は、柔道指 導者の属性等を独立変数としてt検定及び分散分析を行った。なお、データ分 析にはSPSS25統計パッケージを使用した。

【結果および考察】

- 1) 自身に豊富な柔道経験がある指導者や体育の教科教育の専門知識を有する指導者は、「観察能力」「処方能力」に対する意識が高かった。
- 2) 柔道競技・指導の経験が少ない指導者や柔道指導を難しいと感じている 指導者は「交信能力」「代行能力」に対する意識が高かった。
- 3) 運動感覚を必要と感じていない指導者は、柔道指導の際、ICT を積極的に 取り入れる傾向にあり、運動感覚よりも客観的な指導に対する意識が高か った。主観的な運動感覚よりも、映像等を用いて客観的に観察させる学習 の方が望ましいと感じていることが推察された。

【結論】本研究の結果から下記の図のようにまとめることができる。柔道又は 教科教育の専門知識を有する指導者は、「観察能力」「処方能力」、柔道競技・指 導の経験が少ない指導者は「交信能力」「代行能力」に対する意識が高いことが 示唆された。また、運動感覚を必要と感じていない指導者は、柔道指導の際、



柔道療育の効果と課題に関する質的研究 - 指導者を対象としたインタビュー調査から-

○小崎亮輔 (鹿屋体育大学), 棟田雅也 (鹿屋体育大学), 小澤雄二 (鹿屋体育大学), 濱田初幸 (常盤同郷会)

【背景】

昨今、教育や福祉の現場において知的・発達障害者の増加が報告されている。 知的障害者人口は 2011 年には約 62 万人と報告されているが、2016 年にはそれが約 96 万人と報告されており、5 年間で約 34 万人増加していることがわかる(内閣府, 2021)。発達障害については、通常学級に在籍する児童の 6.5%が発達障害を有している可能性があると報告されている(文部科学省, 2012)。発達障害の内容は自閉症やアスペルガー症候群を含む自閉スペクトラム症(ASD)、学習障害(LD)、注意欠陥・多動性障害(ADHD)など、多岐にわたる。以上のような障害や課題を有している学齢期の児童については、それぞれのケースで適切な発達支援が必要だと考えられる。

平成 24 年には新たな児童発達支援として放課後等デイサービス(以下、放課後等 DS)がスタートした。放課後等 DSでは就学している障害児やその可能性のある児童を対象として、放課後や休日に自立支援や生活能力の向上を目的とした訓練(療育)が実施されている。放課後等 DSの全国の利用者は平成 28年からの 5 年で 10万人以上増えており、事業所数も同期間で 3,000 箇所以上増えている(厚生労働省,2021)。この放課後等 DSの中で、柔道を利用した発達支援活動、所謂柔道療育を実施している施設が国内に点在している。国内での柔道療育の初出は小崎ら(2021)と考えられるが、木村(2017)も指摘している通り大概の療育プログラムは学術的エビデンスの蓄積が浅い状態であり、無論柔道療育も同様である。このような背景を受けて、本研究では柔道療育の効果や課題を検討することを目的に、柔道療育を実施している放課後等 DSの指導者を対象としたインタビュー調査を実施することとなった。

【方法】

柔道療育を実施している放課後等 DS の 4 箇所を対象とし、それぞれの施設の代表指導者にインタビュー調査を実施した。インタビューについては大まかな質問内容を設定し、状況に合わせて内容を掘り下げる半構造化インタビューを実施した。インタビューの内容については文字起こしを実施後、質的データ分析法である SCAT で内容の分析を実施した。

【結果】

2022 年 1 月から 4 月にかけ、それぞれの施設の代表指導者 4 名にインタビュー調査を実施した結果、平均インタビュー時間は 78 分であった。SCAT によるインタビュー内容の分析結果については学会当日に公表するものとする。

トップ柔道選手になるための必要な条件: 2004 年アテネ五輪金メダリスト M 氏へのインタビュー調査から

〇仲田直樹(日本経済大学),石川美久(大阪教育大学),生田秀和(大阪体育大学),林 弘典(びわこ成蹊スポーツ大学)

【目的】トップ柔道選手の育成は、競技の発展や人口増加において非常に重要である。日本では、世界選手権やオリンピックのメダリストをはじめとしたトップ選手の指導経験からコーチング法が明らかにされている(金丸、2017)。また、世界レベルの一貫したトレーニング法や指導法を考案するために、オリンピック競技大会に出場した日本代表選手の生育史が報告されている(楢崎、2013)。しかし、海外のトップ柔道選手を対象に、その育成方法を解明しようとする研究は我々の知る限り見当たらない。

そこで本研究は、2004年アテネオリンピック 100kg 級で金メダルを獲得した M 氏にインタビューを実施し、トップ柔道選手になるために必要な条件を検討 することを目的とした.

【方法】2021年1月8日にM氏の自宅において、本研究者が通訳者を通して 半構造化面接法で行った、質問は以下の5つであった。

質問1「あなたがトップ選手になれた要因は何ですか?」

質問 2「あなたの能力が著しく向上したときのことについて教えてください.」

質問 3「試合で勝てなかったり、スランプに陥ったりした時期はありますか? また、その時どのように対処しましたか?」

質問4「あなたにとってお手本にしていたアスリートはいますか?」

質問5「トップ選手になるために必要なことは何だと思いますか?」

【結果】主な結果は以下の通りである.

質問 1「トップ選手になりたいという強い願望があった」

質問2「21歳までの欧州大会に19歳で出て優勝し、自信がついた」

質問3「負けた原因と向き合い、考えることが大事である」

質問4「いろいろな選手のビデオをみてきた」

質問 5「目標を一つに絞ってそこに突っ走る.一本の道を作ってよそ見などせずまっすぐ突き進むことが大事である」

【結論】本研究の結果は以下のようにまとめることができる. このことから, 明確な目標設定, 徹底的な自己分析と他の選手の研究などが, トップ選手になるために必要な条件であると考えられる.

- (1) トップ選手になりたいという強い願望を持つ
- (2) 若い時期にレベルの高い大会で成功する
- (3) 自己分析をする
- (4) 様々なトップ選手を研究する
- (5) 明確な目標を持つ

TC-4

柔道のかけひき動作測定尺度の構成

〇有山篤利(追手門学院大学),山本浩二(関西福祉大学),宝正隆志(島根県教育庁保健体育課),岡﨑綾子(島根県教育庁保健体育課)

【目的】柔道の大きな魅力の一つに、切れ味鋭い投げ技がある。しかし、その醍醐味は個々の技のかけ方を体得するだけで得られるものではない。個々の投げ技は、相手との巧妙な「かけひき」を含んだ攻防として展開されることによってはじめてその真価が発揮される.しかし、これまで、投げ技のかけひきの動きは属人的な技能に依存する経験知として、いわゆる優秀な競技者のコツや勘の中に放置されてきた。そこで、本研究では、投げ技の「かけひき」の動きを誰もが共通理解できるような概念として提示し、「かけひき」動作測定尺度を構成することを目的とした。

【方法】はじめに、「かけひき」の動きを、「戦術的な意識や思考をもとに、自らに有利な状況をつくりだすために展開される投げ技に入るまでの攻防の動き」と定義した上で、原案となる 31 項目の動きを抽出した。そのうえで内容的妥当性を担保するため、熟練者 6 名の協力のもとデルファイ方法を援用することによって、4 つの仮説的構成概念と 45 の質問項目からなる調査用紙を作成した。

その後、研究 I として、大学柔道選手 120 名にアンケート調査を実施し、探索的因子分析を適用して「かけひき」の動き構成する因子を推定した。続いて、研究 II として、調査対象を高校生から成人までの合計 449 名に拡大し、探索的因子分析を適用することによって研究 I との結果の一致を検討した。また、データの内的一貫性を α 係数により、安定性を再検査法による相関係数によってそれぞれ確認するとともに、各下位尺度のデータへの適合度を確認的因子分析により検討し、さらに妥当性を個人要因 (競技成績) から検証した。

【結果および考察】研究 II で得られたデータに対して探索的因子分析を実施した結果,「組み手の攻防 (α = .83)」「拍子の攻防 (α = .79)」「間合いの攻防 (α = .79)」「気配の攻防 (α = .74)」が抽出された。その後の確認的因子分析の結果,4因子と各項目間のパス係数 (因子負荷量)はすべて.40以上であり (p<.05),各適合度指標は GFI=.92,AGFI=.89,CFI=.92,RMSEA=.06 が示された。

これは、研究 I における探索的因子分析の結果と同様であり、本尺度の頑健性が示された結果となった。また、 α 係数は各因子で.74-.83 の範囲であり、107 名を対象とした追加調査で再検査信頼性を確認したところ、相関係数は各因子で r=.42-55 であった。一方、妥当性については、個人要因(競技成績)から検討したところ、いずれの因子においても競技成績の高い群において各下位尺度の得点が高かった(いずれも p<.05)。以上のことから、本研究において作成を試みた柔道のかけひき動作測定尺度における信頼性・妥当性は確保されていることが示された。

【結論】「組み手の攻防」「拍子の攻防」「間合いの攻防」「気配の攻防」という 4 因子 19 項目からなる柔道のかけひき動作測定尺度が構成された。

TC-5

剣道の試合における暫定的な審判法による 試合内容及び戦術行動の検討

〇時村実壮(順天堂大学大学院),中村充(順天堂大学),佐藤皓也(順天堂大学)

【目的】

剣道は、公明正大に試合をすることが定められ、正々堂々と戦うことを意味していると考えられる。しかし、先行研究によると、有利に試合を展開しようとするがあまり、「打たれない・負けない」ことを主に優先させて防御に徹している(笹木ほか、2013)と述べられており、特に相手と接近した「鍔迫り合い」を中心とした課題が指摘されている。例えば、鍔迫り合いが試合時間の半分を占めている、あるいは分かれる間での不当な行為等の問題が生じていると報告がされている(馬場ほか、1989)。全日本剣道連盟(以下、全剣連)をはじめ様々な組織がこれらの課題を解決する取り組みを図ってきた(全国高等学校体育連盟剣道専門部、2021)。若干の改善傾向は見られたものの、未だ解決に至っていないことが窺われる。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、感染予防を目的として「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合審判法」(以下、暫定的審判法)が 2020 年 8 月に制定された。暫定的審判法では、趣旨 1 で感染予防、趣旨 2 で姑息な行為の解決が求められている。特に、趣旨 2 については、従来からの課題に対する解決効果を検証することによって、今後の剣道試合の方向性を探る大きな材料になり得ると考えられる。池田ら (2021)は、大学生の大会を対象に、暫定的審判法適用前後の有効打突や反則の出現状況、出場選手の意識、審判員による評価を調査し、暫定的審判法を出場選手や審判員は前向きにとらえ、単に感染症を予防するだけでなく剣道の試合をより魅力的なものにする可能性を有していると述べている。しかし、詳細な試合内容や戦術行動に基づいた検証により、試合内容の変化を言及するには至っていない。

そこで本研究では、詳細な試合内容を戦術と関連付けて、その変化を探ることを目的と した。

【方法】

全日本剣道選手権大会を対象に、暫定的審判法の適用前として第 67 回大会 59 試合(上段選手の 2 試合、映像不備の 2 試合を除く)、及び適用後として第 68 回大会 61 試合(映像不備の 2 試合を除く)とした。試合データは、全剣連の公式サイトで公開されている試合映像を用いた。

本研究では、「試合時間」「施技の有効/無効」「施技内容」「間合い」「竹刀の動き」「体の動き」「打突部位」「連絡」の項目を設け、客観的なデータとして比較・検討を行った。

本研究においては、戦術行動を明らかにするために「連絡」という項目を設けた。「連絡」とは、柔道における、自分の投げ技から自分の投げ技に連絡する「連絡技」を参考として、技を打突して更に縁を切らずに技を打突したものを「連絡技」として定義した。連絡の分類として、「仕掛け技のみ」「応じ技のみ」「仕掛け技→仕掛け技」「防御→仕掛け技」「防御→仕掛け技」「防御→仕掛け技」「防御→仕掛け技」「防御→仕掛け技→仕掛け技」「たまった。また、施技者双方が打突の攻防を行った際は、最後に打突をした施技者の一連の技を見ることとした。

【結果】

1試合あたりの平均時間は、適用前が8分06秒、適用後が6分28秒であった。施技の有効/無効数は、適用前が76/1413(本)、適用後が94/1628(本)であった。打突前の攻めにおける竹刀の動きについて、適用前は左右に竹刀を操作して攻め入っているのに対し、適用後は上方向・前方向の竹刀操作を中心として攻め入っている様子が窺えた。また、「連絡」に関して、適用前は防御からの仕掛け技が多かったのに対し、適用後は縁を切らずに仕掛け技から仕掛け技へと技をつなげている割合が多く、戦術行動に変化が見られた。

東京五輪空手組手競技における得点技に関する研究 :メダリストと非メダリストの比較

〇大徳紘也(日本体育大学大学院),石井孝法(了徳寺大学),亀山歩(国士舘大学),田中理沙(国士舘大学),松本剛志(日本体育大学大学院), 大石健二(日本体育大学).

【目的】2020年東京オリンピック競技大会(以下東京五輪)正式種目として行われた空手組手競技は、8m四方の正方形コート内において、2人の競技者が突きや蹴りなどの有効な技を出すことにより得られる得点数によって勝敗を決する競技である。競技中に繰り出される技は、4名の審判が有効か無効か判断し判定を行う。有効技による得点数の内訳は、頭部及び腹部と背部への突き技が1点、腹部及び背部への蹴り技が2点、頭部への蹴り技が3点、倒れている相手への突きまたは蹴り技が3点となる。組手競技における技の種類は様々であり、どの技をどの場面で繰り出すかは競技者の戦術によって異なる。競技中に繰り出される技の特性と競技成績の関連性を明らかにすることは、競技指導の場面における、戦術指導に役立つ有益な情報となることが期待できる。そこで本研究では、東京五輪空手組手競技における得点技に着目し、メダリスト群(以下ML群)と非メダリスト群(以下NML群)における戦術に関する特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】分析対象選手は、東京五輪空手組手競技の男女 3 階級に出場した 60 名 (男子 31 名/女子 29 名) とし、分析対象試合は 270 試合 (男子 136 試合/女子 134 試合)であった。分析対象試合の内容について、突き技 3 種 (刻み突き、上段逆突き、中段逆突き)、蹴り技 5 種 (上段回し蹴り、中段回し蹴り、前蹴り、横蹴り、裏回し蹴り)、その他の計 9 種に分類した。これらの技について、得点にならなかった技 (仕掛技)、得点になった技 (有効技)の回数をカウントすることと、有効技数を仕掛技数で除した有効率を分析項目とした。各分析項目は、ML 群と NML 群による群間比較を行った。

【結果および考察】突き技の仕掛技数は ML 群 8.67 ± 3.05 回、NML 群 5.31 ± 0.78 回。有効数は ML 群 1.46 ± 0.39 回、NML 群 1.25 ± 0.05 回。蹴り技の仕掛技数は ML 群 3.31 ± 2.65 回、NML 群 3.03 ± 1.06 回。有効数は ML 群 0.45 ± 0.15 回、NML 群 0.33 ± 0.03 回であった。東京五輪の試合内容は突き技が蹴り技の約 8 倍の頻度で確認されたことから、戦術の軸になっていたことが考えられた。ML 群は総合的に仕掛技数が多く、有効数の頻度も高い傾向が示された。突き技の有効率において、ML 群 $28.61\pm0.13\%$ 、NML 群 $23.80\pm0.19\%$ と ML 群が高い傾向を示した。ML 群は突き技の有効率においても高い傾向を示し、NML 群に比較し精度の高い技術であったことが考えられた。本研究における技術頻度の結果は、2012年世界空手選手権におけるトップ選手の技術分析に関する報告(Tabben Montassar, et al, 2015)とも類似した結果であった。つまり、現代のトップ選手においても戦術の基本は突き技であることが明らかとなった。

弓道の弓弦の違いに着目した指導法への活用について

〇松尾牧則(筑波大学), 堆耕平(筑波大学大学院), ジャコモ・マリアーニ(弓道専門分科会)

【目的】適正な弓弦の選択は、弓力のみならず、矢の特性や射手の技能も含めて総合的なバランスによって判断されるべきものではないかと考える。現状では弓力の目安はあるものの、明確な目的をもって弓弦の選択をしている状況にはない。他者の評価情報を参考にしながら試行し、最終的にはその射手の使用感によって選択が定着している。本研究では、先人達はどのように弓弦を選択してきたのかを、弓術伝書・弓道書籍内の記述を参考にして弓弦選択の考え方を探る。また、使用者にとって適正な弓弦を選択できるように弓弦の違いより生じる差異(矢の速度・矢の着点)についてデータを収集して考察する。そして、得られた結果から、弓道実施上において弓弦の差異やその特性を指導上に活用する方法を検討することを目的とする。

【方法】弓術伝書・弓道書籍内において、弓弦の製作とサイズ・重さ等に関する記述を参照し、弓弦選択に関して弓の種類や弓力との関係について基本となる考え方を明らかにする。使用者は弓弦の違いについて、何によってその差異の認識をしているのか、大学弓道部員に対して聞き取り調査を行う。発射実験は、発射台(発射のための装置)を使用して発射実験データを収集する。諸条件を一定にし、弓弦の影響のみをクローズアップ出来るように発射実験方法の工夫を試み、矢の速度と矢の着点を記録する。それらを踏まえて、指導法への活用を検討して提示する。

【結果及び考察】『射法全書』に「其弓に応じて然るべし。弱弓に太弦、強弓にほそ弦を忌むべし」とあるように、弓力またはその弓の目的に応じて相応の弓弦を使用していた。基本は強弓には太く重い弦、弱弓には細く軽い弦であるが、目的や弓の種類によって違いがあった。使用する弓弦により、弓の冴え、矢飛びの遅速、弦音など、弓弦によって違いが生じる。弓弦の選択により難易度の変更も可能であろうことが考えられる。『日置流秘書百七箇条』に「太き弦にては近物ねらひに能く候、第一、我身に力強目なる弓もふと弦を仕掛け候へば引心弱く覚え申すものにて御座候、弽にもやはらかに當り申すに付指に痛みまはらず候、軍陣へは太き塗弦を用ひ申し候、然れども遠矢、指矢などには矢のかせぎ太弦にてはぬるく御座候」とあり、目的によって弓弦も吟味がなされる。

【結論】弓力に相応の弓弦を使用することが基本となり、弱弓には細く軽い弦、強弓には太く重い弦との考えのもと、弓弦の号数表示や麻弦目方(匁)表示もなされている。弓道習熟者は、弓弦の違い(サイズ・重さ)を認知でき、矢の速度、弦音、角見、弓返り、矢所、弓の振動、弦枕への圧力等で感じ取っていると考えられた。弓弦の特徴は初心者指導や授業における指導上に応用ができる。弓弦の変更(特に重さ)は、矢の速度変化をもたらし、矢所の修正が可能である。弓弦の選択により技術課題の難易度を変更することが可能となる。

IP-1

旧制第一高等学校の資料分析からみた学生の剣道観と剣道実践 〇佐藤皓也(順天堂大学)

【目的】筆者は、関西を中心とする京都の旧制第三高等学校(以下、三高のように旧制高校は略記する)の剣道部とその対戦校であった四高(金沢)、五高(熊本)、六高(岡山)を主な対象とし、当時の学生が剣道の競技スポーツ化に果たした実態について調査を実施してきた。そこでは、三高生は他の競技スポーツと比較しながら技術やルールを整え、競技スポーツとしての剣道を志向したことが明らかになった。また、明治30年代以降、三高を中心とした西日本の学生剣道界では競技スポーツ化を推進する動きがあったこともわかった。そのような関西の動向とは趣意を異にする「無検証」(自己審判制)を提唱した一高を中心に関東の動向を明確にすることが不可欠となった。そこで本研究は、明治期以降における学生剣道界の動向をより明確にするため、関東の一高(東京)を対象として彼らの剣道観と剣道実践を明らかにすることを目的とする.

【方法】本研究で使用した主な資料は以下のとおりである.

- ① 第一高等学校:校友會雑誌,第一高等学校校友會:1890-1940.
- ② 第一高等学校寄宿舎寮:向陵誌,東京:1913・1925.
- ③ 一高弥生會:會報,東京:1926-1943. (東京大学駒場博物館蔵)
- ④ 一高擊剣部:擊剣部記録:1918-1922. (東京大学駒場博物館蔵)
- ⑤ 矢野一郎:米寿追悼 一高擊剣部,東京:1987.

【結果および考察】明治期,一高の撃剣部員は勇往不屈,廉耻禮讓といった武 士的精神を修得し、教育勅語の方針に基づく臣民の覚悟を保持することが指導 者の塩谷時敏から求められた.そのため一高は試合での勝敗ではなく,生死を 分ける場面でも動じない心の養成に価値を置いた.つまり,塩谷は剣道の価値 を国家的レベルで位置づけ、部員はその指導を稽古や試合で体現した、日露戦 争以降、部員が試合に対する不満を抱き始めるなかで塩谷は「無検証」を提唱 し,一高や東京帝国大学(以下,東京帝大)主催の招待試合で施行されるよう になった、大正期、一高は簡単に勝てない状況に陥り始め、第1回東京帝大主 催の全国大会(1924)では予選リーグで敗退する.他校に対する一高の優位性 は、その過程で薄れていった、全国大会優勝後(1925)、佐々木保蔵(塩谷の後 任) は再度、一高の優位性を主張したけれども同大会の出場校には認められな かった.そこで佐々木は,すでに薄れた一高の優位性は取り戻せないとしても, 国家有用の材としての面目だけは保守するために、第三回大会への不参加を表 明した(1927)と考えられる.一高は他校が大会参加へと雪崩を打つ状況に傾 くなかでも、戦前において全国大会へ参加することはなかったが、「無検証」の 精神に基づく「弥生会」(遠征団体)を組織して全国の学校と交流を深めた.

【結論】一高は勝敗への執着を批判し、国家のリーダーとしての素養や武士的精神の養成に価値を置いていた。つまり、剣道の競技スポーツ化は、学生剣道界がこれまで推進してきたとされていたが、一高は全面的に競技スポーツ化に賛成しているわけではなかった。一高出身者は1952(昭和27)年の全日本剣道連盟結成以降、剣道が競技スポーツとして普及・発展した際に、同連盟や全日本実業団剣道連盟等の枢要な地位について剣道の在り方を規定するに大きな足跡を残すこととなる。

IP-2

中津藩中西家古文書における一刀流伝書について(第2報)

〇立木幸敏(国際武道大学)、森本邦生(貫汪館)

【目的】 著者等は第 54 回大会にて近年公開された中津藩中西家古文書について第 1 報として報告をした。第 1 報の結論としては「一刀流の歴史における中西家は富永堅吾著『剣道五百年史』では中津藩士との記載があるが、本研究から中西は奥平家の家臣であり、その後中津藩へ転封とともに中津藩士とされたと考えられる。小野家の文献である春風館文庫にある小野家 4 代・忠一から奥平大膳大夫(奥平昌成)宛、中西忠太宛本目録の控えに相当する資料はまだ見つかっていない。」とした。当初新型コロナウイルス感染症の影響により現地調査が十分行えず、古文書数点の抜けがあったので、途中経過としての報告であったが本年現地調査をおこない、未調査の文献、その他資料の収集、検討を行い知見を得たので報告をする。

【方法】中津市歴史博物館で公開された中津藩における中西家古文書について 資料の閲覧、収集を行った。また中津市立小幡記念図書館、中津城奥平家歴史 資料館に調査を行った。

【結果及び考察】公開された中津藩中西家古文書は約59本の巻物、綴本等がありその中から一刀流関係の資料を精査した(なお8点は個人情報のため学会では扱わない)。残りの51点は目録、写本、覚え、書状、起請文からなり、その年代は中西家四代・忠兵衛子正(没年、安政4年(1857)または慶応2年(1866)^{池永2021})の弟子である増山二郎順正(丹後田辺藩)、經正(中西子正門人)の1837~1849年頃のものが多い。また、小野派一刀流四代・忠一(1658~1738)発給、近藤淡路守宛の「一刀流兵法目録」享保11年(1726)、中西家初代・忠太子定発給、朝倉外記宛「一刀流免許状」寛延3年(1750)などがある。年代不明、著者不明のものも多い。

今まで一刀流中西家の研究が進まなかった理由に、奥平中津藩の体系的な分限帳が残存しておらず、江戸家中分限帳(享和3年(1803))と奥平中津藩分限帳(天保12年ごろ)のもののみが確認されている事があげられる(中津藩歴史と風土 第9輯)。そのひとつの中津市立図書館蔵の「江戸家中分限帳(享和3亥年)」によると「御供番、中西猪太郎(中西家4代・忠兵衛子正)、弐拾人扶持」とあり当時の家格が記載されている。

また奥平家藩臣略譜集録(長篠城史跡保存館蔵書)から中西家は奥平家三河以来の譜代の家臣(中西藤九郎)との記述があることから古くからの奥平家の家臣であった。また中西藤九郎家から後の中西派一刀流初代・忠太子定が出たとの記述があるが、中津藩中西家古文書にある中西忠太子定の出た中西家の先祖書きに記された、「先祖、中西六太夫之安」とある人物が上記の奥平家家臣の縁戚にあたるのかは今後の調査が必要である。

一方、小野派一刀流の文献である春風館文庫^{吉田 2007)} にある小野家 4 代・忠一から同日に発行された奥平大膳大夫(奥平昌成)宛、中西忠太宛本目録の控えに相当する資料は奥平家歴史資料館の調査でも見当たらなかったが、奥平昌成(享保 2 年(1717)奥平昌成が中津へ転封)の代には初代・中西忠太子定(没年宝暦 11 年(1761)^{池永 2021})は奥平中津藩家臣であったと言える。

平常心の意味と構造的特徴

江川 玟成 (東京学芸大学)

I. はじめに

通常、「平常心」といえば、「いつもと変わらない落ち着いた心。ふだんの心」とか、「普段どおりに平静である心」と理解されている。しかし、それだけでは、 非常事態の闘いの場においては、けっして十分とは言えない。

本稿においては、宮本武蔵の著『五輪書』により、プレッシャーが強い闘い の場に通用する平常心について考察することにする。

Ⅱ.『五輪書』における平常心

水の巻に、「兵法における心の持ち方」という項目がある。武士として剣術の 勝負に臨む心構えを書き記したものである。その中身を箇条書きにすれば、そ れは次の通りである。

①心を広く真っすぐにする、②緊張しすぎず、かといって少しの緩みもない精神状態、③心が偏らないよう真ん中に置く。④心を静かに揺るがせて、その揺るぎが一瞬たりとも止まらないよう常に流動自在な状態に保つ。つまり、動作が静かなときも心は静止せずきちんと働いている、⑤心は動作に引きずられない、⑥動作は心に引きずられない、⑦心の持ち方にはよくよく気をつけて、動作には気をとられないようにする。⑧心を充実させ、余計なことには気を奪われない、⑨見た目はともかく、心底はしっかりと強くもつ、⑩自己の意図・ねらい・真意など、本心を相手に見抜かれないようにする。以上、まさに「平常心十か条」というべきものである。

Ⅲ. 心理学的分析

上に述べた事柄を補足するために述べると、つぎのようになる。

1) 認識機能の側面

まず、認識機能の面は、①注意の範囲が広く、しかも注意が偏らずバランスがとれている。②どうでもよい刺激や事柄に気(注意)が奪われたりしない。③必要な事柄の見落としや見誤りはない。③見えない部分・見えにくい部分・陰の部分に対する目配り・気配りが素早く、かつ推測が的確である。⑦先々の様子・状況に対する見通しや予想も怠りなく的確である。

2) 威情・意志・行動の側面

①慎重になりすぎて、心身の働き・状態が不要にも抑制されたりはしない。 ③意志力・気力は充実している。④先走って勝敗・結果を意識することはなく、 自己の認識作用や心の働き・状態に気配り・配慮がなされている。⑤とくに意 識することなく、闘いの状況に見合った身の動き・攻防動作が的確かつ素早く できる。⑥苦境に立っても、決して諦めたりせず最善を尽くそうとする。

IV. おわりに

上記の「平常心」は、剣術をはじめ、剣道、空手道、各種拳法、フェンシングなど広く武道に当てはまるものと考えられる。「非常事態・闘いの場にも通用する心の持ち方を、つね日頃から心がけて習慣化しておき、つまり平常心としておき、非常事態には、そのいつもの心持ちで臨むべし」という教訓である。

IIP-4

剣道形を取り入れた中学校剣道授業実践について ~オンライン授業研究会の実施に向けて~

〇太田順康(大阪教育大学), 金森昭憲(豊中市立庄内小学校) 由留木俊之(岸和田市立山直中学校),石川美久(大阪教育大学)

【目的】

これまで我々は、中学生への効果的な武道授業や安全意識の形成に向けて、「型」の考え方を取り入れた授業つくりを目指した調査の結果を報告した。

中学校学習指導要領解説にも「基本動作や基本となる技を習得する学習においては、「形」の取扱いを工夫することも効果的である.」とあり、「形」をどのように取扱うのかは検討を要する.そこで昨年は、中学校で「剣道形」を取り入れた授業実践例を報告し、授業時に実施した授業評価により、中学生は「剣道形」を肯定的に捉え受け入れていたこと、コロナ対策により発声を禁じたことが、意外にも好評であり好影響を与えていたことも明らかになった.このことを踏まえ、昨年度も同様に授業実践を実施した.この成果を現場に還元するために研究会を開催する予定であったが、コロナ禍により中止となったため.代案として「オンデマンド型研究授業用資料」を作成し公開した.そこで、今回及び前回の授業評価及び生徒の記載の比較及び、公開の過程とその結果について報告する.

【研究方法】

中学1年生対象にした剣道授業で独自作成の「剣道形」を実施し、毎授業後に回収した生徒による評価の分析を通して、「剣道形」の取扱い方を検討する.

更に「オンデマンド型研究授業用資料」を作成し公開,その結果を検討する.

授業期間: 2020年10月17日~2020年12月15日

: 2021年8月27日~2021年10月22日

対象: OK 大学附属 I 中学校 第1学年 A・B・C・D 組 144名 (2020)

: OK 大学附属 I 中学校 第1学年 A・B・C・D 組 144名 (2021)

授業者:外部指導員,授業担当,学生による TT

授業内容:剣道 10時間

(導入,基本動作,剣道形,剣道具着装した剣道)

評価方法:独自評価用紙を授業終了時に配布回収した. 調査内容:形成的授業評価および自由記述による評価

分析方法:IBM SPSS Statistics27による統計処理および KH コーダーに

よるテキストマイニング分析を行った.

公開方法: YouTube に動画を Up し限定公開した.

【結果および考察】

中学生は「剣道形」を肯定的に捉え受け入れていた.

結果の詳細については,発表会時に報告する.

本研究は日本学術振興科学研究補助金(基盤研究(C)課題番号*18K02619 太田順康)の助成を受けたものである.

IP-5

剣道体験に参加した小学生の剣道に対するイメージの変化

○京林由季子 (岡山県立大学), 平田佳弘, 大井理緒 (環太平洋大学)

【目的】日本の伝統文化の一つとして位置づけられる剣道は、2012 年度から中学校の体育において他の武道種目と共に必修化されたものの、近年の少子化に加え、習い事としてのスポーツの多様化やメディアで目にする機会も少ないことから、子どもの剣道人口は減少傾向にある。日本の伝統文化であり、また、生涯スポーツとしての剣道の普及のためには、幼少年期にある子どもたちに剣道に触れる機会を積極的に設け、剣道に対する興味・関心を育むことが必要とされよう。本研究では、小学生児童が剣道に触れる体験を試み、剣道体験に参加した児童の剣道に対するイメージの変化について明らかにすることを目的とした。

【方法】A 大学で 2022 年 5 月に開催されたキッズスポーツのイベントにおいて、剣道体験に参加した小学1年から6年の児童37名に対し、剣道体験の前後にアンケート調査を実施した。剣道体験は、礼法、所作、素振り、鬼ごっこ、新聞紙切りの順に約40分間実施された。指導者は大学教員2名であり、4名の剣道部員がサポートした。アンケート調査は小学低学年の児童には、剣道体験をサポートした大学剣道部員が児童に口頭で質問し記入、小学高学年児童は自身で記入した。事前のアンケート項目は、属性3項目、剣道のイメージ5項目(かっこいい、楽しい、安全な、こわい、痛い)であり、事後のアンケート項目は、剣道のイメージ5項目、事後の評価2項目(楽しいと思った体験、また剣道をやってみたいか)であった。回収率は100%であった。剣道のイメージ5項目については、「思う」4点、「少し思う」3点、「あまり思わない」2点、「思わない」1点として参加児童の平均得点を算出した。また、サポートした大学剣道部員にも、体験指導の感想について記述による回答を求めた。

【結果および考察】参加児童の基本属性は表 1 に示す通りであった。スポーツの習い事経験は、武道が5名、武道以外のスポーツ経験が24名、経験なしが9名であった。剣道のイメージは5項目すべてにおいて体験前後で有意に変化しており、剣道体験により、剣道を「かっこいい」「楽しい」「安全な」と思う児童が増え、「こわい」「いたい」と思う児童が減少している

ことが明らかとなった(図 1)。事後のアンケートでは、楽しいと思った体験として 33 名が新聞紙切りと回答していた。また、30 名が剣道をまたやってみたいと「思う」、4 名が「少し思う」と回答した。サポートした剣道部員が体験の指導で難しかったこと、工夫したことは表 2 に示す通りであった。今回の剣道体験では、初めて剣道に触れる児童がほとんどであり、剣道の所作や竹刀の扱いを楽しめる内容としたことや、親しみやすい大学生の剣道部員のサポートがあったことなどにより、短時間ではあったが、参加児童の剣道に対するイメージは肯定的な変化を見せたと言えよう。



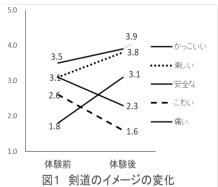


表2 サポート剣道部員の感想(抜粋)	
指導で難しかったこと	・頭の上まで竹刀を振りかぶる子どもが少なかった。 ・足が先に出てそのあと竹刀を振ったりという子どもが多かった。 ・右足が前で左足が後ろのまま素振りをすることが子どもは難しかった。 ・竹刀を振ることに抵抗がある子どもがいた。 ・街間紙切り)どれがまっすぐ振れているのか子どもたちはわかっていなかった。 ・待ち時間に竹刀を振り回さないなどの指導が難しかった。 ・学年が違う子にどこまで教えたらいいのかの判断。
指導で工夫したこと	・竹刀の持ち方や足さばきを忘れないように繰り返し思い出せるよう指導。 ・アニメなどの流行のあるものを言ったら素振りに対する意欲が向しした。 ・新聞紙をびんと貼ったり真ん中に少し切り目をいれて、子どもたちが出来た、楽しいとやる気に繋がるように意識した。 ・新聞紙切りを待っている子どもに、1回1回「危ないからもう少し下がろうか」など声をかけた。 ・保護者からお手本を見せてほしいと言われ、ヒントをもらった。

IP-6

ICTを活用した空手道授業の指導成果と課題

○井下佳織・豊嶋建広・橋本富太郎(麗澤大学)、岡﨑紀創(全日本空手道連盟)

【目的】令和元年度より特別な支援を必要とする子供を含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力を一層確実に育成できる教育環境を実現する GIGA スクール構想の実現に向け環境整備が進められることとなった。現在、中学校における空手道授業の実施校数は、約10年で急激に増加してきているが、これまで空手道授業に関する具体的な成果や課題を検証した報告はほとんどみられない。そこで我々は令和2年度スポーツ庁委託事業武道等指導充実・資質向上支援事業として、まず「空手道授業を男女共習で実施する上での成果と課題」について調査した。その結果、空手道を実施する上での成果としては、1.授業として運営しやすい、2.男女共習で実施しやすい、3.「武道への興味・関心」「礼儀・礼節」が高まる、4.ケガの発生が極めて低く安全性が高いことがあげられた。

そこで今回は、特別な支援を必要とする生徒への武道授業実施状況および ICT を活用した空手道授業の指導成果と課題を明らかにし、それらの課題解決 策を探ることを目的とした。

【方法】公益財団法人全日本空手道連盟(以下「全空連」と略)により公表されているこれまでに空手道授業実施した中学校(約 460 校)の教員を対象として,各学校へ郵送により調査を依頼し,126 件の回答を得た(回収率 27%)。調査は 2022 年 1 月 24 日~2 月 6 日の期間に実施した。調査内容は,ICT を活用した空手道授業の指導成果と課題(指導体制・方法・指導内容の工夫・ICT の活用等)に関する事項を含めた 45 問から成る質問を作成し,インターネット調査会社にインターネット調査フォームの作成および調査結果の集計を依頼した。

【結果および考察】

- 1. 空手道授業の成果と課題調査の結果から空手道を実施する上での成果としては,令和2年度の調査と同様のことが挙げられた。①授業として運営しやすい。②男女共習で実施しやすい。③「武道への興味・関心」「礼儀・礼節」が高まる。④ケガの発生が極めて低く,安全性が高い。以上に加えて以下の調査結果が得られた。
- 2. 特別な支援を必要とする生徒への武道授業実施状況の結果から特別支援学級の 9 割は授業の中で「武道」を実施していた。また授業の指導内容に関しては,9割が通常の学級と「全く同じ」(68%)か「ほとんど同じ内容を簡単にして実施」(18%)していることが明らかになった。
- 3. ICT の活用目的は「技能の向上」(90%),「課題の発見」(67%),「課題の解決」(62%),「知識の向上」(50%)「興味・関心の向上」(49%)等で,主に「形(個人)」(80%),「基本動作」(77%),「団体形(グループワーク)」(64%)を学ぶのに活用されていた。
 - ※本研究はスポーツ庁の令和3年度武道等指導充実・資質向上支援事業委託事業(指導成果の検証)として,麗澤大学が実施した成果をまとめたものである。

IIP-7

柔道競技における個別コーチング実践事例研究

○大嶋悠正 (筑波大学院), 增地克之 (筑波大学)

【目的】柔道競技において指導者が選手の競技能力を評価する指標として、Maekawa ら (2013) は 9 項目であったと報告している. その中に「組手」に関連する項目は「組手の厳しさ」、「組手のスタイル」の 2 項目が挙げられていることから、柔道競技において「組手」がいかに重要な要素であるかを示している. しかし柔道競技に関連した指南書の中でこの「組手」に着目して記されたものはほとんどない. 藤原 (2019) は組み方において標準的な組み方を27 パターン、変則的な組み方を30 パターン、片手のみの組み方を10 パターンに分類しており組手のスタイルの多様性を示している. また自身が選択する組み方と相手が選択する組み方の組み合わせを考えると「組手」は無数のパターンがあるといえる. つまり限定的・特定条件を規定した状況下でのコーチング事例を多く収集し、実践知の集合体から一般化・体系化する必要がある. そこで本研究では競技能力を評価する指標の1 つである「組手」に着目し事例研究を行う.

【方法】第 1 に「相四つで奥襟(背部)を持たれる」ことを苦手とする T 大学柔道部員(身長:173cm 体重:68kg 年齢:18 競技レベル:IH 県予選 2 位)を研究対象者としヒアリング調査による動感・意識の調査を行った(主観的問題点の探索). さらに研究対象者が苦手とする選手(研究協力者)との乱取り稽古を撮影および分析を行った(客観的問題点の探索). 第 2 にこれらを通じて得た「引き手を取られた後に奥襟(背部)を持たれる」という問題点について全日本柔道連盟公認指導者ライセンスを保有する 3 名で課題提示・対処方法の合議を行い、3 つの対処法(①構え②手の位置③引き手の切り方)をもとに介入指導を行った(2022/5/24 から 2022/7/30).

【結果および考察】現在も介入指導期間中であるために中間結果($2022/5/24 \sim 2022/6/6$)として示す.問題点であった「引き手を取られた後に奥襟(背部)を持たれる」ことに関して介入前は 79%であったが介入中間段階では 61%と減少傾向であった.このことから問題点に対し介入指導が一定の効果をもたらしているといえる.しかし乱取り稽古における失点時の組み手を分析したところ奥襟を持たれた状態での失点において介入前は 73%, 介入中間段階で 71%と大きな差はみられなかった.すなわちこれまでの問題点であった「引き手を取られた後に奥襟(背部)を持たれる」とは異なった新たな奥襟を持つパターンが創発された可能性が示唆される.

【結論】短期間の介入で問題点に対し 2 割に近い割合で対処できるようになった.しかし,研究協力者の学習によって新たな組手のパターンが創発された.よって本研究は柔道の特定の課題に対するコーチング事例としてその研究意義が認められるといえる,しかし新たに創発された組手のパターンにおいても本研究と同様のプロセスで新たな事例として研究していく必要性がうかがえる.

IP-8

小学校中学年を対象とした柔道遊びの教材開発

〇與儀幸朝(鹿児島大学),久保田浩史(東京学芸大学),石川美久(大阪教育大学),松井高光(帝京科学大学),井上康生(東海大学),鈴木桂治(国士舘大学),木村昌彦(横浜国立大学)

【目的】

学習指導要領(2018)では、生涯にわたって豊かなスポーツライフの基礎を培うことを重視して、児童生徒の発達段階を考慮した指導内容が示されている.しかし、柔道を含む武道は器械運動や陸上競技などの運動領域とは異なり、発達段階に応じて小学校から中学校への系統的なカリキュラムが編成されていない.このような状況で小学校において、柔道の基本的な動きを取り入れた教材を開発するには、体つくり運動の内容に示されている多様な動きをつくる運動で実践することが最も望ましいと考えられる.体つくり運動では、授業を通して運動の楽しさに触れる活動を展開し、その結果として体力の向上を図ることが明記されている.そこで本研究では、小学校中学年の児童を対象として柔道の基本的な動きを学習内容に取り入れた教材を開発し、その有用性について体力・運動技能テストを用いて検討した.

【方法】

1. 対象と時期

対象は、鹿児島県内の小学校に協力を依頼し、第3学年男子6名女子6名 計12名の児童とした、時期は2022年3月に全6時間の授業計画で行った.

2. 柔道の基本的な動きを取り入れた教材

多様な動きをつくる運動として、体を移動する運動では、すり足(雑巾ウォーク)を取り入れた.力試しの運動では、柔道の帯を用いて(握力)を使う運動を取り入れた.基本的な動きを組み合わせる運動では、上半身は姿勢と組み方、下半身はすり足を組み合わせた動き(ペアボールウォーク)を取り入れた.

3. 調查内容

雑巾ウォークは、前後および左右に 10m往復移動するタイムを測定した.握力は、左右2回測定して平均値を算出した.ペアボールウォークは、ソフトバレーボール(円周 78 cm)を使用し、1辺 3.5mの四角形をラインで描き、そのライン上をペアで2個のボールを落とさずに正しい姿勢をキープしながら、すり足で移動するタイムを測定した.測定は2回目と6回目の終了後に行った.

【結果】

雑巾ウォークは、前後に移動するタイムが有意に向上した.握力は、左手の記録が有意に高まった.右手の記録は高まったが有意な差は認められなかった.ペアボールウォークは、タイムが有意に向上した.

【結論】

本研究では、体つくり運動の多様な動きをつくる運動において、柔道の基本的な動きを取り入れた教材を開発し、その有用性について検討した。体力・運動技能テストの結果から、開発した教材は児童の体力を向上させるうえで有用である可能性が示唆された。今後は高学年との接続を視野に発達段階に応じた教材を開発し、授業評価なども取り入れて多角的に検討していく。

IP-9

柔道授業が身体に及ぼす影響 -養成学校生に対する認識調査を基にして-

○福井悠紀子(東亜大学),久保山和彦(日本体育大学)

【目的】

近年、柔道整復師養成施設を取り巻く環境が変化したことにより、柔道経験のない学生が志願する傾向にあり、次第に養成学校において柔道を行うことの意義が失われつつある。すなわち、柔道整復師養成課程における柔道教育の意義が薄れてきているといえよう。このようなことから、医療人となるための柔道教育の意義を明確にした上で、創造的な再活性化が必要である。

これまで、我々が行ってきた柔道教育に関する調査では、柔道授業により医療人としてのノンテクニカル効果・向上に寄与することを報告している。そこで、今回は柔道整復養成学校生の柔道授業に対する身体への影響を調査することによって、柔道整復師を育成するにあたり、柔道授業の教育上の位置づけを検討する。

【方法】

H 専門学校 J 学科に在籍する学生を対象に無記名アンケート形式の認識調査を縦断的に実施した。調査は 2019 年の 1 年次 (45 名)、2020 年 2 年次の (33 名)、及び 2021 年 3 年次 (35 名)の計 3 回を実施した。質問内容は「柔道授業によって向上すると考えられる身体」に関する項目を 10 項目設け、また、回答形式を[感じている]、[どちらともいえない]及び[感じていない]などとし、調査期間中、全質問に回答のあったものを有効とした。

【結果と考察】

アンケート結果は、単純集計して分析した。

1 年次では柔道授業が身体的影響を感じられた学生は、全項目の平均 63.1%であり、2 年次は 66.3%、3 年次は 70.0%であり、学年が上がるごとに[感じている]と答える者が増え、柔道授業による身体的影響を認識する学生が増加していた。柔道教育を行う指導者が柔道整復師であることが学生認識に影響を与えていることが考えられる。

【結論】

柔道整復養成学校生において柔道授業を3年間継続して行うことは、身体的 影響を与える教材として受け止められていることが示唆された。

ご存知ですか!

全日本剣道連盟が推奨するルールを礎に、

安全用具を推進。

賠償責任保険対象商品

SSPシール

1年間に100万本の竹刀に貼付



000001

Shinai(竹刀)Safety(安全)Promotion(推進)

■安全顎

突きから喉を守る







特許第5438204号

■アイガード

竹刀などの破片から目をガード!



アイガード

幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大用をご用意。 適正サイズの物をお選びください。

「安全対策の一つとして、初心者の剣道防具面には、必ず 備わっていることを推し進めています。」

■フェイスシールド

相手からの飛沫飛散の防止に!



フェイスシールド(一体型)

幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大用をご用意。 適正サイズの物をお選びください。

「対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」に対 応してフェイスシールド(一体型)を製作し、シールドの着用 を推進しています。



鲫全日本武道具協同組合

zenbukyo.jp/





剣道場床建築工房

https://kendoujou.com

English Site https://architecture-dojo.com Mail Address info@kendoujou.com

当社が施工する剣道場の床は、材料支給から施工・技術指導まで一貫してご提供いたします。

当社は環境保全のためにも国産無垢材を100%使用した弾性床構造の剣道場床を推奨させていただいております。 体育館などのウレタン塗装とは違って温かみがあり、適度にクッションの効いた安全性の高い剣道場の床をご提案いたします。

新設計で息スムーズ理想のマスク!



武道具の総合メーカー

株式会社 ヒロヤ

〒672-8048 姫路市飾磨区三宅2丁目26番地

TEL 079-234-2220 FAX 079-234-3300



森 武道具 株式会社

東京都中央区日本橋小伝馬町 6-12 電話:03-3661-0469

営業時間:9時-19時(土曜17時) 定休日:日曜日·祝祭日

お気軽にお問い合わせください。ショッピングサイトはコチラ→



(五十音順)

日本武道学会賛助会員

- ·全日本武道具協同組合 (以下、五十音順)
- ·株式会社 建武堂
- ·株式会社 五感
- ·株式会社 松興堂
- ・株式会社 ヒロヤ
- ·森武道具株式会社

第55回大会抄録集の発行にあたって

理事長 長尾 進

会員の皆様には長引くコロナ禍にありましても、ご清栄にご活躍と存じます。大変お待たせいたしましたが、日本武道学会第55回大会の発表抄録集(プログラム)をお送りいたします。今大会は、3年ぶりに対面での開催となりますが、開催校をお引き受けいただいた桐蔭横浜大学様に、厚く御礼申し上げる次第です。この間、オンラインによる開催も工夫され、学会としてノウハウを蓄積できましたことは有益なことではありましたが、やはり学会大会は単に発表の場にとどまらず、久しぶりに会う研究仲間とじっくりと語り合える場でもあります。会員皆様が旧交を温めつつ、最新の研究情報交換の場としていただけますことを祈念しております。

会長挨拶にもありますように、本部企画は、「中学校部活動の地域移行について考える」と題したシンポジウムが予定されています。運動部活動地域以降の背景や課題ついての理解を深める良い機会になることと思います。また専門分科会企画も、空手道、剣道、弓道、なぎなた、障害者武道の各専門分科会が、それぞれ興味深い企画を予定しています。これらの企画へも、多くの会員のご参加を期待します。

なお、令和4年度より公益財団法人日本武道館様からの助成を再開いただけることとなりました。その一環としまして、オリンピック・パラリンピックを機に増設された中道場棟の地下一階に事務局を置かせていただくこととなり、すでに事務局移転も完了しております。この場をお借りしましてご紹介しますとともに、改めまして御礼申し上げる次第です。

末筆ながら、コロナ渦の長引く苦境にもかかわらず、本抄録集への広告掲出を賜りました賛助会員の皆様に、心より感謝を申し上げます。

令和4年8月24日 印刷令和4年8月26日 発行

発行所 日本武道学会

発 行 者 大 保 木 輝 雄 〒 102-0091 東京都千代田区北の丸公園 2-3 公益財団法人日本武道館 中道場棟内 TEL・FAX 03-6269-9260 E-mail: budogaku@xj8.so-net.ne.jp 振替東京 102326

印刷所 株式会社ソウブン・ドットコム 東京都荒川区西尾久 7-12-16

電話:03-3893-0111



日本武道学会第55回大会事務局

〒225-8503 神奈川県横浜市青葉区鉄町1614 桐蔭横浜大学

E-mail: k.otsuji.toin.ac.jp

大会実行委員長 吉鷹 幸春

大会実行委員 廣川 充志 大辻 康太 高瀬 武志

第55回大会本部事務局:budokoho@gmail.com